
碧い空に向かって

泡泡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧い空に向かって

【Nコード】

N7164W

【作者名】

泡泡

【あらすじ】

血塗られた戦場から帰って来た青年が、久しぶりに会う顔馴染みとの日常と事件。

はたして彼らの行く末は……。現在“零の軌跡”へ

登場人物その1(前書き)

懲りずに書く

登場人物その1

主人公＋オリキャラ

名前：クロウ（偽名）理由は名前なんて名乗る必要のなかったから。

性別：男性 身長180cm 体重75kg

容姿：肩まで伸びている白髪を雑に革紐で結ぶ。顔はきつね顔の細い顔つきをしている。

性格：困っている人を助ける基本的にいい人。戦闘では冷静で変わりつつある戦況にも対処できる。

年齢：原作時24歳（本当は違うが）

戦闘能力：一对数千という圧倒的不利な状態でも擦り傷で帰ってくる事ができる。武器は2mほどの大剣だが切るといふより叩き潰すので鋭利ではなく鈍器に近いものを使用していた。

今は二丁拳銃になっている。本人曰く「非力な人が撃とうとしたら肩が骨折する」だそうだ。イメージ的にマグナムのような威力にデザートイーグルのような外見。

大まかな履歴

10代の初め頃から傭兵として戦場を駆け回りほとんど無傷で敵を倒していく様から沈黙の死神と恐れられた。その途中に“赤い星座”や“西風の旅団”との交わりたたかいを持って知り合っている。傭兵を

休業していたときに遊撃士のアリオス、ロイドの兄ガイ、カシウスなどと出会うことになった事件と一緒に解決した。

また結社とも何気に知りあいだったり、黒月にも顔馴染みがいるなど不明な点がちらほらと存在。

ロイド・バニングス

武器：トンファ

本当の主人公。捜査官の資格を持つためリーダー的な存在となる。兄弟には優秀な捜査官のガイがおり憧れて同じ捜査官の資格を持つ。

エリイ・マクダエル

武器：導力銃

クロスベル州の市長の孫娘。それゆえに政治に関する知識や国際情勢に詳しい。また市長の孫娘ということもあり多方面の友人を持つ。

ティオ・プラトー

武器：魔導杖

新型の魔導器の実践テストの為にエプスタイン財団から来た少女とある事件の生存者でロイドの兄ガイに救出される。休養中にガイとクロウと出会う。

ランディ・オルランド

武器：スタンハルバード

元警備隊の出身。クビになった理由は女性関係とされているが本当は訓練でライフルの使用を拒否したため。

本名「ランドルフ・オルランド」獵兵団の一つ“赤い星座”の一員。その時クロウと出会っている。

登場人物その1（後書き）

書いちゃった・・・

第1話「とある出会い」(前書き)

完全オリジナル

シリーズ&「零の軌跡」に対するネタバレ少々

題名変更

第1話「とある出会い」

オレが戦場に出たのはいつのことだろうか。多分数えて10になったくらいだろう。あの時は周囲の大人に知らずのうちに傭兵として登録されていたんだからな。

気が付いたら自分の手は血塗られ人間の皮を被った機械マシンになっていた。二つ名も付けられた時は諦めにも似た笑いが込み上げたものだ。

そんな時だったオレと同じように戦場で活躍しているランドルフに会ったのは……。

「よお、元気か？」ちよつと場違いな問いかけに驚いたのは覚えている。「誰？」そっけなく返事して早く出たかったのに「アイツ」ときたら「一緒に共同戦線張らねえか？」だって。

「はあ？」って聞き返したら相手は西風の旅団だから保険掛けたって本心言うんだ。ようはオレの力を借りて堅実に勝ちたいってことらしい。了承してランドルフと背中預けて闘った。

結果は、聞かなくても分かるかもしれないが勝った。今回の戦闘には“キリングベア”と呼ばれる人が手負いだったらしくそれもあって大勝になった。これでランドルフと別れた。

数年経って、とある事件が世間をにぎわせていた。それは子供たちが誘拐されるという事件だ。とても大きな事件だったらしく遊撃士、警察、軍隊が協力して挑んだ。

そこで、あったのが遊撃士のカシウス、警察官のセルゲイ、ガイ、アリオスらと出会い一緒に事件を解決へと向かうことが出来た。そのころには傭兵を一時休業していたおかげもあり、少しは人間らしく行動することが可能になっていた。

この事件はとても後腐れの悪い展開で終了した。行方不明になっていた子どもたちはほとんど全て亡くなりガイが助けられることが出来た女の子も何年の間病院で休ませなければならなかった。

突入し犯人たちを確保しようとするを持つていた劇薬を飲んだり舌を噛み切ったりして自害する人が多かったのだ。助けられた子供は一人だけ、とカシウスらは思っていたようだがオレはもう一人助かった女の子に会っていた。

それは、仲間とは別の気配を二つ感じたからであって逃走する犯人かと思いきりかかった時にわかった。“結社”に所属している二人が偶然、事件現場にいて衰弱した子供を保護したというのだ。

「あんたらは。犯人か？」と警戒した状態で尋ねると「違う、この子を保護した」と黒髪の少年が言い、銀髪の青年も同意した。「分かった、ここにいた子供は二人を除いてすべて亡くなった。だからその子を早く安全な場所で保護してくれ」と言うで一瞬息をのんだ様子を見せ頷いてくれた。

名前を聞くと黒髪の少年がヨシユアと言い銀髪の青年はレオンハルトと告げたことには驚きすぎた。だって“漆黒の牙”と“剣帝”にあったからだ。ついでに自分の名前を言うと「闘わなくて本当に良かった」だってさ。オレ……何かしたかな。

続く

第1話「とある出会い」(後書き)

誤字・脱字や意見があればどうぞ

第2話「無理！だから逃げる」(前書き)

オリキャラの過去です。

少し“空の軌跡”や“零の軌跡”のネタバレやクロスがあります。
あと時間軸が都合良いようになっていますが目をつぶってください

第2話「無理！だから逃げる」

クロウサイド

そのあと、カシウスの元に戻るとどこに行っていたか聞かれたが犯人の残党を探していたと誤魔化した。そして、ガイが助けた女子をレミフェリア公国まで一緒に付き添っていったがやっぱり家族のもとには戻れなかった。

悲しいことに助けた女の子テイオには常人には感じ取ることが出来ない感応力を持って“しまった”ので家族と元の鞘には戻れなかったのだ。家族に避けられたことで感情をなくしてしまったテイオの休養のために聖ウルスラ医科大学に入院させた。ガイの看病によって少しずつ感情を取り戻しつつあった。

オレには無理だった。当たり前だよ。少しの間傭兵から遠ざかっていたって人間の根本が普通と違うんだから、ガイがテイオを少しずつ元に戻していくのが眩しかったから適当な理由付けて逃げた。

テイオとガイを前にして「オレ、明日から仕事出来た。だから一緒にウルスラにいれないんだ、ごめん」って感情を出さずに言った。ガイには上手く言えたみたいだけどテイオは分かったような顔をしていた。それも、見たくなかった。機械マシンみたいな傭兵やっていたころよりも人間になれていたのかと自分で驚いていた。悔しいと羨ましいが混沌していた。

別れてから数年経った頃だった。ガイが殉職したのは・・・

。

慌てて葬式に着いた時、アリオスやロイド、ガイの婚約者を見た。自分にはどうすることもできないと思っていたがあの時、別れずにいたら違う結末もあったんじゃないかと自分を責め続けた。

これからという時に亡くなったみたいだが、証拠が無く未解決事件として終わりそうだというもの、すごく悔しかった。

だからクロスベルを離れてリベールに旅に出た。理由？理由は自分探し！！

あつ笑った？まあ傭兵で転々と人を殺しそして遭遇した生存者を救った男に一方的な悔恨を抱いてその男が亡くなったら、自分探しって……。自分でも嫌になるよ。でも、リベールで何か起こりそうな予感があるんだよ。

続く

第2話「無理！だから逃げる」(後書き)

過去編ですがちよつと長くなりそうです。
ご感想をお気軽にどうぞ

第3話「その出会いは……」（前書き）

リベールで出会う主要人物とは……？

第3話「その出会いは……」

リベールに着いて行きたかった場所が二つある。一つは王都グラ
ンセルでもう一つはカシウスの家だ。カシウスから「良いところだ
から是非おいで」とも言われていたしね。

それで王都に最初に行くことに決めた。それは古代の城壁に囲ま
れ政治と文化の中心地だったからだ。それに闘技場もできることな
ら参加してみたいと思っちゃったりして。

まあ結果から言えば闘技場は開催されていなかったの、グラン
セル城を見て感激しただけで終わってしまった。リベールの地方は
とても風景が良く散策にうってつけだったので、何を考えたかカシ
ウスの家まで歩いて行こうとした。

そんな中クロウが知らないだけで思わぬところで事件は進
展しているとは思ってもいなかった。

ちなみにクロウは本来はあり得ないことだが、カシウスと一緒に
誘拐事件を解決へと導いたことでA級の正遊撃士（実際にはS級）
になっていたりする。これは傭兵よりも遊撃士という職の方が何か
と便利だと言い切られていたに過ぎなかったがクロウは信用されて
いることに驚きつつも嬉しかった。

海港都市ルーアンにたどり着くと海の匂いととも魚介類の料理
を堪能したり港の倉庫にたむろっていた不良とひと悶着あったりと、
とても有意義だった。

珍しいことに空高くにハヤブサがいたことに何か良いこと起きそ

うだと、足を速め郊外へと歩いて行った。すると、街の人に何となく聞いたエリート校のジェニス王立学園の生徒らしき女の子が足早に出てくるのとぶつかつた。

「す、すみません、急いでいたものですから……。」とショー
トカットの女の子。上品な立ち振る舞いから、上層階級の出だと思
つたが凝視するのも悪いと思ひ手を差し出して「こつちこそ、前を
よく見ていなくてごめん。どこか痛いところない？」と聞く。平気
ですと答えてまた走っていこうとしているので「オレ、遊撃士だか
ら送って行くよ。どこまで？」と下心半分で聞いてみた。

迷っていたが「じゃあお願いします。私の名前はクローゼ・リン
ツと申します」と微笑みながら挨拶してくれた。ドキとしたの
は誰でもそうなると思う。「クロウだ。B級の正遊撃士です」と顔
を見れずそっぽを向いて返事を返してしまったのはしまったと感じ
た。

行先はマーシア孤児院つて所だ。ここにはクローゼがいつもお世話
になつているところと言つてた。いきなり頭上からハヤブサが降つ
てきたら驚くつて。クローゼが飼っているジークつて言うシロハヤ
ブサで警護？みたいな存在、ああ……オレ必要なかつたかもつ
てちよつと落ち込んだら大丈夫つて言つてくれて安心したのは秘密
だ。

「着きました。ここがマーシア孤児院です。送つてくださつたお
礼にどうぞ中に入って休んでください。何か御馳走しますので。そ
れとも何か用事がほかにありますか？」と不安そうに上目+涙目で
見る。おいおい、これは反則だ。こうならないようにわざと不器
用に送つたつてのに。

「分かり・・・ました。一緒に少し休んでいきます」と楽しそうに言わなきゃならなかったのにあまり人と交わったことがないものだから、また不快にさせかねない返事をした。

孤児院ではクロウはどう変わるのだろうか？

続く

第3話「その出会いは・・・」（後書き）

恋愛要素を少し含みますがはじめてですのでこれがいまの限界です。
零の軌跡にはまだ至りませんがどうぞご覧ください

第4話「ある意味運命の・・・」(前書き)

マーシア孤児院でのひと時です

第4話「ある意味運命の・・・」

こじんまりとした畑が敷地内に広がり、木造建ての孤児院が見えてくる。外の畑では孤児院でお世話になっている子供たちが見えた。オレにこんな時代あったっけ？って考えても思い出すのは傭兵時代しか思い出さず自分が嫌になった。

「あの〜大丈夫ですか？」ふと、我に返ると不思議そうにクロウの顔を覗き込むクローゼの顔が至近距離まで近づいていた。かあつと、顔が赤くなつていくのが自分でもよくわかった。「なんでも、ない。ただ、自分って子供の時何してたかなって考えていただけだ」赤くなつた顔を隠してクローゼの問いをかわした。

（あれっ、今のクロウさんの顔なんだか寂しそうだったな。これは聞かない方がいいよね）クローゼはそう判断し孤児院へと足を向けた。「みんな〜来たよ！元気になっているかな？今日は遊撃士のお兄さんも一緒に来てくれたよ。」と言って畑にいた子供たちのところに走って行った。

（ははっ、今の顔に出ているんだろうな。クローゼって案外人の感情に鋭いのかもしれない。でも助かった。子供の時から傭兵で何万人も倒してますって、言えないもの。今だけは平和を満喫してもいいよね？）難しい思考を一時的に消してクローゼのところに行く。

「なあなあ、兄ちゃん強いのか？」「えへへへ、いらっしやい」など、子供たちのパワーに圧倒され、たじたじになっている時「お客さんを困らせていけませんよ。クローゼそして初めていらっしやつた方を歓迎します」と中からエプロン姿の女性が現れた。

中に通され大きなテーブルについて自己紹介することになった。エプロン姿の女性が責任者らしく最初に紹介した「私はここで子供たちの世話をしています。テレサと言います。そしてクラム、ダニエル、マリイ、ポーリイの四人がここにおります」家庭的でほんわか良い雰囲気のところだと思った。

「自分はクロウと言います。B級の正遊撃士を務めております。ここには通りすがらクローゼに誘われたので来ました。家庭的で良い場所ですね」この平和はほかでは類を見ないかもしれないとまで思うようになった。

「ありがとう、クロウさん。あなたがそう思っただ下さるなんて」とテレサは微笑みクローゼも花が咲いたように笑った。（可愛いな。この子と一緒にいると気分が落ち着く）

長く時間を過ごしていたいから「何か困っていることなんてありませんか？」と普段は言わない遊撃士らしいことをしようと思ったのも魔が差したのかな？

聞くところによると隣村のマノリア村に用事があるって言うのでクローゼと子供たちが一緒に来た。（子供邪魔って言えないですよ！）一人の子クラムが耳元で「兄ちゃん、クローゼお姉ちゃんの惚れてる？」って聞かれた時は顔に出てたかなって思いながら恥ずかしくて追いかけた。マノリア村に着くとクラムがいなくなっていた。

ほかの子供たちはいつものことって決めつけていたけど仕方がないから探すことにした。すると、前から来た男女二人組に出会った。女性の方は太陽のように笑顔が素敵な女の子で男性の方は落ち着いた様子を見せながらも、談笑しながらこっちに向かっていた。

ある意味、運命の出会いをするまであと少し

「すみません。ここらで帽子をかぶった男の子を見ませんでしたか？ちよつと探しているんだけど」と声をかけてみる。「いや、見てないよ。エステルはどう？」と男の子が隣の子に言う。「ん、あたしも見てないよ。ごめんね。一緒に探そうか？いいよねヨシユア」まあ、一人で探すより良いだろうと考えて三人でクラムを探していた。

「さつきも白い服着た女の子に同じようなこと聞かれたんだよ。知り合い？」とエステルが聞いたので頷いた時、横からぶつかる男の子がいた。

「わわっ、キミ大丈夫？」と男の子に言うと「ああ、大丈夫。でもアンタたちこらで見ない顔だね。どこから来たの・・・？あつ、クロウ兄ちゃん。やばっ」と、横にいたのがクロウに気づいてまた走り去った。

(あいつ、今盗ってつたな。懲らしめないと)「ねえ、エステル大丈夫？」ヨシユアがエステルに起き上がらせながら尋ねる。「うん、平気平気!」「そうじゃなくて何か無くなったものない？」自分の持ち物を一つずつ確かめていって大きな声で「あーっ、遊撃士の紋章がないーっ。どこかに落としたかな？」おろおろするエステルもなんだか面白いつて思った。

「さつきまでは持っていたでしょ。って事は考えられる原因は一つだけ分かる？」ヨシユアは自分で答えを出そうとするのではなくエステルに結論を出させるつもりなのだろう。

「ま、まさか。さつきぶつかった時に盗られた？」真っ赤になって怒るエステル。「そうとしか考えられないよ。クロウさん、さつき

の子がどこに行ったかわかりませんか？」ヨシユアは落ち着いてク
ロウに聞く。「ああ、分かる。マーシア孤児院ってところだろうよ。
そこが家だから」

意気込んで大股でずかずかと歩いていきヨシユアは苦笑を浮かべ
ながらそれに着いていく。クローゼにも途中で会ったので先に孤児
院に戻っていると伝えてエステル達を追いかけた。

(だれかに雰囲気似ているなエステルっていう子)

「ねえ、君たちのフルネームってなんて言うの？」孤児院に行く
道すがら聞いてみた。「あたしたちはブライトっていうんだよ。エ
ステル・ブライトとヨシユア・ブライト。血は繋がっていないけれ
ど、どうかした？」こんなところで絆は繋がるのかと目頭が熱くな
るのをこらえきれなかった。

「あとで教えるよ。それにしてもヨシユア、君とどこかで過去に
会っていない？見覚えがあるのだけでも」多分、誘拐事件の時の
黒髪の少年と予想していたのだけれども……。

「すみません。初対面だと思います」ときっぱり言われると違う
のかなと少し残念だった。

マーシア孤児院でのいざござはクラムが一方的に悪いって事でテ
レサから懲らしめをもらった事で終了した。さて、クロウがエステ
ルに過去を話す時が来た。さあエステルはどんな反応を示すのだろ
う。

続く

第4話「ある意味運命の・・・」(後書き)

伏線作りすぎたかな。

第5話「カシウスは仲間で恩人」（前書き）

カシウスとの出会い

第5話「カシウスは仲間で恩人」

「あれは仕事がひと段落して休業している時だった。クロスベルとリベール地方で大掛かりな事件が勃発していたんだ。それにはとても大勢の人手が必要でその時には軍隊・警察官・遊撃士と一緒になって解決に当たらなければならなかったんだ」

「その時クロウは何の仕事をやっていたの？」エステルは空気読めない子らしく過去の傷をえぐった。ヨシユアとクロローゼは何か直感的にクロウの過去は深いものと判断してあとで聞こうよ、と話題をそらしてくれた。

「話を続けよう。ちょうど、カシウスと出会ったとき少しでも人手が必要と分かったので事件解決に協力した。それはそれは大掛かりで緻密な計画を立て実行した」

「それで事件は解決したんですよね？でも、どうしてクロウさんの表情は暗くなっているのです？」と恐る恐る聞いてきたクロローゼだったが次に発した返事を聞いて真っ青になった。

「事件は一応解決という形をとったよ。だけどね、数百人の子供が生体実験の犠牲になって助からなかったし、犯人はほとんど全員が自決。薬を飲んだり舌を噛み切ったりして死んでいたんだよ。そして助かった子供は報告によればたったの一人だけ。病院での療養を強いられている。こんなのが結末だよ。誰も助からなかったに変わりないといってもおかしくはない……」

「っ。そ、そんな。生体実験なんて許されてはならないことです。罪もない子供たちが犠牲になったなんて……」声を震わせなが

ら涙を隠すことなく流すクローゼ、エステル。ヨシユアはぐつと唇を噛んで悔しさをあらわにした。

「暗い話はそこまでだ。カシウスはその事件に協力してくれたお礼にと遊撃士への紹介状を書いてくれて晴れて遊撃士という職に着くことが出来たんだ。前は放浪者みたいな感じだったよ」（傭兵なんて言えない。まだ心が純粹なのに言う必要もないだろう）

ほつとした様子の三人だったがエステルとヨシユアの様子には笑顔の裏に暗い表情が見え隠れしていた。「ところでカシウスは元気か？」と軽く言った言葉に二人は息を詰まらせた。

「行方不明なんです。それで真相を確かめるために準遊撃士から遊撃士になるための旅も兼ねてお父さんを探そうかと思っています」
暗いながらも確固とした意志をもって伝える二人がいた。

「そうか、カシウスなら大丈夫だと思うが二人とも頑張って遊撃士になるんだよ」と励ました。クローゼが少し蚊帳の外になっていたが「お二人とも頑張ってください」と励ましの言葉を送った。

〜その後〜

いったん三人とは別れて一人で行動することにした。着いて行っても良かったかもしれないが太陽のように眩しいエステルと純粹な花のように明るいクローゼとは世界が違つとまた逃げた。一緒にいればいるほど自分の闇がじわじわと心を蝕み感情に鍵をかけなければ闇で押しつぶされそうになったからだ。

自分はなんて弱い人間なのだろうか。改めて再認識させられた。消極的な感情が足元から浸食を始めていた。ガイの時のように後悔するんじゃないだろうかと思っ—緒にいようとも考えたが駄目だった。光と闇。水と油のように相容れぬ存在なのだから。

ここから先は過去を伝えようにもどこをどう歩いて旅をしたのかよくわかっていない。だが、王都が危ない時に再び戦場へと向かうクロウだった。

続く

第5話「カシウスは仲間で恩人」(後書き)

次は主人公無双入るかも。
戦闘シーンがんばります

第6話「気持ちの変化」(前書き)

戦闘少し。

オリキャラとクローゼの気持ちが・・・

第6話「気持ちの変化」

三人と別れてからの話を少ししよう。何のトラブルにも巻き込まれなかったのでカシウスの家に辿り着くことが出来た。でも、家主がいないので外から雰囲気満喫した。ロレントで一泊することにしたのだが、食事をしようと立ち寄った食事処に酒豪が二人いたことには驚いた。しかも遊撃士とその受付嬢が酒豪だったのだ。浴びるように飲む姿は一見の価値ありとおこづ。

でも、周りは動じることなく食べたりしていたのでこの風景はいつものことなのか、と自分で納得していた。次の日にロレントの遊撃士協会に顔を出すと二日酔いなんてどこ吹く風のように笑顔の受付嬢がいた。自分の名前と階級を言って（A級）カシウスの事を聞いてみた。

しかしエステルたちから聞いた情報と大差なかった。違うのは乗っていないかつたんじやないかということだった。あと、エステルたちが色々な事件を解決して正遊撃士になるのも時間の問題という事を聞いてさすがカシウスの子供と自分のことのように嬉しかった。

でも、最近王都の方が騒がしいので気をつけるように忠告された。心配になったクロウは王都に向かうことにした。脳裏に浮かぶのはクローゼの事。

情勢を知ろうとリベル通信（新聞のようなもの）を見た。すると、エステルとヨシユア、A級の遊撃士ジンと聞いたことないオリビエと言う四人で闘技場で行われた試合に勝った事が載せられていた。ひとまず安心だろうと思ったが王都を包む違和感が漂っていたので注意して潜んでいた。

するとリベール軍の「情報部」に所属するリシャル大佐がクローダーを起こそうとしていた。何が起きるかわからない中でクローディア王女たる人が“エルベ離宮”に軟禁されていることを情報部が漏らしていたのを聞いた……。いや拷問して聞いたが正解になる。

少数精鋭で人質救助作戦を行っていたエステルたちに秘密裏に援護しようと思つて、着いて行った場所にクローゼが……。いた。正式な名をクローディア・フォン・アウスレーゼと言ひ王位継承者第一位の立場だった。

そんな表舞台に立つ人ならば自分は無理だ、この思いを秘めたままにしておこうと思つていたがまだ拘束されていない犯人が五人いたらしくクローゼに向かつていった。この状態では誰も間に合わない。と思つていた時……。

クローゼサイド

私は少し気が抜けていたのかもしれませんが。エステルさんやヨシユアさんに会えて。もう犯人がいないと思つていたせいもあったのかもかもしれません。雑談をしていると重斧を振り上げて向かってくる敵二人と銃を構え今にも撃とうとしている敵三人に気づきませんでした。エステルさんたちも間に合いそうにありません。ここで死ぬのかな？最後に会いたかったな……。クロウさんに。

目をつぶって衝撃が来るのを待つていましたがいつまで経つても訪れません。目を恐る恐る開けてみると会いたかった人が守るように立っていました。その後のことは一瞬でした。

クローゼサイド終

振り上げた重斧を素手で叩き割り、抜き手で心臓部分を貫き絶命させるともう一方の斧を持っている敵に肘打ちで昏倒させ両手両足の骨を砕いたのだ。銃を持っている三人に対しては小刀を投げ怯んだすきをつけて、首を捻ったり骨を砕け散らせ、残った一人は銃を乱射したが無命とつぶやくと一瞬のうちに命の鼓動を止めていた。

つい、傭兵時代の冷血さが戻って殺したようだ。一人は尋問用に残すことが出来たが一人残らずであればここにいる全員が吐くなり嫌悪感を抱くことになっただろう。また自分に対して劣等感を抱いていると後ろから抱きつかれたような感触があった。

クローゼだ。「良かった、また会えた。もう会えないかと思った」とクロウの背中に顔をうずめて涙を流した。人前だから恥ずかしいんだけどな。と思いながら守れて良かったと思う自分がいて満足した。

ピューイと鳴くジークに気が付くとユリアという王室親衛隊の人がじとーっとした目で見ていた。エステルやヨシユアも気まずそうにしていた。あははは・・・と、誤魔化してみたものの誤魔化しきれずにクローゼに離れてもらった。

クローゼに会ったのは偶然であることと王族であっても何か関係を変えようと思っていないことを誠実に伝えるとユリアの信頼は得られたようだ。クーデターが終わったら改めてグランセル城を訪ねることを約束してその場を去った。

加わらなかつた理由？クローゼ達には後方からの援護に回るよって言ったけど本当は、血の匂いを嗅いでいたら過去の傭兵時代に戻

りそうになつたからだ。傭兵の時に全滅させる任務を繰り返した影響で変わったのさ。血の湖を歩くが如く人を亡き者にしていたからね。

遊撃士と言うのはトドメをささないで無力化して逮捕のような形をとるけれどそれが無理なんだ。だからいったん、自分を自制するうえでも表舞台から消えないとね。エステル達は強くなっているから解決するでしょ。

クローゼサイド

もう会えないと思っていた人が間近で守ってくれたことに嬉しさを隠せなかつたけど、あの時クロウの目は濁った眼をして人を殺すのに躊躇いを持っていなかったな。ちょっと怖いけど私を守ってくれたんだもの。気が付いたら走って背中に抱きついちゃったノ／＼あー恥ずかしかつたけど私の気持ち少しは気づいてくれただろうか？これが好き・・・って事なのかな。

一緒に闘えないのは残念だけど終わったらグランセル城に来てくれるって言うてたから告白・・・しようかな。

クローゼサイド終

第6話「気持ちの変化」(後書き)

これが限界です。

ご意見はお気軽にどうぞ。

登場人物その2（前書き）

オリジナルと原作が混じっていますのでご注意ください。

登場人物その2

エステル・ブライト

武器：棒術具

ロレント地方出身の遊撃士。最初は準遊撃士となったばかりの新米だった。父カシウスの行方不明をきっかけにヨシユアと一緒に旅に出る。口癖は「あんですつてえ〜」

ヨシユア・ブライト

武器：双剣

エステルの義弟にあたる遊撃士。幼いころにカシウスに拾われて養子となった。リベル地方では珍しく漆黒の黒髪に琥珀色の瞳をもった少年。“漆黒の牙”と言う異名は結社にいたころの通り名。

クローゼ・リンツ

武器：剣

王立ジェニス学園の生徒。シロハヤブサのジークがいつも近くにいる。偽名を使い素性を隠して学園に通うが本当はクローディア・フォン・アウスレーゼと言う王位継承順第一の姫殿下。この物語では主人公クロウのヒロイン。

〜これから出るか未定の人物紹介〜

オリビエ・レンハイム

武器：導力銃

エレボニア帝国から来た自由気ままな演奏家。クローゼと同じように素性を隠しているが本名はオリヴァルト・ライゼ・アルノール。庶子であり皇位継承権からは離れているが帝国の皇子だ。

ジン・ヴァセック

武器：手甲

不動ふどうのジンの異名を持ち大陸全土で20数名しかおらず公式には最上級とされるA級の正遊撃士。

ユリア・シュバルツ

武器：剣

族の護衛を務める王室親衛隊の中隊長という立場。またクローゼの護衛兼養育係でもある。この物語ではクロウとクローゼが仲良くなっているのをハラハラしながら見守ろうとしている様子。

レン

武器：大鎌

犯罪者組織で虐待を受けていたところを結社の任務で組織を壊滅させた剣帝とヨシユアに助けられて結社の一員になる。この物語でクロウとどう関わってくるのか？

カシウス・ブライト

エステルの実父で、大陸全土に4人しかいないS級遊撃士の一人。この物語ではクロウを含めて5人という設定。《剣聖》と呼ばれる剣の達人であったが、遊撃士になった折に剣を捨てて棒術を扱うようになる。軍・遊撃士・警察が協力して解決した事件の総指揮者でもありそのときにクロウと出会う。

登場人物その2（後書き）

書いているうちにワクワクが止まらない。

歴史表（前書き）

おおまかな歴史を載せます。作者の妄想暴走中もありますが見逃してください。

オリジナルには をつけます。

年代は七耀曆しちようれきと読みます

歴史表

七耀暦以前

古代ゼムリア文明の破局により謎の現象大崩壊が起きる。

クロウがこの地にいるようになる。本名：クロー・シュッツ・リベール

七耀暦0年頃

リベール王国誕生。諸説は不明だが、大崩壊後に誕生したのが有力な諸説だ。

クローが名付け親。自分の名前を使いリベールとした後、クロウと名乗ることにした。

七耀暦1150年

導力革命と呼ばれるオーブメント技術の開発。そして生活は一変する。

クロウただの眠りにつく。

七耀暦1157年

カシウス・ブライト誕生。

七耀暦1162年

アリシア？世がリベール王国に即位する。このとき女王20歳。クローゼは孫にあたる。

七耀暦1174年

アリオス・マクレイン誕生。

七耀暦1175年

ユリア・シュバルツ誕生。

ガイ・バニングス誕生。

七耀暦1177年

エレボニア帝国・皇帝の庶子・オリヴァルト・ライゼ・ユーゲント誕生。

七耀暦1181年

セシル・ノイエス誕生。のちにガイ・バニングスの婚約者となる。

七耀暦1183年

ランデイ・オルランド誕生。

七耀暦1184年

クロスベル市・ジオフロントを計画、建設

七耀暦1185年

ヨシユア・アストレイ誕生。

七耀暦1186年

カシウス・ブライトの長女エステル誕生

クローディア・フォン・アウスレーゼ誕生。

ロイド・バニングス誕生。

エリイ・マグダエル誕生。

七耀暦1190年

ティオ・プラトー誕生。

レン・ハイワーズ誕生。

クロウ目覚めるが全ての感情を失い外見は10歳ぐらい

七耀暦1197年

カルバード共和国で大規模な誘拐事件発生。カシウス・ブライトが総指揮とる。

クロウが表舞台へと登場。その後遊撃士になる。17歳

ヨシユア・アストレイがブライト家に保護、そのち養子となる

七耀暦1201年

ガイ・バニングスが殉職

七耀暦1202年

エステルとヨシユアが準遊撃士の旅立つ。

歴史表（後書き）

オリジナル要素が少ないですが。

あと資料の元は年表を見ながら書きました。

作品を読むうえで参考にしてください。

クロウの誕生ですがどこかに紛れ込ませるのが難しかったので、だつたらいつそのこと七耀暦が始まった時に誕生したことにしてしまおうと思いついたのでそうした次第です。

温かい目で見守ってください。

第7話「告白と黒幕登場」(前書き)

空の軌跡FCの佳境にクロウを追加させます

第7話「告白と黒幕登場」

クローゼを助けた後のことを話そう。たぎった血を冷ますためにクーデターに参加した特務兵を数百人狩った。普通は冷却効果なんてないのでは、と思うかもしれないが倒すことで我に返れるのだ。

そうこうしているうちに遊撃士のメンバーはグランセル城の地下に隠されている空中回廊へと進んで行ったようだ。最下層にいたのはリシャル大佐だった。激戦になっていったが勝利をおさめた。

しかし、トロイメライと言う自動迎撃兵器が作動。疲れ切った体に鞭打って闘い抜いたが最期にリシャルが捕まってしまふ。

「君たちに負けた時にすでに命運は尽きていたのだよ。最期に君たちを助けられれば後悔は・・・しない」諦めにも似たりリシャルの呟きが聞こえてくる。

「やれやれ、諦めなければ必ず勝機は見えると教えたはずだが」
渋い男性の声。

「全くだ。師匠の教えを忘れるなんて酷い弟子ですね」と飄々とした青年の声。

せいっ　走りこんできたカシウスがリシャルを掴んでいた腕を切断。クロウが言霊を紡ぐ「我に仇名すものの動きを止め敵対せし者に立ち向かう勇敢な者に癒しを」

動こうとしても動けないトロイメライ、そして少しでも体を動かそうとすると激痛が走った体の痛みが全て消えている。

「諸君！今だ。トドメを刺しなさい」と言うクロウの声に合わせて一斉攻撃で終わりを迎えた。

（それにしても、トロイメライが動いて迎撃行動をとるとは・・・。それに輝く環はどこにいったんでしょか？まさか“結社”の誰かが盟主の命令を無視して行動しているのだろうか？でも今日ぐらいは平和になったリベールを堪能するのも良いかもしれないな）

横では呆然としてカシウスが軍を離れたことに対して不満をぶつけているリシャルがいた。

それを殴り飛ばして「甘ったれるな。リシャル。貴様の間違いはいつまでも俺と言う幻想から解き放たれなかったことだ。それだけの才能がありながら、なぜ自分の足で立とうとしなかった？俺はお前がいたから安心して軍を辞めることが出来たのだぞ！」とカシウスは自分の思いを吐露する。

こうして情報部によるクーデターは幕を閉じた。計画に加担していた特務兵は各地で次々と逮捕されていったが、何かに脅えている様子には首を傾げるしかなかった。

そして1週間後・・・。王都では無事生誕祭を始める事が出来ていた。

「約束通りおばあ様に会っていただきますよ。クロウさんの事を紹介したいんですもの」と逃げようとしたクロウを王室親衛隊が捕

まえクローゼと一緒に女王のもとに向かうことにした。

（前にも言ったが上目+涙で「私のこと嫌いですか？」って言われてみる。嫌いじゃないから逃げられないだろう。あくもうつ、女々しい自分が嫌だ。）

とうとう、アリシア女王がいる部屋の前に立つ。静かな声で「どうぞ、お入りになって」と聞こえてくるので「失礼します」と入ってみた。そこには物柔らかな女性がテラスのほうでクローゼとクローゼを待っていた。

「クローゼがこんなに女性の顔をするなんて珍しいことね？ふふっ、王都から離れている時に何かあったのかな？」と女王。茶化しながらも目は真剣そのものだ。多分、自分とクローゼにとって敵になるのか品定めしているのか。

「初めまして。私の名前はクローゼと申します。アリシア女王にお会いできてうれしく思います」やはり、自分の本名を言うことには少しの抵抗があった。少し歴史を調べたら分かってしまうことだけれど、今はまだ……。

「私が初めて会ったのは学園の前でぶつかった時よ。孤児院に案内したらそこで寂しそうな顔をしているのが気になって、そうしているうちにいつの間にか考え続けていたのよ。あとは離宮で守ってくれた時確信した……の」最初は八キ八キと話していたのが自分の気持ちに気付いたあたりから恥ずかしくなって声が小さくなってきた。

「あなたが考えて望んだことにわたしは反対しません」とあっさり関係を許可された。

唾然としていたけど、クローゼは嬉しいみたいだ。クロウの手を握って正面から抱きつかれた。女性の小さい体がすっぽりとクロウの胸に収まる。

ああ……、付き合って本当に良かった。久しぶりの暖かい心を感じる。

初めて経験するであろう生誕祭を一人で回ることにした。クローゼと一緒にと言ったが思うところがあつたので申し訳ないが一人にさせてもらった。

エステルとヨシユアが歩き疲れたのか百貨店の横にある休憩所で休んでいるのを横目で見ながら露店を楽しんだ。

(さてさて今回の事件に絡んでいるメンバーは誰かなって。ん……あれは？ワイスマンじゃないか、やはりアイツが。関与していたのか)

ヨシユアが教授風の男性と話し合っているがどうも好意的ではなさそうだ。ヨシユアが双剣を抜きだし相對する。隠されていたヨシユアの記憶が元に戻されがっくりと項垂れる。

一言二言呟いてヨシユアのもとから去る。どうせワイスマンはヨシユアに固執していたから組織に戻れとか、勧誘していたんだらうね。おっと、こっちに気付いた。

「お久しぶりです。クロー様。こんなところで会えるとは思ってもみませんでした」と大仰に礼をしてくる。

「やめてくれ。それに今はクロウ、だ。それに様は付けなくていい。今回の黒幕はあんただな？」一瞥して冷たく接する。

「ええ、そうです。何か問題でもありますか？」「いや、ただやりすぎだと思う。盟主が望んでいないことまで行おうとしている。それは無視できない問題になれば介入する。ただそれだけだ」

「あとヨシユアは“漆黒の牙”で間違いないのか」という問いに對して頷いたのでそれを確認して別れ、城へと戻る。ヨシユアにはヨシユアの問題があるのでこれには口出しできないと思ったからだ。

豪華な夕食の後、クロウはクローゼの隣の部屋に泊まることを許されクローゼと話し合っていた。他愛もない話。おもにクローゼの学園生活についてどんな友達がいるのかを聞いていた。

すると、突然。空中庭園のほうからハーモニカの音が聞こえてきた。

「この音は……。ヨシユアさんのハーモニカの音ですね。とても綺麗です」

「そうだね、でもなんだか物悲しい音が聞こえてくるな。ちょっと、見てくるよ」クローゼの断りを入れて庭園へと向かう。嫌な予感があったからだ。

着くと眠りかけのエステルがいた。それを眺めているヨシユアも。

「どうしたの？ヨシユア」近づきながら冷静さを保ちつつ話しかけてみる。

「ああ、君か。やっと思い出したんだ全てを。だから僕を作った

魔法使いを止めないと思って思ったけどエステルというわけにはいかないから、ここで別れることにしたんだ」エステルの髪を優しく撫でながらクロウに話す。

「そうか。いつかこうなるとは思っていたって言ったらヨシユアに失礼かな。でも微力ながら助けにはなるよ」と上着から紙切れを一枚差し出す。

「これは僕の連絡先だよ。どうにもならなくなったときに連絡してくれ」

「ああ、ありがとう。じゃあ行くね」早足で庭園から立ち去るヨシユアを見送った。

ここに一つの過去話が終わる。

第7話「告白と黒幕登場」（後書き）

長いですがこれでFC終わります。

最初は零の軌跡だけで終わらせるつもりがどうしてこうなった？

SCは肝心なところだけ書いてクロウ入れて終わらせませす。

あとクロウと結社の伏線を入れましたが作者はただ今暴走中ですよ
お便り待っています

第8話「別れは人を強くする」(前書き)

ぐだぐだ感は払拭できません

第8話「別れは人を強くする」

あれからの話を少ししよう。朝目覚めてヨシユアがいないことに気付きたエステルはヨシユアが旅立ったのをカシウスから聞く。

自暴自棄になりながらもヨシユアがいなくなったことを信じられないエステルは、自分の家まで戻ってくる。ヨシユアがいると信じて……。ただ現実は厳しかった。ヨシユアがいなくなったことは紛れもない現実だったのだ。

カシウスは一度はヨシユアを追いかけるのを止めるように言ったがエステルの決意が真剣なのを知ると遊撃士協会の研修施設に行くように勧めた。そこは実力をつけるのに役立つからである。

それで、エステルはアネラスと言う同じ遊撃士とともにルロツクルにある研修施設へと足を向けた。帰ってくるころには何倍も強くなってくるだろう。

クロウはと言うとグランセル城で仕事が与えられた。どこの馬の骨とも思えないような人物がいきなりクローゼとアリシア女王に認められているのは城で働く人たちが認めなかったからだ。

S級の遊撃士と知っているのはアリシア女王とカシウスしか知らず、A級の遊撃士と発表されていたが活躍した事件も全てが一兵卒が知ることのできないような事件ばかりだったからである。

ハーメル悲劇が予定より早く終息したことにも関わっていたりカシウスが総指揮をとった誘拐事件に関わっていたことなどは迂闊に情報を流すならば逮捕という形をとっていたからだ。

だから目に見える形で成果を上げて全ての人に認められるようにしなさいと言うのが女王から出てそれに皆が同意した。断ろうとするとクローゼが出てきてぎゅっと袖を掴み 上目づかい 涙目というコンボでクローウのKOだった。

各地をまわり遊撃士の仕事をこなして人々の信頼を得てゆきなさいと言う、優しい女王の言葉に励まされてクローゼと別れた。クローゼも学園生活に復帰するみたいだしちょうどよかった。

ルーアンから旅を開始しようと思ったたらエステルとアガットに出会った。少しの縁があるのかもしれないが同行することにした。

ルーアンでは不気味な噂が人々の間を駆け巡っていた。それは“白い影”が夜な夜な街を徘徊しているという噂だった。これに3人はどう対処していくのだろう。

続く

第8話「別れは人を強くする」(後書き)

↳追加人物紹介↳

アネラス・エルフィード

武器：刀

ボースを拠点とする新米正遊撃士。祖父から「八葉一刀流」を学ぶ

アガット・クロスナー

武器：大剣

“重剣のアガット”の異名を持つ正遊撃士。カシウスに出会い遊撃士になる。

第9話「白い影前編」(前書き)

白い影前編

第9話「白い影前編」

噂にしかなくておらず、実害も出ていないのでギルドとしても調査と言う形で三人に頼んだ。最初の目撃者は倉庫街にいる不良たちだった。手合わせして買ったら情報を教えるという不良たちにアガツトが一蹴。手に入れた情報によると夜中酒を飲んで帰る途中に白い影がクルクルまわっていたのを目撃したというものだった。

二件目、エアレットンの関所にいる兵士だった。上司からは酔っていたと勘違いされて落ち込んでいた兵士だったが遊撃士が調査していると知って驚いていた。ここの兵士からも同じような証言を得た。

三件目、マーシア孤児院の子供たちが目撃者となった。ポーリイと言う子が白い影を見ていた。これもふわふわと浮いていてお辞儀をして消えたという証言を得た。

遊撃士協会に戻って得た証言を纏めてみた。すると面白い共通点が浮かび上がった。それは“白い影が去った方角”だった。共通してジェニス学園に向かっていたのだ。一行は学園へと向かうことにした。

クロウは浮かれていた。もちろん、それはクローゼに会えるためだ。会いに行くのではなく仕事で行くのが正解だが浮かれに浮かれていた。

エステル「どうしたの？クロウ。地に足が付いていないようよ」「アガツト「ほんとだぜ。クロウ何か悪いものでも食べたのか？精神科行くか」この時代に精神科があったのかは分からないが酷い二人

だ。それも聞こえていないクロウを加えてジェニス学園に着いた。

「ピューイというジークの声が歓迎してくれた。」「おおっ、ジーク久しぶり。」「ピューイピューイとクロウの周りを飛びそして肩に捕まる。

横ではエステルとクローゼが抱き合っていた。再会を喜ぶとともにヨシユアがいないことを嘆く二人だった。わたしは大丈夫！そうエステルは言っつてヨシユアを追いかける決意を強める。

その後生徒会のメンバーを加え一行は学園長の元へと行く。捜査の協力を得るためだ。許可を得た三人は問題の時間が過ぎるまで生徒会の部屋で会話をしつづつ過ごした。

その時クロウがなぜ浮かれていたのかを根掘り葉掘り問い詰められてクローゼと付き合っていることを教える羽目になった。皆は祝福してくれたがエステルの手前、素直に喜べなかった。

「あたしは大丈夫。今我慢して会えたらいっぱい甘えるんだもん」なんて心の強い女の子なのだろうとエステルを見ていたら嫉妬したのか横にいたクローゼから涙目でギョツと脇腹を抓られた。

ふと外を見ていたエステルがふらつと左右に揺れそして倒れた。どうしたのかと外を見るとそこには白い影が存在するではないか。消えた方向を見ると旧校舎の方向へ消えていった。

（あれは、ブルブラン。やっぱり結社が関わっているのか。どうして幼稚なのかは聞けばいいかもしれないがエステル達にはどうしようかな。まあ会ってから決めるかね）

エステル、アガット、クローゼ、クロウの四人で旧校舎へとむかうことにした。

第9話「白い影前編」(後書き)

説明口調で申し訳ありません

第10話「白い影後編」(前書き)

白い影後編

第10話「白い影後編」

ジエニス旧校舎内に魔物の姿はなく謎かけが幾度かあるだけだった。その謎を解いていくと地下に遺跡があることが分かった。恐る恐る中に入って行くとそこには得体の知れない魔物の姿が。

一番奥まで進むとそこには見たことのない機器の前に立つマント姿の男性がいた。よく見てみるとそれは人々の間で噂になっていた白い影の正体だった。

話を聞くと実験の為に投影器として影を生み出しており、それは成功したとのことだった。エステルたちが確保しようとする機械兵器が隣の部屋から出てきてとびかかってきた。

それを行動不能にするとその影の正体“ブルブラン”は影縫いと言う行動を制限すること技をかけて動けなくした。クロウにはブルブランはかけていないが。

あと少しで命の危険を感じた時、ドロシーというリベル通信の記者がカメラのシャッターを押したことで一瞬、影が消え動けるようになった。

ブルブラン「このようなどころであなたに会えるなんて。お久しぶりですね」去り際クロウに対して親密さを示しつつ言葉を投げかける。

「ああ、だが俺はBに会いたくなかったがね。ワイスマンに伝える。ヨシユアに固執すると行く末は身の破滅と。あとこれ警告」驚く他のメンバーに動じず手のひらに無詠唱で出したアイスジャベリ

ンを射出してブルブランの体を貫くが虚空に「了承しました」の聲が聞こえてきて無傷で逃げたことが分かった。

「ど、どういうことよ。今の人は知り合いなの？それにヨシユアのことって」

「クロウさん。犯罪者と知り合いなのですか？」

「てめえ、どういっつもりだ。返答次第によっては……」

「落ち着きましょう。私が旅をしている時に出会っただけです。ヨシユアはブルブランと同じ組織にいたのですよ。だからその関係で知っているだけ。あと返答次第ではって、アガット如きが私に勝てるとも思っているのですか？」

三者三様に答えを返していきアガットに対して半分にも満たない殺気をぶつけて意識を混濁させるまでにした。苦しそうに何とか意識を保たせようとしたがすぐに抵抗できずに石造りの床に昏倒した。

「まったく、頭に血が上っていると言っこと言っても聞いてくれませんか。さあ帰りましょう。ここには用はありませんし、アガットは私を持ちます」と、詠唱を始め重力操作してゼロに等しいまで軽くして運んだ。

第10話「白い影後編」(後書き)

↳登場人物追加↳

怪盗紳士ブルブラン

身喰らう蛇に所属する執行者??。

大都市を中心に盗みを働く怪盗。

「美とは誇り高くあること」という美学をもつ。

芝居がかった言動だが武術の達人でもある。

原作にオリジナリティを出すのが難しいです。

作者にとってこれが限界です。

感想待ってます。

第11話「盟主は女性？」（前書き）

オリジナルです。結社になぜ知り合いが多いのかあたりを書けたらと思います。

第11話「盟主は女性？」

ルーアンでの白い影の調査を終えた三人は次に向かったのはツァイス。ここでは頻繁に地震が起きているということだった。いままでは起きたことのない地震。そして局地的すぎる地震に違和感を覚えつつも向かうことにした。

だが、クロウは戦線離脱した。それは盟主から会わないかと誘われたためだった。このままでは敵ではないかと疑われると伝えると偽装したクエストを出すからそれを引き受けてほしいとのことだった。

ルーアンに一度戻ると非公式ながらもA級以上のクエストが発生していた。エステルたちは何の疑いもなく別れることができたが問題はクロウゼだった。

「大丈夫？怪我・・・しないでね。やっぱり私も行くのか」と最後までごねたのだ。今はたくさんの人からの信頼を得てそれから一緒になれるよ。と言った手前嘘をついていることに良心が痛んだ。

クエストを引き受けてルーアンの郊外に行くと執行者？0の姿が道化師カンパネルラだ。神出鬼没で戦闘には加わらず傍観者を決め込んでいるがいつも交渉を引き受けている。

「お待ちしておりました。クロウ様。どうぞこちらへ。盟主がお待ちです」と海岸に行くと飛行艇が止まっておりそれに乗りこむように案内した。乗るとかなりの勢いで空高く舞い上がって行った。

雲の上には戦艦クラスのグロリアスの姿が。ここが一時的な滞在

場所となっているらしく結社のメンバーも多数見受けられた。

道化師の案内で星辰せいしんのまの間に通され「アクセス」という言葉とともに盟主と通信が繋がった。

「では私はこれで失礼します。どうぞごゆっくりお話し下さい」
カンパネルラは炎に消えそこには盟主とクロウの二人だけになった。

「お久しぶりです。通信でしか会えないことを申し訳なく思っております」何だか堅苦しい口調が通信から聞こえてきて笑った。「あーっ、今笑いましたね？どうしていつもいつも……」少しずつ結社を作った当時の雰囲気が出てきた。

「ああ、久しぶりだな。盟主。いや　よ。でも堅苦しいことには相変わらずだと思ってるよ」と誰もが知らず知っていたとしても言うことのできない隠された本名を言う。

「っ、ようやく私の名前を呼んでくれました。」通信から聞こえる声がかくもって聞こえすぐ泣いている声に気が付いた。「泣いているところ悪いんだが俺を呼んだ理由を説明してくれ。仲間に疑われてしまう」自分の体裁ばかりを気にしているのにも人間らしくなってきた証拠なのだろうか。だが、ある意味で後戻りはできない状態まで陥っているのに。

「そうでした。えーっと、会いたいから呼んだ。では駄目ですか？もう私と対等に話せるのはあなたしかおらず寂しいんです」トツプともあるう者が……。と思っただけから弱みを隠さなきゃならず疲れていたのかと考えると親しみが湧いてきた。「少しの間ならいいよ。それで前回の疲れがとれるなら」その日一日盟主と会談で終えた。

「ところで風の噂で聞いたんですがグランセル城の次期王女と付き合っているのは本当ですか？」

「えっ、どこからそんな噂を」「本当なんですかね？」「そうだ」と言った瞬間通信がブツッと切られたのは言うまでもない。

第11話「盟主は女性？」（後書き）

盟主との関係は設立時に一緒にいたこと。その時はクロウが実質一位だったこと。

この作品では盟主は女性です。異論はあると思いますが女性で決定了。その方が面白そうだからです。

感想をお待ちしております。

第12話「力の片鱗」(前書き)

クロウは敵側ではありません。自分の計画の前に敵も味方も利用でき
るものは利用してしまおう的な考えです。

第12話「力の片鱗」

通信が切られた後、ガクツと床に両手を付き失言だったなと思いつつその部屋を後にした。去り際に「じゃあな。また来るよ。

」と短い一言を告げると一瞬モニターが瞬いて「はいっ！お待ちしております」と言うのが聞こえた。

星辰の間から出ると道化師がいて今日は遅いので泊まって行くことを勧めた。他の幹部クラスのもメンバーも集まっているらしくクロウがいることを知ると会いたいと言ったそうだ。

了承して食事をとるために大広間に行く。そこにいたのは執行者レキオンと呼ばれる実行部隊だった。欠員もいるが全部で、15人存在しその中には昔ヨシユアも含まれていた。

グロリアスの中にいたのはカンパネルラ、レーヴェ、レンの三人だった。

「お久しぶりです。最後に会ったのはヨシユアとロッジを壊滅させていたときでしょうか」

「うふふふ、おにーさん。久しぶり。元気だった？」

「ええ、二人とも変わりないですね。ここにヨシユアがいたらよかったのかもしれないが。今ここにいる執行者で楽しみましょう。ところで他の人たちは計画実行中ですか？」

「はい。そうですが。あまりクロー様には伝えることはできませんよ。曲がりなりにも遊撃士と言う立場なのですから」と道化師が

言つとレーヴェとレンは寂しそうに俯いた。

「そうだったね。ここにいとすっかり忘れてしまいそうになるから可笑しなものだよ。遊撃士と言つてもあなたたちが私の大切な人を傷つけない限り中立を保っています。ですからその一つだけを守るなら敵対することはありません」

「……えっ？大切な人がいるんですか？」「」 呆然として聞き間違いかと思つて聞きなおす。

「おいおい、失礼な。出来たよ。大切と呼べる人がな。今宣言しておくぞ。クロー・シュツツ・リベルはクローディア・フォン・アウスレーゼを好きだとね」背筋を伸ばし本名に言霊を乗せて宣言する。宣言したことでクローゼの身に何か生じた場合警告した後敵対行為が許されることになった。

クロウが言霊を含めた宣言は結社のメンバーの心に刻み込まれ宣言されたことに対して、何かしらの逆らつた行為をするときに呪いとして身に滅びを招かせる。軽微だと行動不能。重度だと激痛を伴つた死を招く。

「仰せのとおりにいたします。われらそしてここにいない執行者全員はあなたの宣言を受け、逆らつことをしません」三人は片膝をつき片手を胸に当てて従順と敬意をあらわす態度をとる。

ひとまず安心だ。この後は重苦しい雰囲気無くして食事と交わりをともし取り楽しむことが出来た。それにしても世を騒がす組織と一緒にいるのに良心が傷つかないこともあるんだな。

「ところでほかの人たちはどんなことをしている？」「簡単に言

いますとヴァルターが最初です。次にレン。ルシオラ。レーヴェと
なっております。クロウ様はどこかで友人とご一緒されますか？」

「うーん。そうだな。一番楽しそうな所に行くかもしれないが今
回は極力遊撃士と一緒に行動したくないよな。でも、成果を出さ
ないと女王に認められないし。うーん……」

「でしたら、こちらで計画を練って一石二鳥の案を出しましょう
か？もちろん傷つけることは致しません」と道化師が計画の案を出
してくる。

「分かった。だが、傷つけた場合警告後に容赦はしない」と言っ
て自分にあてがわれた部屋へと戻った。

「ふう。生きた心地がしません。あの方が伝説の方ですか。絶対
に敵対したくありません。計画に不備が無いか完璧にしないと……

」

第12話「力の片鱗」（後書き）

クロウの優先順位は1位クローゼ。2位盟主とその仲間。3位エ
ステルたちとなっております。

性格が分かりづらいのでぶれる恐れがあります。見逃してください。
い。

感想お待ちしております

第13話「出番は狙い通り？」（前書き）

色々飛ばしての悪役？と思う場面もあります。
が、全て計算ずくで行っている主人公でした

第13話「出番は狙い通り？」

次の日、自分に与えられた部屋の中で起きる。昨日、船の中を覗いてみたら色々と設定が弄られていておかしくなっていたので、そこらにいた雑兵に聞いてみた。

すると、ヨシユアに忍び込まれてギルバートと言う下っ端が応戦したがあっさり負けたこと。レーヴェが捕まえようとした時にヨシユアが機能の設定を弄っておかしくしその間に逃げのびたことを聞いた。

「へえ、ヨシユアがね。ふふっ良い仕事してるじゃない。ってことはヨシユアとエステルは一緒になったのかな。そろそろカンパネルラのところに行くか。計画でも建てたころでしょう」

「お待ちしておりました。計画はこれです」と紙を渡してきた。そろそろ、執行者の四人が王都に攻め込もうとするらしい。そこにクロウが女王と王女を守るために立ち向かうというものだ。

(何度も言いますが敵側ではありません。)

レン、ブルブラン、ルシオラ、ヴァルターが攻め込もうという時間間が迫ってきている。

「じゃあな、道化師。今回の計画ではもう会うこともないだろうが、元気で。あと見送りは良いよ」と甲板に見送りに来たカンパネルラをそのままにし、飛び降りた。

「な、なんて無茶をする。クロー様ですから心配はしておりませんが……。あつあれは。光の翼でしょうか。綺麗です」視界の隅でクロウが翼を広げて滑空しているのが見えた。

通常、粒子でクロウの服に纏っているのを展開することで防御や攻撃に使えるほかに、翼として空から安全に滑空することが可能になる。

王都では王国軍を吹き飛ばし悠々と入ってくる執行者の面々がいた。そしてそれを追いかけるようにエステル、ヨシユア、アガット、ティータが走って行った。

火の手が上がる王都の街並み。遊撃士協会では町の人々の避難先となっており城に行く前に、立ち寄って安全を確認しながら足をはやめていた。怪我をしている人も多数いるが命に別条はないような怪我しか負っていない。とりあえず協会の事はほかの遊撃士に任せ城へと急いだ。

グランセル城の大きく厚い門が閉まっている。が、それを全く問題にしないヴァルターが氣を充分に含ませた寸剋で一枚ずつぶち破って行った。

城内では親衛隊との闘いがあり、外ではエステルたちが突入しようとした時に機械人形兵器の足止めをくらっていた。が、ようやく勝利し遅れながらも城内へ入って行ったエステルたちの目に入ったものは守れずに傷つき倒れた親衛隊の人たちだった。命に別条はないようなので急ぎ空中庭園へと向かう。

そこで見た者は女王と王女を人質に取る執行者の四人だった。クロウもそれを超高高度から確認。ピキッと青筋とともに殺気が滲み

出るのは仕方がないこと。

「あーカンパネルラ？どのくらいやつちやっついていいの？」「えつと……」。適度な傷であれば良いと執行者にも伝えてあります」（もしかしてこの計画には大きな欠点があったのかも。あーこれが終わったら他の人から袋叩きにされるんじゃないだろうか）

（あー、久しぶりのクローゼだ。少しっというかかなり騙しているようで良心が痛むなあ。全て終わったら正直に打ち明けてやろうと）滑空しながら庭園の様子を確認した後、傷は付けていないから予定通りでいいか。

殺気を2割開放して上空から誰かに見られていると認識させた後、そのままの勢いで落下＋着地。そして執行者に斬りつけ全員の両肩の関節を一瞬で外していった。

（ここから茶番）

ルシオラ「あら？新手かしら。良い一撃だったわね」
ヴァルター「ああん？邪魔しやがって」
レン「おにーさん、結構やるわね。さすがA級遊撃士」
ブルブラン「あなたには美しさが足りない」

「……危なかった。道化師から聞かされなかったら命の危険大だったのでは」「」「」

（茶番終了）

「もう君たちに勝ち目はありません。立ち去りなさい」

「ふう。分かりました。が、次なる試練はもう目の前に来ています。気を抜かないように」という言葉の後に四人とも消えていった。

次なる試練とはいったい。そして疑われるクロウ。さあどうする？

続く

第13話「出番は狙い通り？」（後書き）

結社との茶番は最初で最後です。

あとは協力するにしてもすべて善人行為です

第14話「クローゼの気持ち」(前書き)

完全に・・・。

あとオリジナルです

第14話「クローゼの気持ち」

その後の事を話そう。何事もなかったように立ち去ろうと……は出来ませんでした。万力のような強い力でクローゼに服を掴まれていましたから。二人きりの部屋で恋人同士のようなこと？そんなのことはありません。あるのは尋問に似た時間でした。

「ねえクローウ？あなたは一体どこに行っていたのかしら？狙ったようなタイミングで来て。結社の人たちと親しそうに話していたし。秘密が沢山あるみたいね。私に言えない事なの？」

最初は背中に般若が見えても可笑しくはないぐらい烈火の如く怒り、そして言葉は尻すばみに小さくなってゆき最後には……まあ分かるよね。泣き落としさ。はあ……。

～言い訳タイム～

「ええっと、前にも話したようにクエストに行っていました。結社に関するA級の仕事に出かけていました。結果は外れで成果はありません（ごめんクローゼ、これは言えない）狙ったようなタイミングでもありません。跳躍していてちょうど間にあっただよ。親しそうに話していたのは昔剣帝とよばれるメンバーに会っていたからであって問題ないと思うんだけど」誤魔化し半分だけど秘密について言っても良いものだろうか……。すごく悩んだ。

～言い訳終了～

「ねえ、クローウ。私ね一つだけ決めたことがあるの。怒らない？」

勿論と頷いたクロウに「私、次期女王になったんだ。略式の儀で立太女になったの。16歳で心配だけど力を借りて行って行こうと思っっているんだ。その中にはあなたもいるのよ」

(ああ、この子はなんて強い心を持っているんだろう。自分が秘密を教えて駄目って言う事は無いだろうな。まあ駄目でも最初から味方はいないと思って存在して来たから、出来そうになった味方がいなくなる……って思えばいいか)

「クローゼ。俺には誰にも行っていない秘密が一つある。それは俺の本名と年齢なんだ」

「えっ、本名？」(どういうこと?)

「ああ、ふっっ、俺の本当の名前はクロー・シュツツツ・リベール。年齢は1200歳以上。ゼムリア大陸の大崩壊前から生きている古代人なのだよ」

「……」
「言葉もないだろうが歴史に関する資料を調べると出てくるはず、人とは異なる理ことわりで生きている。だから一人で生きていこうとして「ふざけないで！」っ……」

「私はそんなこと気にしない。そんな小さな事であなたの元から離れることなんてできないしやろうとも思っていない。ただ愛おしいだけ。寂しそうにしている横顔が切ない気持ちを呼び起こして支え手になっていたいという気持ちしか湧き上がらない。だからそんな事言わないで」泣き崩れクロウの胸に飛び込んできた。そしてギョツと腕を掴み離れない。

「……」。うん、分かった。俺が悪かった。そしてクローゼの命ある限り離れないことを誓おう「クローゼを強く強く抱き返しそのままキス……」。

（ん？あれっ、いままで伴侶はいないから分からなかったけど一
緒の夫婦になったら相手も年齢長寿になるのか？どうなんだろっ・
・・）

第14話「クローゼの気持ち」（後書き）

クローゼファンの方、申し訳ありません。ヒロインを作ろうと思った時エステルにはヨシユアが。ティータにはアガットがいるじゃないと思ひまして。

原作ではエステルにクローゼが「ヨシユアが好きでした」みたいな事を行っていたと思ひます。ですがハーレムや略奪愛と言つのは作者の好みではないのでクローゼをヒロイン化しようと思つたわけなんです。

オリ主の詳細（前書き）

矛盾していると指摘して下さいだったのでオリ主の詳細を載せます

オリ主の詳細

？なぜ1200歳となつたのか？

・最初からあやふやに考えており、少し前に載せたかと思ひますが作者がズボラで年齢計算が面倒くさいと言う考えからいつそのこと七耀暦が始まつた頃に誕生でいいじゃないと思つたのが初期設定でした。

・そして、ここからは後付けという形をとつての詳細な点ですが文明の大崩壊の時にアーティファクトに触れてしまいそれが最初と世界の理ことわりと呼ばれる二つのもので呪いを受けてしまったこと。それによつて死ねない体になり1200年という長い年月を生きてきたという設定を思いつきました。

？それを踏まえて過去編その1で、10歳にも満たない頃傭兵を生業とし感情を持たない少年と言う設定はどうなのか？

・それに関しては初期設定の時にメモ帳に入れて考えていたのですが、忘れて書かなかつたというおつちよこちよいが発動してしまいました。メモ帳には【七耀暦が始まつた頃は普通の子供。が、古代文明の崩壊中に死ねない体になつたかわりに眠つて時代を過ごす。そして起きるたびに年齢があやふやで目覚める】とありました。これが初期設定でしてここからが後付けになります。

・眠つて時代を過ごすという表現はコールドスリープのように冬眠と言つた形を言いますか。それとも封印と言う形で古代遺跡

で眠るといづどちらかを考えています。

・ 起きる度に年齢が定まらないというのは成長 老化 眠る 起きる 成長を繰り返す過程で何かしらの異常に見舞われて年齢と感情や思い出もあやふやと後付けしました。

これが今の作者の限界です。読者の皆様の思考を混乱させてしまったことに申し訳なく思っております。次の話では作中に出てくる専門用語を資料から抜粋して書きたいと思えます。

オリ主の詳細（後書き）

次は作中の専門用語とこれから出てくる用語も一緒に載せます

作中の専門用語（前書き）

原作を知っているなら飛ばしてもかまいません。
オリジナルは入っていません。

作中の専門用語

・世界背景

人々の生活は導力器オーブメントと呼ばれる技術によって支えられている。50年前の導力革命によってもたらされた導力器は、飛行船をはじめとするさまざまな技術に応用され、人々の生活を飛躍的に豊かにしていった。しかし一方で兵器にも用いられるために大陸は混迷の様相を示していた。

・導力器オーブメント

神秘のエネルギー《導力》で動く機械仕掛けのユニット。内部には七耀石セブチウムを加工した回路が格納されており、その機構に応じて様々な現象を起こすことができる。50年前に発明されたから、またたく間に大陸全土に広がり、照明・暖房・通信・兵器・魔法・飛行船など様々な技術に応用されていた。

・黒の導力器

黒い半球体をした導力器オーブメント。周囲のオーブメントを無力化する導力停止現象を引き起こすなど、現代の技術では不可解な現象を引き起こす。

・遊撃士協会

大陸各地に支部を置く遊撃士ブレイサーのギルド。民間人の安全と、地域の平和を守ることを第一の目的とし、魔獣退治・犯罪防止などの要請

に応じて遊撃士を派遣する。

・情報部によるクーデター事件

リベールの軍事力強化を求める王国情報部が企てた反逆事件。情報部は王国の重要人物の家族を人質に取り、軍備拡張に反対する女王アリシア？世の退位を要求。グランセル城を占拠して王城地下に眠る古代の秘宝を手に入れようとするも、遊撃士や親衛隊など多くの人々の活躍によって阻止された。情報部の中心人物であったリシヤール大佐は逮捕されたが、その残党はいまだリベール各地に潜んでいるという。

・身喰らう蛇
ウロボロス

情報部の企てたクーデター計画をはじめとし、リベール各地で起きた不可解な事件の背後に見え隠れする謎の結社。その存在も目的も謎に包まれているが、ヨシユアの過去と深い関わりがあるようだ。

・ハーメル村の惨劇

エレボニア帝国とリベール王国の国境近くにあった村。百日戦役を起すための口実作りのために襲われ、一方的虐殺ののち壊滅させられた。実際に襲ったのはリベール兵を装った猟兵団であり、完璧な濡れ衣作りに利用された事になる。

登場人物のヨシユア、レオンハルトはこの村の遺児。

・以下途中介入の登場人物と変更した点、新たに判明した点

シエラザード・ハーヴェイ

武器：鞭

銀閃ぎんせんのシエラザードの異名を持つランクBの正遊撃士。鞭の使い手だが併行してアーツの使い手でもある。幼い頃はスラム街で暮らしており荒んだ生活を送っていたが旅芸人の一座に拾われた。そしてある事件で解散した時カシウスに助けられたことから「先生」と慕っている。的中率の高い占いが得意。

アリシア・フォン・アウスレーゼ（アリシア？世）

60歳。リベール王国第26代女王。巨大な軍事を誇る帝国と大量の人口を持つ共和国に挟まれながらもしたたかな外交力で五分以上の政治力を発揮する女傑であり、慈愛を以て国政に励む姿から国民に慕われている。

アラン・リシャル

武器：刀

かつてのカシウスの部下であり、カシウスより剣術の指南を受けた居合いの達人。事件全般の黒幕に当たり、その愛国心の強さ故にリベールの将来に不安を覚え、その心の隙を《結社》につかれてクーデター事件を引き起こし、エステル達によって阻止された。

ユリア・シュバルツ

武器：レイピア

王室親衛隊の女中隊長で階級は中尉。クローディア姫の護衛兼養育係も兼務しており、クローゼがレイピアを使うのもそのため。生真面目な性格で、姫の護衛兼養育係としての職に誇りと愛着を持っている。

ティータ・ラッセル

武器：大型の動力砲、火薬式のガトリング銃。

世界的に有名な導力学者アルバート・ラッセル博士の孫娘であり、

中央工房の見習い技師。エステルとヨシユアをお姉ちゃんお兄ちゃんと呼び、兄妹のように慕っている。また、アガットの不器用な優しさを身を持って知り、彼を「大切な人」と呼び好意を寄せている。

アルバート・ラッセル

ティータの祖父で、導力器を発明したエプスタイン博士の直弟子の1人。導力器の普及はリベールに中央工房（当初は技術工房）を設立したラッセルの功績に因る部分が大きく、「導力革命の父」と呼ばれる偉人。

テレサ

マーシア孤児院の院長で、優しさと包容力を持った女性。幼少時のクローゼを一時期保護していた。

クラム

マーシア孤児院にいる少年。イタズラ好きで反抗期らしい性格。テレサ院長に泣かれると弱い。

マリイ

マーシア孤児院にいる少女。しっかりした性格で、孤児達の中ではリーダー的存在。

ポーリイ

マーシア孤児院にいる少女。言動はゆっくりしているが独特の力を有している。

ダニエル

マーシア孤児院にいる少年。やや気が弱くおっとりしている。クラムの子分的な存在。

レグナート

1200年前のゼムリア文明崩壊より生き続ける竜。20年前に眠りに付く直前に、当時剣の道を極めんとしていたカシウスに戦いを挑まれたことがあり、彼とはその頃からの「友人」である。

身喰らう蛇のメンバー

ゲオルグ・ワイスマン

クーデター事件を含め黒幕。当初は貧乏考古学者「アルバ教授」としてエステル達の前に現れ、護衛を受ける振りしながらエステル達の様子を観察していた。武器は《盟主》より授かった杖で、戦闘では空間を操作した攻撃を行う。また、七耀教会時代の研究結果から、対象の記憶と認識を操作する異能の力も持つ。

カンパネルラ

道化師の異名を持つ。炎を使った幻術を使う。姿や言葉遣いは少年のものだが、「ヨシユアが結社にいた頃と容貌が変わっていないことが指摘されており、外見と実年齢が一致していない。実力はヨシユアと同じぐらい。

レオンハルト

剣帝の異名を持つ。《剣帝》の異名のとおり、その剣技は他の追随を許さない。また、強力なアーツも駆使用する。素性はヨシユアと同じハーメル村の惨劇での生き残り。

ルシオラ

幻惑の鈴の異名を持つ執行者。扇を使って風を操り、宙を舞うように戦う。鈴の音を利用した幻術が得意。戦闘時には風と炎を伴う攻撃を主に使用し、更には強力な式神まで召喚する。かつてシェラザードと同じ旅芸人一座においての姉貴分、エ

ステルとも顔見知りであった。一座の解散後、行方が分からなかったが身喰らう蛇の執行者となっていたことが判明した。

ブルブラン

怪盗紳士の異名を持つ執行者。大陸に「怪盗B」の名で知れ渡っている怪盗でもある。自称・美の探究者。戦闘時にはマジック（手品）を駆使したトリッキーな攻撃を繰り出す。

ヴァルター

痩せ狼の異名を持つ執行者。リベールでは見かけないサングラスが特徴。リベール王城正門を寸勁で破壊するなど常人離れした業を見せている。

ヨシユア・アストレイ

昔、漆黒の牙と言う異名を持つ執行者だった。

レン

壊滅天使の異名を持つ執行者。11歳〜12歳ぐらい。身の丈ほどもある巨大な鎌を振るい、容姿に似合わぬ強烈な一撃で敵対者を殲滅する。「十三工房」で開発された巨大戦闘人形パテルIIマテルを操る。周囲の状況を瞬時に受け入れ、教えられた技能を瞬く間に自分のものにできる天才。化学、数学、情報理論の博士号を習得しており、代理人を通じて定期的に論文も発表している。

盟主

身喰らう蛇を統べる最高権力者で名前を含め全てが謎の人物。

ケビン・グラハム

七耀教会の巡回神父として登場したが星杯騎士団に所属していること及び輝く環の調査のためにリベールに来たことをエステル達に

明かした。ただし本当はそれ以外に使命を帯びていることが後に判明する。その正体は長らく空席であった星杯騎士団の守護騎士第五位。外法狩りの異名を持ち、その異名の通り教会より外法と認定された存在の抹殺を主な任務としている。

作中の専門用語（後書き）

纏めるのに難儀でした。

説明文はコツコツと書くに限る・・・。

第15話 クローゼの交渉（前書き）

原作とおりです

第15話 クローゼの交渉

それからのことですか？良い雰囲気だったのにそれを邪魔する輩が出てきた。いや、次なる試練が生じたと言っべきでしょうか。リベール国境付近に帝国軍の蒸気戦車が登場し一触発の状態へと移行しつつあるという事です。

クローゼはエステル達と一緒に国境付近へ交渉に行きました。私ですか？ええつと、心配させたからという理由でお城から出ることを許されませんでした。私が何をしたというのでしょうか？と言ったらキツと鋭い眼をむいて「私を心配させたからここにいなさい」とのことでした。

嫌われたくありませんからここでおとなしくしていきましょうか。でも暇ですね。何が起きていたのでしょうか。

第三者視点

クローゼは次期女王として帝国軍と交渉するため、ハーケン門へ！！エステルたちも王太女殿下をハーケン門まで送り届けるため付き添うことになりました。

ハーケン門ではモルガン將軍と「隻眼のゼクス」ことゼクス・ヴァンダール中將が話し合っていて、帝国側は、王国に突然浮遊都市が現れてから南部の街で導力停止現象が起きて困っていると主張しこの弱みにつけこむ姿勢が目に見えている。そこでクローゼに交渉役チェンジする。

次期女王にふさわしい見事な交渉術です。っと思ったら、帝国側

も交渉役チエンジ。現れたのはエレポニア皇帝ユーゲントが一子オリヴァルト・ライゼ・アルノール皇子

オリビエの交渉シーンはついている隙がないくらい完璧で『リベールが導力を停めてしまう新兵器を実用化し10年前の復讐しようとしている噂。それが誤解だと証明できるか？』っという交渉の仕方。

浮遊都市を何とかできる可能性を提示できるまで猶予をくれるよう頼むクローゼに、オリビエは『可能性を提示できたら一時的に撤退することを約束する』と交渉をしたところに狙ったように上空からアルセイユに乗ったカシウスが登場。

どうやら帝国軍を撤退させるためにカシウスとオリビエがグルになって芝居をした結果がこれだよ。

無事、帝国軍がハーケン門から退き、今回の事件も終息。アルセイユからケビン・グラハムが合流し帝国の視察としてオリビエがミユラーさんと共に乗り込むことになりました。

オリリオ・オール輝く環を見つけ出し、結社の目的を阻止するため浮遊都市へ向かうということがクロウ抜きで起きた出来事だったようです。

第三者視点終

続く

第16話 浮遊都市への道 (前書き)

説明。クロウ出番無し

第16話 浮遊都市への道

帰って来たクローゼはスッキリした表情を見せていた。何と云うのかな、憑き物が落ちたようといえいいのだろうか。ともかくオリビエとミューラーが帝国側の視察と言う形をとってアルセイユに乗り込んだ。クローウもアルセイユに乗せられた。

出発して間もない頃、紅蓮の飛行艇やグロリアスからの猛攻を受けた。だが、アルセイユは高速飛行を繰り返し難なく逃げ切ることになった。このアルセイユには従軍記者として二人同行していたが一人が遠くから近付いてくる機械兵器に気付く。

が、アルセイユの翼を切り取り不時着と言う形を取らざるを得なくなった。皆に怪我が無くて一安心。ここを拠点として動くことに決めたのだがラッセル博士によるとここでは導力停止現象は起きていないことが判明。パーティを組んで行動しアルセイユに残る他の人は船の修理に回ること話し合いは終わった。

エステル達はさっそく船から離れて行動することに決めたがなにやらヨシユアとケビンがこそこそ話しているのを遠目で確認した。何やらカシウスからもらった手紙が関係しているようだったが、クローウはそのまま無関心を決め込むことに決めた。

クローウはエステルたちに着いて行くこと無く浮遊都市を探索する。理由は何となく懐かしい気持ちに襲われたからだ。この空気は懐かしくて落ち着く。ぶらぶらと歩くと住宅らしき家も見かける。

ここに何か手掛かりのようなものが無いだろうか。と思いつつも

探索を続けていた。

第三者視点

浮遊都市は公園地区^{カルマーレ}、居住地区^{クレイドル}とわかれていた。そして途中に山猫号を発見。ジョゼットとその兄を救出することに成功した。

続けて探索をしていると工場地区^{ファクトリア}、中枢塔^{アクンスピラー}を発見。目の前には高くそびえ立つ塔が……。

2層目に突入するとここでは執行者との戦闘が開始された。ブルブランが待ち構え前よりも強くなっているがやつのことで退けることに成功した。ブルブランが今回の件に拘る理由は・・・「盗む価値のある美しい物がある」かだけで。最後には逃げられてしまった。

3層目にはヴァルターが登場。ジンがヴァルターと闘いたい理由があるらしく闘った。ヴァルターも戦闘能力が上がっており倒すのは大変だがジンが勝つと知りたかった師匠との仕合の真相について語った。そして改めてジンVSヴァルターの真剣勝負が始まり結果はヴァルターが気絶してジンの勝利となった。

4層目、ルシオラとの対決。ルシオラとのバトルに勝利すると「座長を殺した本当の理由」を話し始めました。ルシオラは座長のことが好きで思いを告げたものの、想いには応えられないと言われ自分のもとから離れていくのが嫌で、永遠に自分のモノにしようとしたため座長を殺したというのだ。

これが解散の理由だった。語ったルシオラは終わったと言わんばかりに塔から身を投じてシエラザードが手を伸ばして助けようとしたがそれを振り切って落ちて行った。なんと悲しい結末だろう。

5層目、レンとの対決。身の丈ほどある大鎌を振り回して戦闘する様は執行者らしい戦いとなったがこれにも勝利することが出来た。戦闘終了後、エステルはレンに平手打ちをしその後優しく抱きしめ、結社にいたいかどうか考えるように語りかけた。エステルにも思うところがあったのだろうか。

さあ屋上には誰が待っているのだろうか。そしてこの物語の結末はどのようなものになるのだろうか。

第16話〜浮遊都市への道〜（後書き）

ここはオリジナル入れられなかったです。多分ここのだりも最後の方にならないとクロウは出てきません。

そして駄文ゆえに説明口調になってしまって申し訳なく思っております。

このような私ですが、どうぞごらんになってください

第17話 屋上そして急展開 (前書き)

原作では最初の鬱展開だったのを覚えています。

第17話 屋上そして急展開

やはりというか予想はしていたが屋上にいたのは剣帝と呼ばれているレオンハルトだった。思い出すのはあの時、エステルたちは格蘭セル城のテラスで闘ったが手加減されていて強かったの思い出す。

分け身Ⅱ分身を作りだし戦闘をかき乱してゆく。強力な必殺技を繰り出し手加減をしないレーヴェはただひたすら剣をふるい続ける。そして戦闘はレーヴェとヨシユアの一騎打ちに。

どうして結社に入ったの？というヨシユアの問いかけに“人の可能性を試したくなった”と答える。人は大きな存在に翻弄されがちで時には身動きできぬまま消えてゆく、そうハーメル村のように。

欺瞞を抱える限り人は同じことを繰り返す、それを防ぐために結社に入った。これがレーヴェの答えだった。ヨシユアはどうこたえるのか？

レーヴェが考えているそれこそ欺瞞だ、と伝え動揺させた時ヨシユアがレーヴェの剣を弾き一騎打ちに勝つことが出来た。ヨシユアの指摘に心を打たれ結社を抜けると言いやっとなるべき姿である兄弟に戻ったのも束の間、ワイスマンがそこに現れた。

レーヴェに不意打ちを食らわせ気絶させるとヨシユアの深層心理に埋め込まれた暗示に訴えワイスマンはヨシユアを連れていこうとする。

「それが答えとみてよいのだな？ワイスマン」その戦闘に入っておらずアルセイユから姿を消した後姿が見えなくなっていたクロウがワイスマンに問いかける。仲間はいつの間にか現れたクロウに驚いているがワイスマンは「はい、そうですね。私は行い続けてゆきます」と述べヨシユアとともに消えていった。

早く教授を追いかけて行きたいのに上空から巨大機械兵器が複数降りてくる。万事休すと思いきや、アルセイユに待機していたメンバーが駆け付けエステルたちは屋上から下層に降り輝く環がある根源区間へと急いで行った。

エステル、アガット、ケビン、クローゼに襲いかかる衝撃の戦闘とは……？そして操られたままのヨシユアの運命やいかに……？

第17話 屋上そして急展開 (後書き)

戦闘を入れたいの擬音が難しく入れてにくい。
頑張ります

第18話 最悪な黒幕 (前書き)

オリジナル + 原作です

第18話 最悪な黒幕

エレベーターシャフトで行くエステル、アガット、ケビンを見送る暇もなく3体の機械兵器が襲いかかってきた。ここにいる仲間は8人＋クロウで9人。4人で1体の機械を相手にしクロウだけ単独で戦闘した。

やっと、陽の目を見ることになった傭兵時代使っていた大剣を振るって機械の突きを捌いて行く。そして隙が出来たら牙突「片手で剣を握り突きの状態で刺し貫く技、を使って片手を断ち切る。他の仲間にも死傷者はおらず大丈夫な様子。

近くには機械兵器しかおらず大技を繰り出せる状態だったので剣に電撃を纏わせ頭部分のパーツから地面にめり込むぐらい一刀両断しそこから横に斬りつけに斜めに切り上げ切り下げと繰り返すうちにパーツはバラバラに分解していた。もう二度と起き上がることもなく終わった。

「呆気なかったな」と思っていたらほかにも数体、上空から舞い降りてきたのでレーヴェが撃退しようとしたから「先に行け！ヨシユアの元に行って助けてあげなさい。こちらは少し本気を出して止めよう」と大剣を地面に突き刺し詠唱を始めた。言霊に影響力を持たせる詠唱なのであまり隙が無くすぐに詠んで強力なのだ。

「自然の理から外れた物の上に絶望の如く無慈悲な煉獄の炎を持つて焼き貫かん」

と、呟くと降り立った機械を炎が囲み段々と行き場を無くし檻のように閉じ込めて焼き尽くして行った。さあエステルたちはうまく

いったのかね。

エステルたちの事を少し述べよう。根源区画に着いた3人を待っていたのは自分の益の為には沢山の人を不幸にさせるワイスマンだった。

ワイスマンはエステルたちに輝く環について述べるがエステルの反応に呆れたワイスマンが操ったヨシユアとエステルを闘わせることにした。

一瞬で無力化に成功したヨシユアはエステルに馬乗りになり剣を振りかざす。

ワイスマン「このままヨシユアに君の息の根を止めてもらう。しかる後、暗示を解いて元に戻してあげると言う事さ。はたしてヨシユアはどんな表情をするかな？ゾクゾクするとは思わんか」

エステル「っ、そ、そんなことをしたらヨシユアは……」

ワイスマン「はは、今度こそ完全に心が砕け散ってしまいかもしれないね。だがそうなたら私がまた新しい心造ってやれば済むことだ。そしてもう一度同じように、人に戻るチャンスを与えるでしょう。今から楽しみだよ」

エステル「やめて、そんなの……酷すぎるよ。」

ワイスマン「それではヨシユア、止めを刺してあげたまえ……」

「

もう一度剣を振りかざして今にもエステルに刺し貫こうとしているヨシユア。

エステル「ヨ……シユ……ア。ごめんね、絶対に死なな
いって約束したのに。ごめんね、一緒に歩くって約束したのに」

アガット「ヨシユア！とつと目え覚ましやがれ〜！」

エステル「でもあたしは、信じているよ。ヨシユアは絶対に負け
ないって。あたしが居なくなっても現実から逃げたりしないって・
・・」

ヨシユアは一度目を瞑り

ヨシユア「ごめん、ちょっと自信はないかな」

エステル「！」

刹那、エステルに馬乗りになっていたヨシユアが消えワイスマン
に刃を向けた。

エステル「ヨ……シユ……ア？」

ヨシユア「ごめん、エステル。ずいぶん辛い思いをさせちゃっ
たね」

ワイスマン「ば、馬鹿な。あの状態から意識を取り戻せるはずが。
……待て。お前、肩についていた“聖痕”はどうした？」

ヨシユア「もう僕の深層心理に貴方が刻んだ“聖痕”はない。た
った今、砕け散ったからね」

ワイスマン「な、なにっ？」

ヨシユア「“聖痕”のある一点に暗示の楔を打ち込んでもらったんだ。そしてそこに負荷がかかった時“聖痕”が崩壊するような自己暗示をずっと繰り返し返してきた」

エステル「あ、暗示の楔？」

ヨシユア「このままだと君との約束が果たせなくなりそうだったから、年に不時着した直後にケビンさんをお願いしたんだ」

ケビン「やあく相談された時はどないしようかと思っただわ。正直その一点を外したら取り返しのないことになる可能性が高かったからな。でもヨシユア君見事、賭けに勝ったやないか」

エステル「あははは、そうだったんだ」

ワイスマン「ケビン・グラハム。騎士団の新米と侮っていたが小癪なまねをしてくれる」

ケビン「ま、これも女神の導きエイドスやろ。教会から脱けたアンタには分が悪かったかもしれんな。それに俺は助けただけや。助言者は他にもおる」

ワイスマン「な、なに？ま、まさかカシウス・ブライトの入れ知恵か」

ヨシユア「うん、手紙にはこうあったんだ。“お前の呪縛を解くカギはケビン神父が持っているだろう。だがその鍵をどうやって使いこなすかはお前自身の問題だ。ワイスマンとやらの行動を見抜い

て自由を勝ち取ってみる”とね」

アガット「へっ、あのオッサンらしいや」

エステル「まったくもう、ほんとお父さんらしいわ」

ヨシユア「さすがに迷ったよ。再び僕を操ったあなたが何をやってくるか。そして僕は一点に全てを賭けてみた。貴方が僕の最も恐れることを僕自身の手で行わせる可能性にね。そしてあなたはその通りに命じ結果的に“聖痕”は砕け散った。もう僕は貴方から完全に自由だ！」

ワイスマン「愚かな。そのまま操られていれば更なる進歩を遂げられたものを」

ヨシユア「残念ながら僕はエステルと同じようにそんなものに興味はない。それに道と言うものは他人から与えられるものではない。暗闇の中で足掻きながら自分自身で見出していくものだ」

ワイスマン「人間の歴史は闇の歴史。どう足掻いたって何も変わらない」

ヨシユア「違う！人は暗闇の中でもお互いが放つ光を頼りにして共に歩んでいくこともできる。それが今ここにいる僕たちの力だ！」

エステル「ヨシユア……」

ワイスマン「出来そこないの執行者の分際ですいぶんと大きな口を叩くものだ。ならば見せてみるがよい！」

最終決戦へと続く

第18話 最悪な黒幕 (後書き)

ヨシユアの“暗闇の中でもお互いが放つ光を頼りにして歩むことが出来る”っていう台詞好きなんですよね。

次も頑張ります。

その前に寝ますがzzz

第19話 悲しい結末 (前書き)

碧の軌跡ももうすぐ発売。キアが見たいっ

第19話 悲しい結末

さてあとの事に着いて話そう。ヨシユアが自分の心を取り戻しワイスマンとの最終決戦へと挑む事が出来た。一度目の戦いではワイスマンと横を飛ぶピットのような機械が相手した。

アガット「これで決める。ドラゴンダイブ！」闘気を身に纏い上空から地上の敵に向かって剣とともに叩きつける。機械は壊れワイスマンの動きを少し止めた。

ワイスマン「ほうこれは驚いたぞ。まさか貴様らがここまで食い下がるとは……」

エステル「はあはあ……教授つてばどんどん口調がぞんざいになってるんじゃない？」

アガット「へっ、余裕が無いんじゃないかねえのか？」

ワイスマン「ククク、哀れな事だ。自分たちがすでに死地にいることすら気付かないとは」

エステル「えっ……？」

ヨシユア「どういうことだ？」

ワイスマンの姿がエステルたちの前から輝く環の真下へと移動する。嫌な予感がした。

ワイスマン「このまま“盟主”に献上するつもりだったが気が変

わった。貴様らが齒向かった相手がどのような存在かを思い知るがよい」

というトワイスマンの姿が輝く環と結合してゆく。光り輝く様が辺り一帯を満たして満たす。

エステル「これは？」

ケビン「まさか輝く環と融合しているのか？」

光が収まると、そこにはワイスマンと言う人の姿は無く得体のしれない存在へとなっていた。

ワイスマン「この感覚は……悪くない。まずは試させてもらおうか。人を新たな段階へと導く“天使”の大いなる力を」

ワイスマンはアンヘイルワイスマンとなってエステルたちの前に立ちふさがる。攻撃をいくら与えても障壁が張ってあり効かない。もう駄目だ、と思った瞬間上空からドラギオンに乗ったレーヴェの姿が……。

ワイスマン「止めを刺し損ねたか。しかしドラギオンとはいえ障壁を破ることなどできん」

レーヴェ「だろうな。ところでワイスマン一つ聞きたい事がある。“ハーメル悲劇”貴様はどの程度関与していた？」

ワイスマン「どうしてそれを聞く？」

レーヴェ「それは貴様が“蛇”だからだ。弱みを持つ人の前に現

れて破滅をもたらす計画を囁く。そして自分の手を汚すことなく自らの目的を遂行する……。それが貴様のやり口だろう」

ヨシユア「あ……………」

レーヴェ「実際、首謀者たちは当時の戦争に敗れて家を失った者が多いと聞く。もし10年前の戦争が貴様の仕込みだと言うのなら全ての事に説明が付くと思っただけだ」

ワイスマン「ククク、なるほどな。まあおおむね指摘通りということだ。もつとも私が行ったのはハーメルの名を囁いただけだが。それだけのことで事は動きだし戦争へと発展した。まあ人間の業（ごう）の実験には最適だったよ」

アガット「貴様……………。貴様のせいで俺の妹、ミーシャは……………」

ケビン「……………」

エステル「吐き気がしてきた……………」

レーヴェ「なるほど、大方予想通りというところか」

ワイスマン「おや、ずいぶん冷静なものだ。私としてはもう少し憤ってほしかったが」

レーヴェ「フフ、俺の心はもう冷め切っているからな。しかし借りだけは返させてもらおう」

ワイスマン「なに？」

そういつとレーヴェは持っていた剣で障壁にヒビを入れた。エステルたちがどうやっても傷一つ入れることのできなかつた障壁に……。

ワイスマン「ば、馬鹿な。環の障壁に傷をつけるとは。！そうか、その剣は……。」

レーヴェ「そう、これは“盟主”より授かった剣、貴様の杖と同じく外の理で造られた魔剣だ」

ワイスマン「くっ、離れる。この痴れ者め」

ワイスマンから放たれる光の帯が次々とレーヴェの体に突き刺さる。苦痛に耐えながらレーヴェは障壁に傷を大きく入れて行く。

レーヴェ「もう、遅い……。」

最後に放たれた光で壁際へと大きく吹き飛ばされた。しかしワイスマンを覆っていた障壁の姿かたちはもうどこにもない。

ヨシユア「レ、レーヴェ？」

レーヴェ「俺に構うな。道は拓いた。あとはお前たちが道を切り拓け！」

ヨシユア「くっ」

ワイスマン「やってくれたな。だが絶対障壁は環の力の一端に過ぎない。全ての力を開放して貴様らに絶望を味わわせてやる」

アガット「それはこっちの台詞だ」

エステル「遊撃士として、リベール市民として、そして何よりも人として！」

ヨシユア「ワイスマン、僕らは貴方を倒す」

屋上組はと言うとやっと思り来る機械兵器をすべて倒し終えたところだった。だが、エレベーターシャフトは上がってこないのだから下層へ行くことが出来ないでいた。

クロー「ふう、ようやく一段落したか。だがこの都市はもう終わりを迎えるだろうな。ワイスマンの暴走によりすべての物事に歪みが生じ失敗に終わったのだから……」盟主の悲しそうな表情が目に見えかぶようだったので、それを思っ表情を歪めていた。

クローゼ「クローウが何か考えている。まだ私に教えてくれない事柄があるみたい。いつになったら全てを話して本当の意味で一心同体になれるのかしら？でも今はこの事件を終わらせるまでは考えないでおこう」聞きたいが今はもっと大事なことに目を向けたクローゼだったが……。

「エレベーターシャフトが上がってきたぞ」誰かの声に目を向けるとそこには下層へ降りる手段が来ていた。この物語の終盤へと進む。狂った歯車はどのような結末を生むのだろうか。それはまだ分からない。

3戦ののち環は消えワイスマンも狼狽しつつどこかに行ってしまった。

エステル「あんなやつどうでもいいわ。そ、それよりも」

ヨシユア「レーヴェエ！」みんながレーヴェエに駆け寄る中なにかを考えているケビンだけがどこかに立ち去る……。

ヨシユア「レーヴェエしっかりして。今手当てをするから」目をつぶっていたレーヴェエがヨシユアの方向を向く。

レーヴェエ「その必要は……ない。お前なら分かるはずだろ。もう助からない傷だと言う事が」無理だと言う事が分かっているのか諭すように伝える。

ヨシユア「イヤだ。そんなのイヤだ。レーヴェエまでお姉さんみたいに。そんなの、そんなの酷すぎるよ……」

レーヴェエ「フフ、そんな顔をするな。幼い頃の泣き虫に戻った様だぞ」

ヨシユア「そうだよ、僕は弱くて甘ったれで。まだまだレーヴェエが必要なんだ、だからお願いだから」

レーヴェエ「やれやれ、納得できないならヨシユア、お前は俺のようになるな。大切なものを守るために死ぬのではなく守るために……生きる。エステル・ブライト頼みがある」

エステル「うん、何？」これが遺言になるのだろう、エステルは分かっていた。

レーヴェ「こいつは強いようで芯が脆いところがある。全ての呪縛が解けた今本当の意味で強くなる必要があるだろう。だから頼む、これからもこいつを俺たちの弟を支えてやってくれ」

エステル「えへへ、言われなくてもそうするつもりだったけど。でも今ここでちゃんと約束する。だからどうか安心して」「ヨシユアと一緒に歩むとの約束をレーヴェとも交わす。」

レーヴェ「すまない。ふふ、しかし……やっとなんか。あの時カリンがなぜ微笑むようにして……逝ったのか。こんなにも満たされた気持だっ……たんだ……な」

パタリと少し力がこもっていた腕が力無く床に落ちた。

レーヴェ「……」

ヨシユア「レ、レーヴェ……？じよ、冗談はやめてよね。ちゃんと聞こえているんでしょ？返事してたら。だってそうだよ、やっとなんか。やっとなんか。やっとなんか。頼むから、頼むから返事してよ！」

アガット「勝ち逃げされちゃったな……」

女性の声「おーい、みんなー」

エステル「あ……」

ユリア「無事だったのか。ひょっとして彼は……？」

エステル「……うん」

ラッセル博士「ワイスマンと輝く環は？」

エステル「うん。輝く環はどこかに消えちゃって。ワイスマンも逃げたけどやたらと慌ててたな」

ラッセル「なに。消えたじゃと？ううむ、それは少しマズいかもしれない」話している最中にも地響きが生じている。どうやら輝く環が消えたことよって浮遊する力も消えたことで崩壊の危機に面しているようだ。一刻も早くここから脱出しなければならない。

エステル「ヨシユア、その辛いとは思うけど早く脱出しないと……」

ヨシユア「ごめん。エステル、頼むから先に行つて。僕の事は気にしないで良いから」

エステル「……」無言でヨシユアの元に行き「パンっ」と平手打ちをする。

エステル「ヨシユア、しっかりして。レーヴェが言つてたこと全然理解していないじゃない。守るために生きるって言われたじゃない？あたしは忘れない。ヨシユアを支えるって、この人と約束した事を。絶対に忘れないんだから！」

ヨシユア「エステル、ごめん僕は本当に弱虫だな。」そう言うとレーヴェのそばに置いてあつた剣を取り「レーヴェこれはハーメルにお姉さんにちゃんと届けるから……」

ユリア「早く脱出を！」

エステル「うん」「ヨシユア）さようなら、レーヴェ（

第19話 悲しい結末 (後書き)

次回ケビンの暗躍……。感想お待ちしております

第20話〜ケビンの暗躍〜

よたよたと足を引きずりながら通路を歩くワイスマンの姿がある。

ワイスマン「馬鹿な、馬鹿な。このようなこと“盟主”の予言の中には無かった。ま、待てよ試されていたのは私も同じだったという事か。くっ、戻ったら聞いたたださないと」

青年の声「残念やけど、それは無理ちゅう話や」反対側から歩いてくる神父。

ワイスマン「ケビン・グラハム、いつの間にこんな所に。どけ、貴様のような雑魚に構っている暇はない」術をかけて動きを止めようとする。が、しかし効かない。

ワイスマン「馬鹿な。いくら星杯騎士とはいえ新米ごときに防げるわけが……」

ケビン「あースマン。ちょっと三味線弾いてたわ。オレは騎士団の第五位、それなりに修羅場は潜つとる。ま、それでも本調子のあんたに勝つのは難しかったけど今なら付け入る隙があるからな」

ワイスマン「なに？」ケビンのボウガンから弾が発射されワイスマンに当たる。

ケビン「オレの本当の任務は“輝く環”の調査やない。最悪の破戒僧ゲオルグ・ワイスマン、あんたの始末と言う事や」

ワイスマン「くくく、なるほどな。だがこの程度の事で体の自由

を奪うなど・・・！な、なんだ。これは“塩の杭”かつてノーザンブリアを北部を塩の海に変えた禁断の呪具。私一人を始末するのにこんなものまで持ち出したのか！」

ケビン「あなたは少々やりすぎた。いくら教会が中立でも、もはや見過ごすわけにはいかない。大人しく滅んどき」

ワイスマン「おのれ！狗がああ・・・」足元から進む塩化は完全にワイスマンを滅した。

ケビン「狗か・・・。まっ本当の事なんだけれどね・・・。ヨシユア君、君は運が良い。まだあと戻り出来るんだから」諦めにも似た表情を浮かべるケビン。

少年の声「うふふ、それってジェラシー？」炎とともにワイスマンの横に姿を現すカンパネルラ。

カンパネルラ「星杯騎士第5位、“外法狩り”ケビン・グラハム噂に違わぬなかなかの冷酷ぶりじゃない？」

ケビン「君は確か“道化師”だっけ。悪いけど彼のほうはもう手遅れや」

カンパネルラ「聞いているかもしれないけど今回は見届け役なんだ。計画の全プロセスを把握し一片の例外も無く“盟主”に報告する。教授の自滅も単なる結果であって防ぐべき事態じゃないんだ」

ケビン「なるほどな。“身喰らう蛇”、まだまだ謎が多そうだ」

カンパネルラ「それは君たち騎士団にも言えること。さてと僕の

役目も終わり、落し物も回収できたしそろそろ帰るとしよう」優雅にお辞儀をし教授の持っていた杖を持ち去って消える道化師。

ケビン「さっきの落し物ってまさか……。まあここからは管理外の事柄。早くエステルちゃんたちと合流しないと」ケビンも任務を終えそこを立ち去った。

物陰から現れるクロウ。ワイスマンがいた場所に膝をつき「結末は避けられなかったか。ヨシユアに加担し続けたら身の破滅と警告したし私も合流しますか。それにしてもケビン……。あなたはその若さで沢山の業を背負っているのですね」

第21話「一つの終わり」(前書き)

感動のシーンが書ければいいのですが、あとオリ主はいますが空気です。

第21話 一つの終わり

慌てて中枢塔から脱出を図る。それはもちろん真剣に。輝く環が無くなった今この浮遊都市を支えているものはなくなったのだから。ユリアやクロウゼを先頭にして走る。最後尾にはケビン、クロウ、ヨシユア、エステル。順で走っていたがヨシユアが足をもつれさせ、てうづくまる。

ヨシユア「くっ……」

エステル「ど、どうしたの？」 駆け寄って心配そうに顔を眺めると脂汗を流して顔面蒼白になっているヨシユアが見えた。

ヨシユア「大丈夫だよ。ちょっとめまいがしたただだから」

ケビン「無理もない。聖痕を取り除いた副作用ってやつだ」 ヨシユアの元に戻ってきてどうしてそうなったのかを説明していた。

クロウ「眩暈、頭痛、吐き気が当分の間付き纏うよ。だがヨシユアは覚悟して本当の心を手に入れた。その代償だと思って」 クロウもヨシユアの元に駆け寄って言うが何故か全てを知っているかのよ。うな表情にヨシユアは疑問を感じた。だがそれを今聞く時間など無い。早く脱出しないと。

少し皆から離れて通路を走るヨシユア、エステル。

ヨシユア「っ、危ない！」 上から大きな岩が落ちてくることに気付いたのでエステルを両手で抱えて思いっきり後ろへとダッシュ。その瞬間通路が砕け散った。

ケビン「大丈夫か・・・？」慌ててケビンが二人の方へ向かう。それに合わせて先に逃げていたメンバーも分断されたことに気付いて戻ってくる。

エステル「そっちに行くことができなくなつたよ」

ヨシユア「僕たちの事は放っておいて先に逃げてください」

クロウ「そう言えば緊急用の通路があつたはずです。ヨシユアとエステルはそちらの通路を通ってください」ヨシユアが少し消極的な事を言い出したので探索していた時に見つけた通路の事を話して合流を促す。

ヨシユア「分かりました。ではまた後ほど」

そして二人は緊急用通路を目指し駆けあがる。リベル「アーク地下道に入り更に揺れが激しくなりつつあるが“もう間に合わない”なんて言葉は呑み込んで一心不乱に走り続けた。

走るのを止めたくなくてもレーヴェの“生きる”の言葉を心に刻み込んでひたすら走り続けようやく地下から抜け出た。

が、ひときわ大きな揺れが襲い行くこうとしていた通路が崩れ落ちる。

エステル「えっ・・・」

ヨシユア「なに・・・」

だが、来た通路も崩れて戻れなくなつた。結果として細い柱が一

本支えるだけの足場しか無くなったというわけだ。

エステル「戻れなく・・・なっちゃったね」崩れた通路を呆然と眺め話しかける。

ヨシユア「うん、多分下の細い梁ではここの足場を支えることも難しいだろう」強気に言ってみるが出てくる言葉は自分がかき分けられるほど震えていた。

エステル「そっか・・・」

ヨシユア「ごめんねエステル。僕が足をもつれさせなきゃ間に合ったのに」

エステル「そういうことは言いつこなし、あたしだって危ないところをヨシユアに助けてもらったんだし」

ヨシユア「でも」

エステル「えへへ、でもどうしてだろう、こんな状況なのにちっとも怖くないんだよ。ヨシユアはどう？」

ヨシユア「僕は、うんそうだね。怖くないかも」さっきまで震えていた声が消えていつもと同じ声を出すことが出来ている。やっぱり僕にとってエステルは“太陽みたいな女の子”なんだね。

びしっ・・・。とうとう梁にヒビが入って足場が不安定になる。

エステル「ねえ、ヨシユア。二つ・・・お願いしても良い？」
ちよっと顔を赤らめてヨシユアに聞いてみる。これは今言わないと、

うん。

ヨシユア「うん、いいよ」「真剣なエステル表情にヨシユアも気持ちを引き締めて答える。

エステル「一つ目はあたしの事抱きしめてくれる？」「自分の顔がもっと赤く染まり熱を帯びてくるのが分かる。

ヨシユア「喜んで」「そう言うとエステルの正面に立ってお願い通り抱き締める。

エステル「エへへへ」「一つ目叶った……。

ヨシユア「それから？」

エステル「あのね、しつこいって思われたらイヤなんだけど、やっぱりその……後悔は残したくないって言うか」（あー自分では積極的にならなきゃいけないんだけど）

ヨシユア「ごめん、その続きは僕から言わせて。キス……しても良いかな？」多分ヨシユアの顔もエステルに負けないくらい赤くなっているはずだ。

エステル「あっ、うん！」抱き締めたままキスをして願いが叶う二人。そしてそのまま……。二人の下にあった足場が完全に崩れ落ち回転しながら雲の間に落ちて行く。

それをきっかけに浮遊都市全体の崩壊が始まってくる。執行者と闘った中枢塔も必死になって駆けた通路も、船が不時着した近くにある庭園も岩屑に姿を変え真下にある湖へと落下してゆく。

誰もそれを止めることすらできない。そこを縫うように上昇する飛行艇が空に白い軌跡を残してゆく。

～山猫号～

ジョゼット「お願い、キール兄。このままじゃヨシユア達が……」

キール「駄目だ、ジョゼット、あの様子じゃ二人はもう……」

ジョゼット「そんな……」

ドルン「くそつ、最後の最後でなんで。こんな時に女神は一体何をやってやる」

～アルセイユ～

シエラ「そ、そんな……」

ケビン「間に合わんかったか……」

クローゼ「お願いです。ユリアさん。避難通路の方向からしてエステルさんたちは北西にいる筈です。どうかそこにアルセイユを！」

ユリア「申し訳ありません、いくら殿下の命令でも従いかねます」
ユリアにとつても仲間は大事。でも行けない理由があった。それは……。

ミユラー「アルセイユの導力が完全に戻っていないときにもう一度近づけば間違いなく崩壊に巻き込まれます」そうなのだ。導力が不安定なため戻ると一緒に巻き込まれてしまうのだ。

オリビエ「はは、参ったな。この場を和ませようとしても言葉が・・・出てこない」

ドロシー「エステルちゃん、ヨシユア君・・・。！あれ」ドロシー（同行記者）が何かに気付いたかのように声を上げる。

ドロシー「いや」ジークが嬉しそうに飛んで行くなーって思っている・・・」

クロウ視点

ジークの方向を見ると雲の間から古代竜が見えるではないか。それに乗っている三人の姿・・・。ん？三人。カシウスが竜の背中に乗っているのが確認できる。カシウスのことだから“友人だ”とかいそうだな。でも本当に良かった、あの二人が無事で。段々と感情が普通になってきたのかな。ブライト一家には助けってもらってばかり。

これで浮遊都市の問題は解決だろう。少し表舞台から遠ざかろう。少し・・・疲れたし。

“エステル、ヨシユアお疲れ様！”

第21話の終わり（後書き）

駆け足でしたがSC編終わらせました。3rdは原作で進んだという事で“零の軌跡”からクロウも活躍？させることが出来ればと思います。

少しの補足を入れてから零編に進みます。

零の軌跡時のオリ主（前書き）

ケビンの物語はカットします。合計16人の仲間なんて到底無理です。

登場人物を紹介していますが最初なのでネタバレはしていません。

零の軌跡時のオリ主

名前

クロウ・シュツツツ・リベール

年齢

24歳、男性。

容姿

肩まで伸びている白髪を革紐で結ぶ。顔はきつね顔の細い顔つきをしている。体つきはがっしりとした筋肉質に鍛え上げられている。

性格

基本良い人。戦闘時は冷静かつ合理的に考えて行動。

武器

二丁拳銃を一丁を右の腰のベルトにはさみ、もう一丁を背中に隠し持つ。威力は片手で撃つと肩が骨折するぐらいの威力。有効距離は10セルジュ。(1km)

距離について

1セルジュは100メートル。

1アージュは1メートル。

説明していなかった登場人物

ヨルグ

ローゼンベルク工房の工房長。高名な人形師として名高く、製作される人形は一体数万ミラ以上の高値が付けられる。職人気質な老

人で、自分が気に入らない仕事は請け負わない。イメルダいわく「偏屈ジジイ」。

イメルダ

クロスベル市の裏通りでアンティークショップを営む老婆。多数の私有地をクロスベルに有する富豪で、所有する土地の経営管理が本業であり、アンティークショップは半ば道楽で行っている。裏社会の事情にも通じており、過激な発言でロイド達に冷や汗をかかせることも多い。

セルゲイ・ロウ

特務支援課の課長で、ロイド達の上司。38歳。優秀な捜査官だが、アクが強すぎるので上層部から煙たがられており、左遷同然に特務支援課の課長職に就かされた。基本的に放任主義（と言っより、不真面目）で、ロイド達にも最低限の助言しか与えない。

キア

ロイドが保護した記憶喪失の少女。推定年齢9歳。人懐っこく、天真爛漫。

ツアイト

各地で神狼とされている動物。

〈捜査一課〉

アレックス・ダドリー

クロスベル警察の捜査一課に所属する捜査官。27歳。武器は軍用の大型導力銃。エリート意識が強く遊撃士協会やロイドたち特務支援課を快く思っていないが、必要であれば支援課と協力し、闇ブローカーのアシュリーと情報交換する柔軟性があり、堅い性格だ

が分別は出来る。警察としての使命感と正義感の本物であり（セルゲイも正義感の強さは認めている）、それゆえに上層部の圧力で満足に捜査できない状況に苛立っていた。

ガイ・バニングス

ロイドの兄であり、セシルの婚約者。殉職した捜査一課の捜査官。享年25。両親を早くに亡くして以降、男手ひとつでロイドを育てた。ダドリーなどによれば破天荒な性格であるものの、捜査手腕は非常に高く、誰もが認めていたほど。警察官時代のアリオスとはコンビを組んでいた。

その他警察関係者

フラン・シーカー

警察本部のオペレーターでノエルの妹。17歳。特務支援課のバックアップも担当しており、各種連絡や報告書の処理などを行う。お姉ちゃんっ子で、ノエルに甘えることが多い。

ピエール

典型的な小役人タイプの人間で、上司には媚びへつらい、目下者には尊大に振舞う。特務支援課の存在を疎ましく感じており、ことあるごとにロイド達にネチネチと小言を言ってくる。一方で重度の恐妻家。

くクロスベル警備隊

ノエル・シーカー

クロスベル警備隊に所属する少女でフランの姉。18歳。若輩ながら曹長の階級に就いており、サブマシンガンを2丁同時に使用するなど、高い戦闘力を持つ他、戦闘車輛の操縦にも長ける。警備隊

ではライフルとスタンハルバードの習得が必須なのでその実力も相当だと思われる。妹に負けず劣らず姉妹愛が強い。

ソーニャ・ベルツ

警備隊副司令の女性で階級は二佐（中佐）。タングラム門の責任者。優秀だけでなく、警察などに情報提供する柔軟性と思い切りの良さを備えている。セルゲイとは昔馴染みで、司令と対立してクビになりかけたランディを紹介した。

ミレイユ

警備隊准尉の女性。ベルガード門に勤務している。ランディのかつての同僚で、彼が警備隊に所属していたときは曹長だった。司令が事あるごとに外出して不在のため、彼女がベルガード門の事実上の責任者となっている。

（遊撃士協会）

アリオス・マクレイン

遊撃士協会クロスベル支部に所属するA級遊撃士。30歳。武器は刀。「八葉一刀流」の剣士で剣の腕は“剣聖”カシウス・ブライトをも凌ぐ。月に百件以上の依頼をこなすなど精力的に活動しており、クロスベル市民からは絶大な支持を受けて“風の剣聖”と呼ばれている。その卓越した能力により、遊撃士協会本部からはS級への昇格をも打診されているが、元S級のカシウスとでは役者が違いすぎると断り続けている。妻サヤは故人、シズクという娘がいる。かつては警察官で、セルゲイの下でロイドの兄ガイとコンビを組んでいたが「一身上の都合」で警察を辞める。

ミシエル

クロスベル支部の受付。おネエ言葉を話す男性。

スコット
銃を使う遊撃士。

ヴェンツェル

エレボニア帝国出身の遊撃士。スコットと共に行動することが多い。

エオリア

レミフェリア公国出身の女性遊撃士。医師免許を持つ。

リン

エオリアと共に行動することが多い女性遊撃士。男っぽい言葉遣いをする。「泰斗流」という流派の武術家でジンの後輩に当たる。

〔聖ウルスラ医科大学〕

セシル・ノイエス

ロイドの兄ガイの婚約者で、姉代わりの存在の女性。23歳。聖ウルスラ医科大学の看護師チーフ。働き者で穏やかな女性だが、ロイドと一緒にいる人は誰でも付き合っていると誤ってしまっほどの天然ボケをかます。

シズク・マクレイン

アリオスの娘。5年前に起こった事故で失明する（この時に母サヤは死亡、アリオスはサヤの死を切っ掛けに警察を辞めてしまう）、聖ウルスラ医科大学で療養生活を送っている。失明しているが聴覚は鋭く、足音で誰が来ているのか把握できる。

ヨアヒム・ギユンター

聖ウルスラ医科大学准教授で年齢は30代半ば。レミフエリア出身。薬学に詳しく優秀なのだが、仕事を研修医のリットンに押し付けては何処かへ行ってしまうので、度々周囲を困らせている。

〈マファイア〉

マルコーニ

マファイア組織「ルバーチエ商会」の5代目会長。56歳。成金趣味丸出しの小柄な男で、服装のセンスはイマイチ。しかし、マファイアのボスに相応しい貫禄を持ち、逆らうものには情け容赦しない冷酷さを持つ。帝国系移民の出身で、共和国にもコネクションを持つしたたかさを持つ。

ガルシア・ロツシ

「ルバーチエ商会」の若頭で、マルコーニの側近。42歳。大陸西部最強の猟兵団の一つ、《西風の旅団》の元部隊長で軍隊式格闘術で敵を瞬時に屠ったことから「キリングベア」と呼ばれている。商会の武闘派の筆頭であり、組織の武力強化に余念がない。

ツアオ・リー

カルバード共和国の犯罪組織黒月^{ヘイユエ}の幹部で、「黒月貿易公司」のクロスベル支社長。25歳。クロスベルの裏社会の覇権を「ルバーチエ商会」から奪うために派遣されてきた。目的の為には手段を選ばず、時にはロイド達を利用する事もある。頭脳派ではあるが、武術も非常に優れている。

銀^シ

東方の裏社会で伝説とまで言われる暗殺者で、「ルバーチエ商会」の牙城を切り崩すためツアオに雇われている。

～アルカンシエル～

リーシャ・マオ

劇団「アルカンシエル」に入団したばかりの新米団員。17歳。元々は諸国を放浪する旅人だったが、とある切っ掛けでイリアに才能を見出され、強制的に入団させられた拳句に新作の準主役に大抜擢されてしまう。気立ての良い頑張り屋で、イリアの猛特訓にも文句一つ言わずに付いて行っている。胸が大きい。

イリア・プラティエ

劇団「アルカンシエル」のトップスター。22歳。情熱的なダンスと神懸りの演技力で観客を魅了する事から「炎の舞姫」と呼ばれている。豪快でパワフルな性格をしており、舞台以外の細かいことを気にせず、行きずりの旅人であるリーシャを強引に劇団に引きずり込む程。

～財政界～

ヘンリー・マクダエル

エリイの祖父でクロスベル市長。中立派で市民からの支持は高い。警察官としての道を歩むエリイのことを見守っている。

ハルトマン

クロスベル自治州議会の議長で、マクダエル市長と並ぶ自治州代表。自治州代表だが帝国派である。

アーネスト・ライズ

マクダエル市長の第一秘書。エリイの幼少時の家庭教師だが、エリイが留学してからは疎遠となっていた。警察官の道を歩むエリイが迷っている様を見て、政治の道に戻ってくるよう説得するが、

後日、迷いが消えたエリイを見て最終的には彼女のことを見守ることにした。

データー・クロイス

IBCグループ総裁で、世界一の資産家。マリアベルの父。マクダエル市長の長年の友人であり、娘・マリアベルの幼馴染かつ親友であるエリイに対しては、「身内も同然」と様々な協力をしてくれる。

マリアベル・クロイス

データーの娘で、IBCグループの運営に携わる才女。エリイの幼馴染かつ親友であり愛称は「ベル」。髪型は縦ロール状のツインテール。

零の軌跡時のオリ主（後書き）

登場人物紹介は次にも続きます

登場人物紹介“後編”（前書き）

明らかになる詳細についてはその時に応じて紹介します

登場人物紹介“後編”

↳その他の住民↳

ワジ・ヘミングス

知性派を気取る不良チーム「テストメンツ」のリーダー。17歳。中性的な容貌を持つ皮肉屋だが高いカリスマ性を持ち、手下達からは神のように崇拜されている。見た目通りフットワークが軽く、空中戦を主体にした格闘術を得意とする。

ヴァルド・ヴァレス

武闘派の不良チーム「サーベルバイパー」のリーダー。20歳。「テストメンツ」とは対立しており、幾度も抗争を行ってきた。武闘派らしく高い腕力と凶暴な性格の持ち主だが、意外と面倒見も良いので大勢の手下に慕われている。鎖付きの木刀を得物としている。

アツバス

「テストメンツ」のナンバー2を務める、スキンヘッドの大男。普段はたまり場であるプールバー「トリニティ」でバーテンをしている。大陸中東部の出身であるということ以外の経歴は不明で、彼に関する詳細はワジですら知らないという。

イアン・グリムウッド

クロスベル市の西通りで「グリムウッド法律事務所」を営んでいる弁護士。気さくで人当たりがよく「熊ヒゲ先生」の愛称で親しまれている。市民、商人の他に警察とも懇意であり、生前のガイ、ダドリー、セルゲイとは度々情報交換を行ってきた間柄。

ハロルド・ハイワース

アルモリカ村で特務支援課と知り合うことになる、貿易商を営む商人。住宅街地区に自宅がある。堅実な商売を信条とし、妻ソフィアや息子コリンにも優しい好人物。アルモリカやマインツの人々からも信頼は厚く、周囲の評価は高い。

グレイス・リン

クロスベルタイムズの女性記者。24歳。強引かつ体当たりの取材が得意で、性格はかなりずうずうしい。

ヨナ・セイクリッド

元エプスタイン財団所属の少年。悪戯が過ぎてトラブルを起こして財団を出奔し、得意のハッキングで様々なデータを盗んで「情報屋」紛いのことを行っていた。態度が悪い。

↳エレボニア帝国↳

レクター・アランドール

オズボーン宰相の二等書記官で帝国軍情報局の大尉。

↳カルバート共和国↳

キリカ・ロウラン

リベールの異変後、その洞察力と問題解決能力を買われてカルバート大統領直属の情報機関“ロックスミス機関”への誘いを受け、共和国へと帰国。同機関の室長となる。

登場人物紹介“後編”（後書き）

次話から“零の軌跡”が始まります。

ここでクロウがどのような立場なのか補足しますとセルゲイ課長に誘われて特務支援課に初日から合流すると言っ形を取りたいと思います。

ランディ、ティオとは知り合い。ロイドのことはガイを通して知っている。エリイは深く知らない、ぐらいでしょうか。

第22話 特務支援課と彼 (前書き)

やっと零編にきました。投稿連日にして1000文字以下か投稿をなるべく毎日にして1000文字〜2000文字にするか模索中。

オリ主の名前は本文で書かれている名前にします。

電話の音はPPPPPです。

第22話 特務支援課と彼

くクロウ視点

私の元に知り合いのセルゲイさんから「ちょっとお前の手が借りたい」と連絡があったのは昨日の事。いやいや自分レベルにいろんなけれど、拒否することは不可能ですかっ！

もうお前の立場を用意したって……セルゲイさんは何をしたいんだろう？

警察署の受付に聞いたらここにいるって話だけど。

「失礼します！ たった今セルゲイさんに誘われて来ま……した……よ、と。はっ？」そこにいたのは血塗られた戦場で闘った戦友と自分のふがいなさから逃げ出した時に出会った青い髪の少女が部屋の中にいた。

くクロウ視点終了

セルゲイ「遅かったじゃないか。ほらお前で最後のメンバーだ。自己紹介でもしようか？」何事もなかったように進行させようとするセルゲイを横目で見ながらクロウの心中は暗くなる一方だった。

セルゲイ「あとはお前だけだぞ、クロウ？」いつの間にか他の人の紹介は終わっていたようだ。ふと眼を上げるとテイオと目があったが直ぐに逸らされた。そりゃあそうだよな別れ方が気まずかったもんな。セルゲイさんが何を期待しているのかは分からないけどここでやるっきゃないな。

クロウ「名前はクロウ・フォン・リベルと言います。24歳です。よろしく願います」当たり前障りのない普通な自己紹介しかできなかった。早く元通りにしないと……。

ロイド「えっと、特務支援課っていったい何をするとところなんですか？」やはり顔ぶれが若い気がするのは気のせいなんかじゃないってことだろう。

セルゲイ「まあ、色々とあつてだな。ここにいる全員はお前と同じ期待のルーキーだ」それって質問に答えてないよっ！初日から問題ありすぎ……。

PPPPP セルゲイ「おおご苦労さん」ロイド（あれは携帯用の端末。そんなものまで実用化されているのか）いきなり鳴った端末に時代を感じさせる。

セルゲイ「喜べ、ルーキーども。特務支援課がどんな場所なのかこれから素敵な場所できつくりと体験させてやろう」なーんか嫌な予感しかないのは自分だけだろうか。

ロイド「ここは？」

エリイ「駅前通りの外れ。一体何があるのかしら」

セルゲイの後に着いてゆくと重そうな扉の前まで来た。

セルゲイ「ここから先はクロスベル市の地下に広がる“ジオフロント”区画となる。今からここに潜ってもらおう」

ロイド「ええっ」

エリイ「潜るって」

ランディ「一体どういう事っすか」

セルゲイ「お前たちの総合能力及び実践テストって言うわけだ。ジオフロント内部はそれほど強くはないが魔物が徘徊している。それらを排除しながら一番奥まで行ってもらう」

ロイド「ちょ、ちょっと待って下さい。テストはともかく捜査官の仕事ではないですよね？」確かにそうだ。と言うかガイの弟は粗削りながらもよく気づくなあ……。

セルゲイ「まあ普通はそうなんだが、特務支援課に属するお前たちには訳があつてな。ともかくこれを受け取れ」と言うのと四人に渡したのは。

ロイド「携帯端末？」見るからに洒落た端末が渡された。セルゲイ「クロウのは無いんだがお前のオーブメント端末はどうする？」

クロウ「問題無いです。一応ラッセル博士からもらっていますから」と言つて懐に装着していた端末を見せる。少し傷ついているがロイドたちがもらった者と大差なさそうだ。

ティオ「第五世代戦術オーブメント通称エニグマENIGMAようやく実践ですか」

セルゲイ「ああ、財団から届いたばかりの新品だ。お前たちの特性に合わせて調整もすでにされている」まさに至れり尽くせりつて所でしょうか。

セルゲイ「こいつの扱いはテイオから説明を受けてくれ」

テイオ「面倒ですが仕方ありませんね。クォーツはありますか？」本当にめんどくさいのは嫌だと言わんばかりにやる気が感じられない。

セルゲイ「ほら、少ないがこれをやる」渡されたのは新人用の各七耀石の欠片だ。本当に少ないと言うのは心にしまっておこう。

セルゲイ「それじゃあ一通り掃討したら帰って来い。あとロイドは捜査官の資格を持っているからリーダーな」もう用は無いと言わんばかりに背中を向けて去ってゆく。

クロウ「あの人は変わらないな。ってか変わってるセルゲイがどうしても想像できない」やれやれと両手をあげてセルゲイを見送っている。あとの四人がこっちを見ている事に気付かなかった。

ロイド「セルゲイ課長とは知り合いですか？」

クロウ「ああ、長きにわたって知り合いだよ。ちょっとした事件に携わる事が出来てね、その時に知り合っただけさ。早く潜らないの？」もう少しで余計な過去まで言いそうになった。

エリイ「それにしても捜査官の資格を持っている人がいて心強いです。ロイドさんよろしくお願いしますね」

ロイド「あ、いや呼び捨てでいいよ。見たところ歳も近そうだし」

エリイ「そう？ちなみに私は18だけど・・・」

ロイド「ああ、それなら同じ歳だ。えつとあなたたちは？」

ランディ「オレは21だけど堅苦しいからタメ口でいいよ」

クロウ「さつきも言ったけど24。でも敬語は無しの方向でお願い」

ティオ「14ですが」

ロイド「ふーん……？えつ14歳？警察官になるには16歳以上だったはずだし」困惑するロイドにティオは警察官ではなく財団から出向したテスト要員であることを明かした。

それはティオの武器によるものだがオーバー・スタッフ魔導杖と言う機械仕掛けの杖の实践要員と言う話だった。そしてメンバーの武器紹介は続く。

ロイド「俺の得物はこれさ」と言ってトンファーを出す。これがしっくりくるそうだ。機動性と防御性を重視した警察官らしい武装と言える。

エリィ「私のはこれね」競技用に改造された導力銃。狙いもばっちりというので遠距離は任せても大丈夫そうだ。

ランディ「俺のはこれだ」スタンハルバートを持ち出す。重量はあるが敵の動きを止めるのには役立つだろう。

クロウ「最後はオレだな」腰と背中から銃を出す。

エリィ「私のと違って重そう。それに威力もありそうだし」

ロイド「そうだな。あまり対人用には使えそうにないけれど一体どうしてこんな武器を」

(本当にどうしてだろうな、でも過去に使っていた武器も殺傷能力が高い武装だしどうしようもないんだがな。いつかは話さなきゃならないときが来そうだ)

クロウ「まっ、色々考えるとところがあっただな、ん？ランディどうしたん？」目線を感じてそちらの方に向くとランディがいた。

ランディ「んにゃ、なんでもない。趣味が合いそうだからちょっと熱く視線を向けただけさ」

クロウ「じゃあ行きましようか、リーダー殿！」はりきってジオフロント区画に行く5人にはこれからどのような事が待ち受けているのだろうか

第22話 特務支援課と彼 (後書き)

ぐだぐだそして矛盾が起きそうな展開・・・はあく。お便り待っています

第23話 ぐんぐんおもしろい (前書)

オリジナルの話です

第23話 くらまーさんと

ジオフロントに潜ろうとした5人だったがクロウにセルゲイ課長から電話が。

セルゲイ「あーもしもし、クロウ？ やってほしい仕事が出来た。住民の新たな住居探しを手伝ってくれ。行政区の噴水のところで待っているから。じゃあとよろしくー」プツツと電話は切れた。

クロウ「えーっと、これでいいのか課長っていう仕事は……。ロイド、他に仕事が出来たから外れるね」一応、許可を取ってからその場を立ち去る。

ロイド「分かった。気をつけてね」ロイドとほかの三人も手を振ってクロウを見送った。

くクロウが立ち去ってから

ランディ「なあなあ、クロウに来た仕事の内容に女性関係している気がする。こりゃああとで問い詰めないと……。」「どうでもいいことで鋭い勘が働くランディだった。四人は地下へと潜って行った。くここでは原作と同じ経験をするのでカット

クロウ視点

ふいふ着いたけど噴水の近くって……。おっいたいた。パーカのような服を着た女性がそこに立っていた。

「あの〜貴女が住居を探しているって言う方ですか？」あまりの美貌にドギマギしながらも聞いた。

？「はい。そうですねけれども貴方は？」疑惑の目で見られていた。まあ自分の目はあり得ない方向へと向いていたからだ。その〜
・胸が普通よりおっきい。

「…………はっ！えーつとあまりの美しさに驚いていました。私はクロスベル警察署の特務支援課に所属するクロウと言います。依頼に応じて来ました」少しボーっとしてしまったが仕方が無いと思いたい。

？「申し遅れました。私の名前はリーシャ・マオと言います。突然の依頼ですがよろしくお願いします」満開の花が咲いたかのような笑顔を見せてくれた。

「では候補を一緒に回りましたでしょうか？最初は住宅街です、俺には相手がいるのにこれは反則だろ」ランディあたりが喜びそうだ。紳士な態度で真摯に振舞わないと。はあ〜精神的に疲れる…………。

リーシャ視点

クロスベルに来て右も左もわからない時に遊撃士を頼るのが一番とみんなは言う、だけど勘が働いて今回は警察の方に頼むことにした。皆が警察を頼ろうとしないのには何か訳があるんだろう。

少し待っていると挙動不審な青年が私に声をかけていた。最初は警察官じゃないと思った。どこかのファンか何かだろうと…………。

特務支援課に所属しているクロウと自己紹介してくれた。そして大抵の男性は第一に私のおつきくなった胸を凝視しているけれど、クロウさんも見てる……。

嫌ではないんだけど皆、私の本心じゃなくて外見しか見ないんだろつか……。少し寂しいな。でも少し聞こえてきた言葉に“相手がいる”って聞こえた。この人には恋人いるのかな。それなら安心かも、私も少し落ち着いた。そうこうしているうちに最初の候補地へと辿り着いた。

第23話ぐらまーさんと（後書き）

リーシャって良いですよ？何がって、そりゃあ……ね。
ですが、作者もクロウもクローゼー筋です。
次もオリジナルです

第24話「出された条件」(前書き)

オリジナルです

第24話 出された条件

最初に来たのは、高級住宅街が立ち並ぶ場所だった。さすがにここは無理だろうなと思いつながら候補地の中に載っていたので案内した。

「ここが最初の地区です。少しと言うかかなり高級感があふれる地区で議員や市長の住居があります」リーシャを見ると呆気に取られていた。そしてこつちを少し睨みながら。

リーシャ「無理ですっ！この街には来たばかりですし前は旅を転々としていただけなので貯えと言うものは無いんですよ。もつと安いところはありますか？」どうでもいいが胸が……。気を取り直して次の候補へと向かう事にした。（俺の恋人はクローゼ……）

次の候補地は西通りだった。ここには書店やパン屋やハイツが二棟建っていた。一つは庶民的な建物。そしてもう一方はなんと“アルカンシエル”の看板を背負っているイリア・プラティエが住んでいる住宅街より少しグレードは落ちるものの高級感あふれる建物が建っていた。あれ？

「間違っていたらすみませんがリーシャって仕事は芝居やってる？」ちよつと気になった事があった。それは候補を回っている時にリーシャに向けられる視線が有名人を見るような視線だった事。そして極めつけは住宅地から西通りに進む時に見た“アルカンシエル”のパンフレットだった。

リーシャ「えーつと今まで気が付かなかつたんですか？そうです。“アルカンシエル”で踊っています。クロウさんは演劇に興味が無いんですか？」やっと気付いてくれたことに嬉しさを滲ませるリーシャは可愛いとは口に出して言えない。

「あ、ああ。最近見てないよ。リーシャの事だからきれいに踊るんだろうな〜見てみたい！」ポロつと本音が丸聞こえ。クロスベルでは有名な二枚看板とまで言われている二人なのだから幻想的なのだろう。ちよつと想いにふけていたようだ。気が付くとリーシャの顔が間近にあった。

リーシャ「もしよろしければ今度遊びに来ませんか？」と言う言葉に即答する、クロウ「ええっいいの？」リーシャ「ええ、ですが条件があります」その時クロウ曰く何を求められるのだろうかと不安に思っていたようだが、リーシャの条件は至極簡単なものだった。

リーシャ「普通に話せる友達でいてほしいんです。歩いていても見られるのは“アルカンシエル”の踊り子という肩書きが着いてまわりつくんです。だから外では普通に話せる相手が欲しいんです」真剣なそして、真摯な気持ち伝わってくる。この子の相談相手になつてあげようとそう決めて出した答えは……。

「うん、わかった。俺はリーシャに外で会う時は普通の少女と接して、相談相手になり友人であり続けるよ」クロウの言葉が冷やかしたものやなにか裏があるような言い方ではなかった事に本当に感謝を繰り返し目に薄っすらと涙を浮かべるリーシャがいた。

第24話 出された条件 (後書き)

日付が変わると29日。“碧の軌跡”が発売される日だ。小説を疎かにしないようにします。続きもオリジナルです

第25話 決まった新住居 (前書き)

初日はクロウとロイドたちを別に見てみました

第25話 決まった新住居

ぐずついた顔を手で拭いてクロウに向き直るリーシャ。目の周りが赤くなっている周りは痴話喧嘩と見られていたようだ。慌ててリーシャの手を取りそこから走り出した。

リーシャ「す、すみません。すぐうれしくて涙が出ちゃいました……」エへへと笑って髪の毛をかき上げた仕草にもドキッとさせられるのには参った。罪悪感が湧いてくる。夜に電話しようと思っただクロウだった。

そうこうしているうちに中央広場を通って東通りへと来た。ここには料理店や遊撃士協会、露店が立ち並ぶ場所であった。

リーシャ「さっき警察署に相談に来る時、言われたんですがどうしてこの人たちは何かあると遊撃士に頼るのでしょうか？」ふと思い出したようにクロウに質問して来た。

「ああ、あんまり俺も分からないんだけど遊撃士の方が信頼にあたいするらしい。逆に警察官はあまり市民の助けにもならなかったりして信頼度が低いって訳さ」答えていて自分がおかれた状況があまりにも危うい事にどんどんと気分が落ち込むのがリーシャにも分かったのだろう。

リーシャ「ごめんなさい。何もクロウさんが頼りないって言うてるわけではないんです。ただ少し気になったものですから」クロウの肩に手で軽くたたき励ますように言葉を紡ぐ。

「大丈夫です。この状況を打破するために特務支援課が作られた

みたいです。最後の候補地に行きましようか。少し治安が悪いのですが一番格安です」気を取り直して旧市街へと足を運んだ。ここは二つの不良グループが存在して何かと問題を起こすどうしようもない状態が続いていた。

かなり古い建物が立ち並んでいたがリーシャの足が止まり即決ではないが決めたらしい。

リーシャ「ここにします。少しでも家賃を安いところに惹かれました」リーシャがそういうならいいんだけども……。何か釈然としないものを感じた。女性と言うのは普通治安が良いところに住もうというのではなからうか？なのはどうして……。この疑問は明らかにならなかった。

行政区で居住が決まった事を紙面に纏めて正式に登録した頃にはお昼近くになっていた。下心は無いがこのまま別れるのはちょっと……。と思い食事を取ることにした。場所は東通りの料理店。魚料理がおいしいとの評判を聞いてやってきた。値段も手頃、味も美味しい言い事づくめだ。

「ロイド達は旧市街のいざこざに巻き込まれ、法律事務所に行ったり大変な様子」

リーシャ「美味しかったですねクロウさん？」満面の笑顔を浮かべ心から良かったと思えるような様子でこちらを向く。

「そうだね、ここは皆にも教えておこう」みんな？と聞くので支援課の仲間の事と付け加えておく。

「これからクロスベルに来て一番行きたかったところに行くけれ

どリーシャの予定はどう？」「頷いて一緒に行くと言うので教会に行
った。

リーシャ「どうしてここに来たんですか？」少し雰囲気が変わっ
たクロウに驚きながらも控えめに尋ねる。

「うん。ここには大切な親友が眠っているんだ。俺はあいつから
気まずさを感じて逃げてしまった。そしてその後悔が無くなる事は
無い。だけれどももう後悔しないために報告しようかと思ってるね」

リーシャ「そう・・・ですか」やはりリーシャは連れてこなかった
方がよかつただろうか。後悔話を聞かせたとしても自分も相手も晴
れやかになる訳ではない。

食事の後で別れば良かった・・・って思っても無駄。帰り道は
二人とも言葉少なめでリーシャが決めた住居まで送った。

リーシャ「今日は本当にありがとうございました。家も見つかつ
て友人を作ることが出来ました。えつとどうしてクロウさんが後悔
しているのか分かりませんが落ち込まないでくださいね！」着いて
からの言葉はこれだけだった。が、リーシャは本当に良い子らしい。
少し気持ちを落ち着かせる事が出来た。

旧市街から出るともう夕方になっていた。セルゲイから連絡があ
って中央広場にあるビルに来るように言われた。ここが支援課の住
むところになったみたい。

クロウの部屋は階段からロイド、ランディ、クロウの順になった。
少し建物内が暗いのはロイドたちが今日、経験したことに起因して
いた。このまま支援課をやっていくのか、ロイドも自分の進むべき

道に混乱していた。

クロウの部屋の扉がノックされた。「はい、どちらさん？」相手はロイドだ。

「どうした？浮かない顔をして」招き入れたがロイドの表情は暗いままだった。優秀な捜査官だった兄に憧れていたようだが自分の将来に不安を感じていた。

ロイド「クロウはどうして特務支援課に来たんですか？」

「セルゲイさんに誘われたってのが一番の理由だ。今はそれしか言えない。何かの事で悩む少年にアドバイスだ。逃げるのは簡単だが立ち向かうのには勇気が必要だ。そして何か問題があってもロイド一人じゃないさ。それを忘れるな」両手を落ち込むロイドの肩に載せ励ます。

ロイド「考えてみます。失礼しました」少しは暗い表情も無くなったが明るいとは言えない。

（回想）

（今日君の弟に会ったよ。あと君と一緒にいたテイオにも。最初に会った時より表情が付いてきたな。ガイのおかげだ。ロイドにはカッコいい事言ったけど俺は楽になりたかったからお前から逃げたんだぜ。今の姿を見たらどう思うだろうか・・・？）

第25話 決まった新住居 (後書き)

オリジナル難しいです。これが限界。駄文ですがご覧ください

閑話〱夜の会話〱(ランディ)〱(前書き)

オリジナルです

閑話〜夜の会話〜（ランディ）

コンコンとクロウの部屋の扉がノックされた。「どうぞ」の返事の後に入ってきた人物は。ランディだった。

ランディ「よあ。久しぶりだね、元気だったか？」手に酒を持ってクロウの部屋に来たみたいだ。会話には柔らかい口調で本当に再会を願っていたふうに見受けられた。

「ああ。元気だったさ。ランディは？」椅子を勧めて座るように促しながら聞く。

ランディ「変わらず傭兵続けていたが一応見切りをつけて辞めた。で、国境近くの警備隊に配属になったがしょうもない理由でクビになってセルゲイさんに拾われた・・・クロウはどうだった？」ワハハと豪快に笑いながら酒を一口飲む。

「ああ、こつちも傭兵の後、共和国のほうで起きていた子供の誘拐事件をカシウス・ブライトと一緒に解決に向けて力を尽くしていたらいつの間にか遊撃士になっていた。それなりに楽しかったけど」クロウもランディとグラスを合わせて酒を少量飲む。

「そういうえば親父と妹は元気かい？あれから手合わせしていないからどうしてっかな」懐かしむように空中を眺め聞いてみた。

ランディ「どうだろう。別れてからは連絡も取っていないが元気にやってんだろ！」また一口。

「そっか。支援課での仕事続ける？」今日の事は少しロイドから

聞いていたためランデイにも聞いてみた。

ランデイ「うーん、セルゲイさんに拾われた借りがあるし何より自由にできそうだから続けるよ。クロウも続けるっしょ?」「ああ」「そっか。そう言えば別件で入った仕事って何だったんだ?」「思い出したように問うランデイに女性を案内していたと言うと俺にも紹介しろーって絡んできた。

見ると持ってきた酒はほとんど飲んで空に近かった。40%もあるのがぶ飲みに近いペースで飲んでたもんな。部屋に置いてくるか……。

自分の部屋の扉を開けてランデイの部屋に向かう、ずるずると干鳥足のまま意味の分からない絡んでくるのでイラっとして鳩尾に肘打ちで眠った……?

ほんつと変わらないな。やっと平和な町に戻ってこられたんだー。やれやれと言わんばかりに自分の部屋のドアに手をかけたら。

??「クロウ?ちょっと話さない?」と小声で話しかけてくる少女の音が……。

閑話、夜の会話、(ランディ) (後書き)

“碧の軌跡” 買いました。間を開けないように小説も書きます。

次も閑話です。

閑話ゝ夜の会話ゝ（ティオ）

ティオ「こうして間近で話すのは初めてか数えるぐらいしかなかったね」数年前よりは少し感情の起伏を感じられるようになったティオだが、最初は無表情を地でいっていた。

「そうだね。あの時はガイが近くにいた。そして段々と年齢相応の少女に戻って行くティオを見て俺に出来る事は無いと考えて逃げた・・・我ながら少年だったというわけだ」少し自虐的にティオに話す。そんなクロウをティオは少し顔を歪めて聞いていた。

「廊下ではゆっくり話せないから俺の部屋に来るか？」扉を開けて迎える。

ティオ「襲わない？」襲わないってば！俺には相手がいるし」そっか、残念・・・」本気なのか冗談なのか分からない表情でクロウを誘惑？していた。まあ人間らしくなってきたのが少し嬉しかった。

「それで聞きたい事何かある？」窓辺に吊るしてあったカゴから飲み物を取りだす。未成年用にジュースをティオに渡した。大体の予想はつくけれども。

ティオ「あれからどうしていたの？ガイさんも探していたけど見つからなかったって言ってたし私も少し気になっていた」ジュースを飲むうとして口をつけず俯き加減で聞いてきた。

「笑うなよ？あー自分探しの旅だ」指で頬を掻きながら答える。数秒後聞こえてきたのは。

ティオ「プツ……」笑った！「いえ笑っていません。それでその後の事を教えて」今絶対笑ったろ。って思いながら話をした。

カシウスの家に行く途中に可愛い女の子に会ったこと。準遊撃士の二人に会ったこと。そのままリベールで起きたクーデターに少し助力して解決したこと。浮遊都市での冒険、そして恋人の誕生までを抜粋しながら伝えた。

冒険のところでは目をキラキラ輝かせて耳を傾け、女性の話になった瞬間ジト目で見られたのには百面相でティオを見ているのが楽しかった。

ティオ「良かったです。音信不通になってから最悪の事を考えたりもしていましたが、こうして無事で再会できたのでそれだけで胸がいつぱいです。でも恋人が出来たんデスネ……？」ものすごい笑顔を向けているはずなのに冷や汗が止まらない。

「えーっと、ティオさんや？何かしでかしただろうか？」

ティオ「いえ、別に……。心配していた相手が相手を作っていた事にちよつと腹が立っているとかいうわけではありません「嘘だね。それは嘘だ」半分くらいは本気です」ジョークを言えるまでに感情がはつきりして来た様子に更に嬉しさが込み上げてきた。

ティオ「それでは明日からよろしくお願いします」（ペコリ）頭を下げて部屋から去っていく。

何だか異常に疲れた……。これは電話して英気を養わねば……。スキップしながら屋上を目指していくのをエリイが見ていた。

エリィ「なにかしら・・・これ？」料理を作って失敗したわけではななぞうです。

閑話、電話、（前書き）

「電話での会話」

閑話〜電話〜

PPPP「もしもし？クロウ久しぶりね、元気だった？」弾むような声が聞こえて来て初日で疲れたぶんが一気に吹き飛んだ。

「ああ、元気だよ。いきなり電話してごめんね？でも声聞きたかったんだ」

クローゼ「ううん、大丈夫だよ。私も聞きたかったし・・・そっちの仕事はどう？特務支援課ってきいたけれど」

「うーん。一言で言えば遊撃士の二番煎じ的な雰囲気があるよ」

クローゼ「アハハ、駄目だよお、勤務先の悪口言っちゃあ」

「いやー遊撃士を経験した後に支援課に配属されてやったことと言ったら新住居を探している市民を案内することだもの、遊撃士と大差ないよ」

クローゼ「そっか、そっか。あまり危ないことしていないなら貴方のコト信じているから」

「嬉しい事言ってくれるね。そうそう、ケビンに巻き込まれた事件はどうなったの？ちょっと心配だったんだよー」

クローゼ「あれは解決したよ、でも・・・」

「ん？どうしたの」

クローゼ「本当に貴方はケビンと会ってないよね？すごく似た人に出会ったんだ、不思議な気分だった」

「いや、行ってないし。クローゼと会っていないときにケビンが経験したことだろう？どこでオレそっくりな人と会ったの？」

クローゼ「うん、あれは・・・グランセル城にそっくりに作られた場所を探索していた時だったんだけど、でも闘技場で戦闘したあとに出てきた人物が貴方にそっくりだったのよ。最初は少し似てるなあぐらいだったけれ段々と本物？っておもうようになったの・・・」

「へえー不思議なこともあるもんだね。こっちもケビンに聞いてみるよ、でも嬉しかった、クローゼの声を聞いたんだから・・・」

クローゼ「うん、私も。もう遅いから寝るね。他に分かった事があつたら連絡します。おやすみなさい貴方・・・」

「ああ、おやすみ・・・」

ふう、それにしてもオレそっくりの敵とは・・・。俺の知らないところで何かが起きているのは確かだ。今日会ったリーシャつて子も何かを隠しているようだったし。いつか教えてくれるといいな。さて戻るか・・・。

閑話〜電話〜（後書き）

3rdは外伝と言う形で煮詰まったら書くかもしれない。

書くなら黒騎士に對^{こい}となる白騎士とかがいいかもしれません。その場合も作者の妄想が暴走します。

リーシャのことは最初から疑っています

外伝『もうひとつの始まり』(前書き)

煮詰まりました。少しは外伝を続けようかな。

外伝もつひとつの始まり

ここは……？いつものように自分の部屋で起きたのではない。周りが上下左右の固定されていないいわば無重力空間のような場所で目覚めた。微かな人？の気配がする。

「誰だ。っ、お、お前は？」疑惑の目で気配がした方を向くとそこにはレーヴェの姿があった。見慣れない黒い甲冑を着てクロウの横に佇んでいた。

レーヴェ「お久しぶりです、クロウ。このような形で再び会えて嬉しいです」少し違和感があった。ここにいないような雰囲気、霧困気が漂っていた。

「ここは……？そしてレーヴェの存在が希薄なのはなぜ？」疑問点を聞いてみると思いもよらない答えが返ってきた。

レーヴェ「ここは隠者の庭園となりつつある場所です。そして希薄な理由は私が記憶の中から再創造されたからです。ここに貴方を呼んだのは浮遊都市崩壊時にケビンの近くにいたからです」

「それで単刀直入に言うとなんがしたい？」腹の探り合いはしなくもいい、と言わんばかりに問う。

レーヴェ「それは……今のところわかりません。一つだけ言えるのは私とあなたの役割です」困惑したような表情を見せながら続けて言う。

「ケビンの周りにいた他の仲間に対すると言う事です。私は作られた存在なので拒否はできませんがあなたには一応拒否することもできます」

「レーヴェと共闘してみたいから了承した」深く考えずに答えを出した。

レーヴェ「この上司は影の王と呼ばれる存在です。この存在も浮遊都市崩壊が影響しているようです」

「そうか……。でもケビンらに敵対するって事はクローゼも間違いなく出てくるよな。レーヴェのように顔を隠すしかなさそうだ。レーヴェが黒騎士なら俺は白騎士の甲冑で作ってみよう」

その後すぐに隠者の庭園が創造されていった。あとはここにケビンらが来ると準備は整うようだ。

さて本当は存在しないはずのクロウがケビンの物語に入ることによってどんな語りがなされるのだろうか……？

外伝『もうひとつの始まり』(後書き)

連日投稿できなくて申し訳ありません。理由は一つだけ。

碧の軌跡をやっておりました。キアにクローゼ可愛いです。あと
シャーリィ・オルランドも可愛いデス

第26話 支援課の日常(前書き)

間が空くと色々な意味で悪い方向へ行きます。どうしよう……

第26話 支援課の日常??

夜が明けてセルゲイ課長にこれからどうするのか決める時が来た。ク로우他四人は残って支援課を続けることに決めたみたいだ。

セルゲイ「さあ、お前は どうする？このまま古巣（遊撃士）に戻っても将来有望な身だ。その方が良くとか考えてそうだが・・・」

ク로우「一晩悩みました。そして自分の身のあり方をもう一度考えた末、支援課でお世話になることを決めました」晴れ晴れとした表情を見せながら課長に報告した。

セルゲイ「そうか、残ってくれて嬉しいよ。俺が誘ったのにリベールに戻られたらどうしようかと思った。まあ俺は放任主義だから勝手にやってくれ。あとその端末から支援要請が来ているか確認すること」煙草に火をつけあとは任せたと言わんばかりに自分の部屋に戻る。

ロイド「えーっと、これでいいのか？」他のみんなも同様に呆れていた。

ク로우「それはともかく端末を見てみようぜ」

五人で端末に向かうと警察署で“支援要請の補足説明”と言うのが載っていた。

ク로우「ふーん、端末を確認してここから仕事を請け負うと言うことなのかな。近代的でなによりだ」（前は掲示板を覗いてから仕

事に行くだったから楽になったもんだ)

セルゲイ「あーっと、ロイド。これから仕事をしていく街を皆に紹介してきな。警察署に行く途中で良いから……」扉からひよいと顔を出して一言呟きまた、中へと消える。

ロイド「……分かりました。警察署に行きがてら散策に行つてきます」もう諦めたのか突っ込まないでそのまま流して外へ通じる扉を開けた。

まずは中央広場の武器屋に行く。ここでは許可が無いと売ってくれないがセルゲイが造った部署である事が分かると武器を売ってくれることになった。

次にオープメントのショップ。ここはロイドの幼馴染が勤めていて新型エニグマにも対応して改造してくれる。

そののち百貨店に行くとこの支配人がエリイのことを“お嬢様”と呼ぶ事に一同驚いた。どこかのお嬢様なのだろうか。ってかロイド気付こうよ、名字は……であることに。面白そうだから気付くまで放っておこう。

東通りは異国を思わせる店が並ぶ。中華料理店や魚屋。商工会の会長の家や遊撃士協会が立ち並ぶ。

クロウ「あーちょっと、知り合いのところに行っても良いか？」

ロイド「ああ、いいけど。どっ？」

クロウ「そこの遊撃士協会だよ」

ロイド「へえー……えっ。クロウって遊撃士だったのか？」

クロウ「言っただけでなかったっけ？前は遊撃士だよ。リベルではね」

ティオ「……」

エリイ「意外ね。同僚になって間もないから知らないこと沢山あると思うけどこれから分かってくればいいよね」

ランディ（傭兵の次の事を言っているのか？クロウも表に出られる仕事してたんじゃん！）

クロウ「ちわーッス」四人の言葉を聞き流して遊撃士協会の扉を開く。

？「あら、いらっしやい。随分と懐かしい人が来たわね」この受付は男性だが言葉使いがどうも怪しい……。

クロウ「あんたも変わらず元気だね。今日はクロスベルに来た事と新しい仕事先の人と一緒に来たわけだが、あんまりいじめるなよ。ここでは何かと騒がれている警察の面々だからさ」

ミシエル「そうなの？へえークロウ、警察に入ったんだ。その選択肢は思いつかなかったな」クネクネと体を揺するのだけはどうも見慣れないし慣れたくもない！

ロイド「はは……どうも。ロイド・バニングスと言います」

一応挨拶は大事だと思っただけで驚きを隠して自己紹介する。

ミシエル「バニングスってあの……？」クロウに向かって自分の知っている人物と同一人物なのか確かめる。

クロウ「ああ、そうさ。“あの”バニングスだ。ミシエルの考えている事で正解さ」

ロイド「兄貴の事を知っているんですか？」

ミシエル「知っているよ。っていつか有名なもの。でもこの話はまた今度」

受付が変わっている遊撃士を後にして旧市街へと行く。ここは発展しているクロスベルからは離れ二つの不良グループが存在し何かと荒れている場所だ。エリイヤテイオは長居したくない様子で直ぐに離れて行った。ロイドとランディも続くようにして立ち去った。クロウも去ろうとしたところ……

？「あれ、クロウさんではないですか……昨日ぶりですね！弾むような声が聞こえて来て後ろを振り向くと昨日案内したリーシヤがそこに立っていた。」

クロウ「そうだね。あれから大丈夫だった？」片手をあげて挨拶してここの治安が悪いので心配しているんだよ、と付け足した。

リーシヤ「ええ、みなさん良い人たちばかりですよ。ここを紹介して下さってありがとう」それは下心があって親切にしてるんだよと思いつつ「そうですか」としか言えなかった。

リーシヤ「今おられた人たちは誰ですか？」

クロウ「支援課にいる他の人たちだよ。旧市街は治安が悪いから長居したくないみたいで。そう言えばリーシャはどこか仕事は決まったのか？」

リーシャ「ええ、アルカンシエルに決まりました」

クロウ「アルカンシエルって……。ああ、劇団か。今度見に行っても良い？」

リーシャ「応援して下さるのでしたらどうぞ来てください」

クロウ「ファン一号になるのかな。楽しみにしているよ。それじゃあ仲間を追いかけないといけないから失礼するよ」

リーシャ「こちらこそ、足を止めてしまつて申し訳ありません」
深々と頭を下げるリーシャに手を振って旧市街から立ち去った。

ランディには遠目で女性と話していたのが見えたのか追及されたが……。教えないよ！

第26話 支援課の日常?? (後書き)

オリジナルを入れたら何故かリーシャが出やすい。

第27話「支援課の日常」(前書き)

区画の紹介が説明口調になるのは申し訳ないです

第27話 支援課の日常??

ランディの追及をかわし次に向かったのはロイドが捜査官になる前にお世話になった、西通りだ。ここにはもう一人の幼馴染が勤める美味しいと評判のパン屋がある。ここでは料理手帳をもらった。これでレシピを書く事が出来る。

次に住宅街に行く。すると落ち着きを無くすエリイがいた。クロウは名字を覚えていたし市長の家がどこにあるのかも知っていたので落ち着きがなくなるのは分かるがロイドは鈍感なのだろうか。

閑静な家が立ち並び門自体に鍵がかかって、大きな家の前に五人は着いた。

エリイ「ねえ、鍵がかかっているみたいだからそのまま違うところに行こうよ」

ロイド「?、そうしょうか。次は歓楽街でも……」

エリイ「ふう……」その様子を見ていたクロウは。

クロウ「良かったね?ロイドがエリイの名前に気付かなくてさ」と小声で喋る。

エリイ「っ!ああ、クロウなの。私の家について知ってたんだ……」

クロウ「エリイが何を考えているかは知らないが自然と明らかになるまではそのままにしておくよ」あまり興味が無いようにそのま

ま皆と歩調を合わせて歓楽街へと向かった。

ここは高級ホテル、カジノ、アルカンシェルがあり遊べるところとなっている。

ランディ「なあなあ、息抜きにカジノ寄ってこっせー?」何を言うかこの遊び人!

ロイド「駄目だよ。今は仕事だからさ」

クロウ「そうそう、休日行けばいいっしょ?」

ランディ「ったく、お堅い連中だコト……。分かってるってば」

クロウ「じゃあ、次はどこに行く?」

ロイド「裏通り……。かな?」

クロウ「名前の響きからして嫌な感じになるんだけど……」

ここにはカクテルバーとルバーチエ商会、それと怪しい店がある。ここも女性陣が敬遠して近づきたくなかったのか、ロイドから説明を受けて直ぐに去って行った。これでめばしいところはまわったはず。警察署に向かう事にした。

ここでは支援課に届く要請をどのように受け達成した後に、どのように報告するかについてレクチャーを受けた。これで支援課に戻って報告することで最初の要請説明は終わるらしい。

戻って報告した後に端末を見てみると新たに要請が更新されていた。その中にはジオフロント内での魔獣退治が含まれていた。口イドは皆でやれば出来るさ、と熱血を發揮。ジオフロントに行く事になりましたがクロウだけは断った。

第27話 支援課の日常?? (後書き)

“零の軌跡”は書きたかったので長編になると思います。

“碧の軌跡”を書くかもしれない。

読者の方々が少しずつ増えていることに感謝です。

第28話〜暗躍〜（前書き）

オリジナルです

第28話〜暗躍〜

クロウ「ジオフロントに行こうとしたのに誰？仕事の電話を入れたきたのは？」

「もしもし貴方は“沈黙の死神”でよろしいですか」

「聞こえてるよ。それでどんな仕事？あと依頼主は誰？」

「質問ばかり……。私は黒月ヘイユエに所属するツアオと申します。暗殺の仕事をお願いしたいのですが、こちらが抱えている暗殺者だけでは戦力が足りないのです」

「それでこっちに尻拭いをさせようと……。そういうわけか」

「言い方は悪いかもしれませんがそれで合っています」

「引き受けよう。どこに行けばいい？」

「ありがとうございます。黒月ヘイユエは港湾区にあります。立ち番の人には貴方の事を言っておりますのですぐに来てください」

「分かった。ではあとで……」

「はい、お待ちしております」

クロウ「へえ、黒月ヘイユエか。名前だけは聞いたことあるな。今の俺は警察所屬だけれど傭兵も辞められない事情がある。さてと、自分の

得物持っていくか」

支援課の自分の部屋に入ってベッドの下から大剣を持ち出す。そして人に見られないように屋上に行きそこから瞬動で屋根から屋根へ跳び黒月にあつという間に着いた。

クロウ「ツアオに言われてきたクロウだ」

立ち番「どうぞお入りください」

ツアオがいるであろう部屋をノックした。「どうぞ」の声がしたので入ると全身黒づくめの男性？が佇んでいた。

？「っ！」一瞬驚いたような表情は見えないがそんな感じがした。

ツアオ「こちらは黒月所属の銀殿です。そして助っ人として来たのは“沈黙の死神”として知られているクロウです」ツアオの机の横に立っている人物が銀というらしい。そして自分も紹介された。

銀「よろしく頼むよ。ひとりでは辛い仕事だね」

クロウ「ん。分かった。よろしく」誰かと雰囲気似てるけどまさか、違うよね。

ツアオ「黒月は今ルバーチェとしのぎを削っています。それでも多くのマフィアを倒してほしいのです。暗殺と言うよりも殲滅と言った方がいいでしょうか」

クロウ「分かった。で、いつまでにやればいいんだ？」

ツアオ「早ければ早いほどいいですが貴方には表の顔もあるので忘れなければいいです」

クロウ「甘い依頼内容だが引き受けたからにはやらせてもらおう。元傭兵だから報酬は出来高で良い」

ツアオ「分かりました。成果を待っています」

第29話〜暗躍〜（前書き）

戦闘は紙です。そして短い……

第29話 暗躍？

昼間から殲滅と聞くと無理って思うかもしれないが、クロウは堂々と真正面から突き進んだ。地方の組織員が滞在している場所を潰していく。比喩的な意味ではなく物理的に。つまり、クロウのオリジナルアーツである重力で潰す。

組織員A「こんな昼間から何の用ですかー？」

クロウ「死を届けに来た。大人しく死んで？」右手をかざしてエニグマを通してアーツ発動。たちまち組織員のいた場所に見えない重りが落ちてくるようにじわじわとつぶれる。

A「な、なんだっ。お、重くて動けない。ぎゃああああ・・・」
両足が複雑骨折。腕から骨が飛び出て激痛にもだえ苦しむそして重圧で目を覆いたくなるような鈍い音が断続的に響き室内にいた他の組織員BやCも同じように潰れてゆく。

銀「“沈黙の死神”とは程遠い殺しだな」銀は普通に斬って亡くしていた。

クロウ「“元”が付くしそれに闘い方を少し忘れてしまっただね。これからの為に思い出しておこうと・・・」話している間も一人、また一人といなくなりついに誰もいなくなった。

銀「こちらが24人。クロウが37人。事前に聞いていた人数と合っているから漏れはなさそうだ。ツアオのところに行って報告しないと・・・」

クロウ「なあ、ちょっと聞いても良いか？」

銀「……なんだ？」

クロウ「あんたと俺は最近会っているよな？」

銀「どうしてそう思う？」

クロウ「雰囲気と仮面で見えないはずの顔の表情が最近会ったやつと同じだね。で、返事はどっち？」

銀「ああ、そうだよ」仮面を外すとそこには見知った顔が……。

クロウ「やつぱり。 なんだな？」

銀？「薄々はバレているんじゃないかなとは思っていたけれどこれだけ早いとは予想もしていなかった……」

クロウ「そうか。で、あんたはどうする？俺はどっちでもいい。だって俺はあんたの正体知っててあんたは俺の正体知ってるから互いに秘密でも持とうか？」苦笑気味に伝えると。

銀？「うん、それでいい。ありがと……」

第29話 暗躍(?) (後書き)

銀???. ?は原作通りに明かします。知っている人も知らない人もそこまでおまちください。クロウだけは知っているのはオ리지ですから。

第30話〜可能性〜(前書き)

所々の台詞にAとかDとあるのはマフィアの総称です。名前まではさすがに勘弁。

第30話 可能性

殲滅を終えて支援課に戻るともう夕方が迫っていた。玄関付近で他のメンバーにも会う事が出来た。それでも支援課の仕事はまだまだ続きそうだった。

クロウ「今帰りました」

ランディ「お帰り〜どこ行ってたっすか？」

クロウ「ん〜。汚物処理だよ！」

ランディ「聞くのが怖いんですが……。まさか傭兵？」

クロウ「そだよ〜。今でも時々続けてるさ。支援課の仕事はまだ終わってないんかい？」

ランディ「ええ、そうなんすよ。不良の喧嘩を止めたら背後にマフィアの影があるらしくこれからそっちに行くつもりです。クロウはどうしますか？」

クロウ「一応支援課のメンバーだし、何も仕事していないから行くよ……。」

ジオフロント付近に“テストメンツ”のリーダー、ワジと“サーベルバイパー”のリーダー、ヴァルドを呼び出し今回の襲撃事件が仕組まれた事である事をロイドが伝える。そしてロイドが囹となつてマフィアを引っ掛けることにした。

テストメンツの衣装を着て旧市街を歩いているともう片方のグループが使っている鎖付きの木刀で殴られた。

マフィアA「ったく、最近大人しくなってるからまた裏工作やらないといけなくなつたっしょ」

マフィアB「ぼやくなよ、早くやって終わらせようぜ？」

マフィアC「そうだったな。こいつはテストメンツだからサーベルパイパーの得物でもう一度殴つとけばいいだろう」後頭部めがけて唸り上げる木刀。

？「させるかつ」倒れていたはずの人物が起き上がりざまに木刀をトンファーでたたき落とす。

マフィア「……なっ、なに！」「」驚きを隠せない様子で今殴つて昏倒させた人を見る。

ロイド「まさかここまで見事に引つかかってくれるとは」

A「こ、こいつっ」

ロイド「現行犯逮捕と行きたいところだけど微妙に囿捜査くさいし、今回は勘弁しておくか」

B「まさか、警察の人間か？」

ワジ「フフ、彼はあくまで助っ人と言う立場さ」屋根の上から種明かしをする。

ランディ「おーおー。本当に引つ掛かるとは」

ティオ「なかなかの読みですね」

エリイ「ロイド、大丈夫？」

ロイド「ああ、無傷だよ。念の為防護クッションを頭巾に仕込んでおいて助かった」

D「まさか、俺たちの存在を嗅ぎつけられていたとは……」

C「二手に分かれて逃げるぞ」脱兎の如く脱出を試みる犯人ら。

ワジ「二人付いてきて」

ロイド「分かった。じゃあエリイ着いてきて。残りはもう片方をよろしく」

エリイ「分かったわ」

ワジとロイドとエリイが片方を追いかけてランディとティオとクロウが片方を追い詰める。

ロイドたちは逆上したマフィアと戦闘になるが見事勝ちランディ達の方も先にヴァルドが捕まえていた。最後は悪あがきをするマフィアたちにグレイスが写真を取ってなあなあで終わらせた。一応決着はついたと言えるのかな。

だが、ロイドは少しすつきりとしなない表情を見せていた。すると

こちらに向かってきたグレイスが言った。

グレイス「必要とあらば他人の力も借りてより大きな真実を掴み取る。これが出来て一人前の捜査官じゃないの？あなたのお兄さんみたいに」

ロイド「なっ……？」

グレイス「これで私は退散しようかな。そろそろお肌の年齢が気になる年頃なのよね」陽気に場をかき乱すだけかき乱して立ち去る行動派の記者。

ランディ「お前の兄貴……結構知られているみたいだな」

エリイ「何だかとっても優秀な人だったみたいね？」

ロイド「はは……。押しの強さと行動力はピカイチだったみたいけどね。」

ティオ「……」

クロウ「……」

ロイド「任務終了だ。帰ってセルゲイ課長に報告しよう」

↳ 支援課、課長の部屋↳

セルゲイ「無い知恵絞ってなかなかの出来じゃないか」

ロイド「はあ……………」

セルゲイ「だがこの一件で見えてきただろう。このクロスベルの厄介な側面が……………」

ランディ「まあ確かに」

ティオ「様々な暗部やしがらみ……大人の事情の温床って感じ
です」

セルゲイ「中には賄賂を受け取っている馬鹿野郎もいるだろうが
多くの警察官はそこそこ優秀で自分なりの正義感を持っている連中
だ。だが……有形無形の“壁”がある。マフィアの利権と繋が
っている議員や役人どもがな。」

ロイド「……………」

セルゲイ「どうだ、ロイド？警察官辞めて遊撃士にでもなりたく
なっただか？」

ロイド「いえ、そんな事情があつての“特務支援課”でしょう？」

セルゲイ「ほう……………」

ロイド「“人を守る”遊撃士の理念は確かに素晴らしいけれどそ
れだけじゃあ解決できない問題もある。密貿易に違法な武器取引。
盗品売買にミラ・ロンダリング。そしてマフィアと政治家の癒着。
どれも遊撃士が直接的には介入できない問題ばかりです」

ランディ「確かに」

ティオ「支える籠手」の力にも限界があると言っ事ですか」

クロウ「へえ……」

ロイド「でも警察なら、本来はそれが可能なはずです現実として様々な“壁”が立ち塞がっていたとしてもそうした壁を突破できる可能性はゼロじゃないはずだ」

エリイ「なるほど。支援課ならその可能性を見出せるかもしれない、つまりそういうことね？」

ロイド「ああ、ちょっと楽天的すぎるかな？」

ティオ「現実はどこまで甘くは無いと思いますけどただ、どんな可能性でもゼロではないのは確かです」

ランディ「やれやれ、不良の頭とタイマン張ったり危険な囚役を買って出たり真面目で大人しそうなツラして大した熱血野郎じゃないか」

クロウ「これからも熱血さに引っ張られて行くんだろっな」

ロイド「別に熱血って言うほどでもないと思うけど。今回このメンバーで仕事して改めて思った。このメンバーだったら力を合わせてどんな壁でも乗り越えてゆけそうだなって」

エリイ「ロ、ロイド？」

ランディ「はは、なんつーか……」

ティオ「かなりクサすぎです」

クロウ「やっぱり熱血野郎だ」

セルゲイ「ククク、アーツハハハハハハ……」

ロイド「そ、そんなに笑わなくていいじゃないですか。えつとかなり夢見ですか？」

セルゲイ「クク。いや良いと思う。この特務支援課は色々なしからみから出来た場所だが、ここをどう使うかはお前ら次第だ。あと俺は直接力を貸す事は無いだろうが、やりすぎちまってもお偉いさんがたをケムにまくことぐらいはしてやるよ」

エリイ「まあ、要するに放任主義ですか」

ランディ「つたく、話が判るんだか、いい加減なだけか」

ティオ「と言うよりただ面倒くさいだけなのは……？」

セルゲイ「ま、ズルい大人だからな・“特務支援課”がただの遊撃士のパクリで終わるかそれとも新たな可能性を見出すことが出来るのか、俺は煙草でも吹かしながらせいぜい眺めさせてもらっぜ」

第30話〜可能性〜（後書き）

ここで『序章：特務支援課』終わりです。

閑話々昔ノ夢々(前書き)

ガイのイメージ“熱血”からくるオリジナルです

閑話〜昔ノ夢〜

夢を見た。あれはまだガイがいた時の事だ。ロツジから一人の女の子を救出したのは良かったけど、どうにも感情が乏しくなっていた。無理もないことだった。女の子がいたところは楽園ロツジと名ばかりの生体実験が行われたところだったからだ。

もう一人の女の子も元に戻る可能性が低い剣帝から聞いていた。見ていた夢はウルスラ医科大学でガイとクロウとテイオの三人で療養しているところから始まった。

テイオが無表情でベッドに腰をかけてただ何をするでもなくポーンとしていて、ここに来てから日常になりつつある光景がやってくる。

〜救出5日目〜

ガイ「よっ、テイオ元気か〜？ってまた何もしてないのか。やれやれ……」

クロウ「お邪魔するよ……」

テイオ「……」

ガイ「元に戻るにはまだ時間がかかるのかな。クロウはどう思う？」

クロウ「時間が必要なことぐらいしか分からない」

ガイ「だよなー。よしつ、俺が毎日来てティオの感情を戻してみせよう」

クロウ「相変わらず熱血野郎だ……。俺はちよつと外に出てる」

ガイは良くも悪くも諦めると言う事を知らない青年だった。いや俺が諦めているだけなのかもしれない。まだまだ自分の感情表現もままならぬ時があるのに……。壁があってもそれを乗り越え、巨大な壁が立ち塞がるうとしても仲間の手を借りてその壁を打破しようとするのは俺には……。無理だ。

（救出10日目）

ガイ「よしつ、来たぜ」。少しは覚えているか？」

ティオ「……。ガイ……。さん？」

ガイ「おーおー、少し声が戻ってきたかな。良い兆候かもしれない」

クロウ「……。」

ガイ「クロウ、どうした？今度はお前のほうが元気ないんじゃないか？」

クロウ「いや、なんでもないよ。少し考えるところがあっただけ……」

ティオ「……。なぜ会いに来るの……？」

ガイ「ん？そりゃあ元気になって元通りの生活が出来るように援助したいんだ」

クロウ「テイオに元気無いとガイは寂しいんだと、よ！」

テイオ「無理……だよ」

ガイ「あーもつつ、諦めるなよ！大丈夫だって、まだまだ時間をかけて一緒に元気になるっ」

ガイは一直線で問題にぶつかって乗り越え、そして解決に向かう前も思ったが熱血という言葉が良く似合う男だ。俺はこいつに……
・しているんだろうか？

でも、俺には無理だろうな。人間らしい感情を持つことも人間らしい生活をする 것도。だって俺は……なんだから。

〜30日目〜

ガイ「テイオ、お前が好きそうな人形買ってきたよ。みっしいうて言うんだ。可愛いだろ」

テイオ「……ありがとうございます。ガイさん……」

ガイ「おつ、今少し笑った？」

クロウ「そうかも……しれないですね」

あーあー、早かったな。段々とガイがテイオを元通りにして行く

工程が。やっぱり俺では無理だったな。ガイがいなくてテイオと二人きりだった時会話なんて「おはよう」と「また来るね」しか無かったもんな。ガイがいるときはテイオも俺に返事を返してくれるけれど、付属品扱いかな……。

心が虚しい……。いや、俺には最初から器しかなかったんだ。それを誰かに明らかにするのが怖くて器に仮初めの感情で蓋をしていただけ……。ガイといるとそりゃあ楽しいよ。新たな自分を見つける事が出来て。でも、独りだとどうだろうか。決まってる空っぽな器が残っているだけだ。

〜35日目〜

ガイとテイオが楽しそうに笑って喋っているが、俺はそこにもいなくても良い存在となりつつあった。これで潮時かな。

クロウ「喋っている時悪いんだが、ガイちよつと話せるか？」

ガイ「アハハハ……。おつ、クロウ。いいよ。廊下の方が良いか」

テイオ「……」

クロウ「すぐに終わるからここでいい。俺、仕事が出来たからここから出るわ」

ガイ「そうか……。？少し寂しくなるな。でもいきなりどうしたんだ？前日までそんな兆候なかったのに……」

クロウ「いやー、少し前から呼びがかかっていたんだが気持ち

の整理もできていないから待たせていたんだ。でも、整理できたから仕事をやるうかと思つてさ」

ガイ「そんなら、引きとめるすべはないな。いつ行くんだ？」

クロウ「今日、これから行く……」

ガイ「そうか……。今まで楽しかったぜ。体につけてな」

クロウ「ああ……。ティオもサヨナラだ」

ティオ「はい……。そうですね。クロウさんも健康に気をつけて」

俺は早く逃げ出したかったのかもしれない。太陽のような熱血に焦がされるのではないかと焦りもあったのだろう。今となっては分からない。だけれど壁を乗り越えるっていう精神だけは見習おうとした。そして同じような青年に再び会うとは……。

〜現在〜

？「おはようございます。クロウさん。起きてください」

クロウ「んー？もう朝か。なんか懐かしい夢を見ていたようだな。そして聞いたことある声が聞こえてくるんだが……。あーティオどうやって扉を開けた？」

ティオ「鍵がドアに刺さったままでしたので……。それにしても懐かしい夢つてなんですか？」

クロウ「あーお前と初めて会った時のガイとティオの様子だよ」

ティオ「……そうですか。なぜあの時クロウさんは……？」

クロウ「っ、この話はまた今度。起こしに来てくれてサンキューな。着替えるから外出して」

ティオ「分かりました。今度聞かせてください」

支援課での新しい朝が始まる。今日はどんな事が待ち受けているのだろうか。少しワクワクしている自分がいた。前はこんなこと考えもしなかったのに

第31話『期待の遊撃士二人登場』（前書き）

第一章『神狼たちの午後』

原作七割オリ要素三割ぐらいです

第31話 期待の遊撃士二人登場

男性の声「お疲れ様、今月も大変だったわね」

アリオス「なに、いつものことだ。それよりも……送金のほうよろしく頼む」

受付ミシエル「分かったわ、IBC経由でいいのね？それにしても、依頼を回しているアタシがいうのもなんだけどさ、アナタもうちよつと仕事を減らしたらどう？シズクちゃんだって寂しがっているでしょうに」

アリオス「……」

ミシエル「ゴメン、これ言わない約束だったわね。それはそうとレマン本部から連絡がまた来ていたわよ？『いい加減受けてくれる気はないのか』って」

アリオス「またそれが。その件については何度も断っているはずだろう」

ミシエル「まあ総本部としてはカシウス・ブライトの代わりに揃えておきたいんでしょうね。あなた彼の弟弟子おとうとでしなんでしょう？実績だって引けを取らないんだし、いいかげん観念したらどうなの？」

アリオス「残念だが彼と俺とでは役者が違いすぎる……。実績にしたところで彼のように国家的問題を解決したわけではないかな、正直身に余る話さ」

ミシエル「国家的な問題って言ったならレミアエリアの件があるじゃない。大公閣下から勲章を貰ったんだし実績としては十分だと思っけれど……」

アリオス「あの件は本当の意味での解決にはなっていないから。公国での芽は潰したとはいえ一部の黒幕は取り逃がしたままだ。本来なら勲章など辞退したかったんだが」

ミシエル「まったくもう、生真面目すぎるんだから。せめて昇格でもすれば逆に少し落ち着くんじゃない？ 今月だけでも百件以上。尋常じゃないよ、この仕事量は……」

アリオス「無理をしているつもりはないさ。列車と飛行船の便数も増えて自治州外への出張も楽になった。頼もしい助っ人も来る事だし今後は一息つけるだろう」

ミシエル「あの子たちかあ。まあ確かに期待の大型新人ではあるね。少なくともあの支援課の坊やたちよりは期待できそうね。ただ……」

アリオス「ただ、どうした？」

ミシエル「^{撃士}“彼”がいればもっと楽になるんでしょうね。今はこ^遊こじゃなくてあ^{攻撃}ちにいるんですもの」

アリオス「ああ、そうだな。“彼”がいれば楽なんだろうな。否定はしない」

娘の声「ごめんください」

ミシエル「あら、さっそく来たみたいだね。こっちよ、上がって
きて」

娘の声「あつ、二階？」

青年の声「失礼します」

ツインテールの娘「こんにちわー、ミシエルさん。ってあれ？ア
リオスさん」

黒髪の青年「よかった、丁度いらっしやっただんですね」

アリオス「フフ、まあ偶然だが。三か月ぶりになるか。よく来て
くれた二人とも」

ミシエル「ホント。あなたたちがウチに来るなんてねえ。うんう
ん、これでクロスベル支部も当分安泰だわ？」

ツインテールの娘「あはは、買い被り過ぎだと思えますが」

黒髪の青年「ご期待に沿えるよう頑張ります」

ツインテールの娘「改めまして、正遊撃士エステル・ブライト」

黒髪の青年「ならびにヨシユア・ブライト」

エステル&ヨシユア「遊撃士協会クロスベル支部に正式に所属さ
せていただきます！」

〜その後の会話〜

ミシエル「あーあ。これで“彼”がいればねえ……」

エステル「“彼”って誰ですか？」

ミシエル「あなたたちと一緒に浮遊都市を攻略した青年がいたじゃない？クローディア殿下の恋人の……」

エステル「クロウさんですか。その人は今どこにいるんですか？」

ミシエル「この街にいるわよ……。アタシからすれば考えられないような新しい職場で働いているらしいわ。どうしてここじゃないのよ」

ヨシユア「ええっと、どこですか？」

アリオス「警察内に新たに出来た“特務支援課”っていう部署だ……」

ミシエル「早い話遊撃士の真似事をやってる部署よ。まだ評価は低いけれど“彼”が本気になって仕事を始めたらすぐに遊撃士と同等いえ、それ以上になること間違いなしだわ」

エステル「そんなに凄かったっけ……。？確かB級正遊撃士って言った気がするしあまり真面目に行動していなかったような」

ヨシユア「はあ、エステルはもつと内部の情報に目ざとくあるうよ。クロウさんの本当の姿はカシウスさんと同じS級の正遊撃士だよ。あと過去に悲惨な事件が起きた時にもそれに参加して成果を上げているんだから……」

エステル「えっ……ホントに？でも、同じような志をもって
いるんだし邪魔するわけじゃないからいいんじゃないの？」

アリオス「……」

ミシエル「……」

ヨシュア「……」

エステル「アタシ何か変な事言った？」

ヨシュア「いや、君らしいよ、言いたい事は少し違うんだけど
これがエステルだからね」

ミシエル「フフ、そうだったわね。気を引き締めて依頼を受けて
くれればそれでいいから！」

エステル「なんか腑に落ちないけどここに来たからには頑張りま
す！」

ヨシュア「そうだね。頑張ろうか」

第31話〈期待の遊撃士二人登場〉（後書き）

会話だけ。

エステルは積極的な行動派タイプというイメージが進行しているのですが、『いやこんなのはエステルじゃない』と思われる方がおられれば仰って下さい

第32話 特別任務

課長をいれて朝のミーティングを始めようとした時……

課長「今日はお前らに特別任務を引き受けてもらおう！」

全員の頭の上にクエスチョンマークで付きそうなくらい呆然とした空気が漂った。

ランディ「何だかウサン臭い響きがするんだが……」

クロウ「俺もだ。嫌な予感がプンプンする……」

課長「詳しい事は俺も知らん。まずは警察本部へ行け。お前たちに客人が待っているはずだ」

ロイド「わ、分かりました。行ってきます」

警察本部、三階

ランディ「またあの嫌味な副局長に呼ばれるなんて……小言でも言われるんか？」

ロイド「小言や嫌味を言うだけで、呼ぶとは思わないけど。それに客が待ってるって言ってたし」

ティオ「どのみち嫌味は言われそうだけれど……」

エリイ「流しておきましょう」

クロウ「ひでえ、副局長の扱い雑……」

コンコン……

ロイド「失礼します。特務支援課参上しました」

嫌味な声「はいりたまえ」

そこには嫌味ばかりを言う副局長と見慣れぬ制服を着た二人の女性が部屋の中にいた。どうやら呼び出された理由は、見慣れぬ二人にありそうだ。この二人は警備隊の連中らしく、ランディの古巣でもある。というのは、二人を見た瞬間ランディが漏らした「げげっ」という一言が如実に物語っていた。

ティオ「やましいことがありそうな反応ですね……」ジト目でランディを見つめる。

ソーニヤ「改めて自己紹介をします。クロスベル警備隊副司令のソーニヤ・ベルツよ。今日は貴方達『特務支援課』の力を借りに参上したわ。まずは一通り話を聞いてくれるかしら？」

ロイド「魔獣の被害調査……?」

ソーニヤ「ええ、そうよ。ここひと月の間で自治州各地で特定の魔獣被害が続発しているの。その調査の手伝いを貴方達にお願いしたくってね」

支援課面々「……」

ロイド「ちょ、ちょっと待って下さい。クロスベル市内ではなく市外での魔獣被害の調査ですか？」

ソーニャ「あら、不服かしら？」

ロイド「い、いえ。そんな事は……」

エリイ「その、警備隊のほうでもすでに調査されているのですよね？そのうえで私たちが手伝う余地などあるのでしょうか？」

ソーニャ「うーん、それが大アリなのよ。普通の魔獣被害というにはどうも不可解なことが多すぎてね。ウチの調査だけでは手詰まりになってきているのよ。だから別の視点を入れておきたいって所かしら……」

ロイド「別の視点、ですか」

ソーニャ「ええ、警備のプロではなく捜査のプロとしての視点をね。その意味では貴方達に頼まなくても良いのだけれども。例えばエリートが集まる『捜査一課』とか」

副局長「い、いやあ。紹介したいのは山々なのですが、何分忙しい連中なので……ハイ」

ソーニャ「とまあ、色々と事情がありそうなので貴方たちを指名させてもらったわけなの。迷惑だったかしら？」

ロイド「い、いえ判りました。そういう事情でしたら喜んで。それで魔獣被害の調査というと具体的にどうすればいいんでしょうか

「？」

ソーニヤ「ノエル。例のものを」

女性隊員「はっ。どうぞ」どこかで見た事がありそうな面持ちの茶髪の女性隊員がロイドに資料を渡す。

クロウ「どこかで見たような気が……」

女性隊員「どうかしましたか？」

クロウ「いや、見た事ありそうな顔だったから。気にしないでください」

ソーニヤが言うにはこの調書に警備隊で調査した情報が載せられており、余計な先入観を与えないためにも長所だけを見て捜査に当たってほしいとの事だった。ちなみにソーニヤの横にいた隊員の名前はノエル・シーカーと言う名前だった。

調書

・三箇所で魔獣被害が出ている事。狼型の魔獣の可能性が高い。

次項より詳細

？アルモリカ村

発生日時：三週間前の深夜

場所：集落全域

被害・状況：事件発覚は朝。全家屋の農作物、家畜に被害。
目撃情報：なし“住民は就寝中”
痕跡：村の各地にイヌ科の足跡発見。周辺地域には見
当たらず。

？聖ウルスラ医科大学

発生日時：一週間前の深夜

場所：病院敷地内

被害・状況：魔獣の群れ侵入。研修医一人負傷。

目撃情報：被害者が黒い狼のようなものを目撃

痕跡：周囲に見当たらず。研修医の勘違い？

？鉾山町マインツ

発生日時：二日前の夜十時ごろ

場所：宿酒場前

被害・状況：酒場帰りの鉾員一人負傷

目撃情報：町の間人が逃げる狼目撃する

痕跡：現場付近に多数の足跡

アルモリカ村での足跡と酷似

採掘道具の被害など発生しこれで三件目。

定期的な警備と巡回必要

エリイ「本当に各地で起きているのね。どうしてニュースになっ
ていないのかしら？」

ティオ「狼型魔獣。クロスベルの固有種でしょうか……」

ロイド「さすがにちよつとわからないな。ただ、被害があった場所でははつきりとした足跡が残されているみたいだ。そういう魔獣がいるのは確実だ」

エリイ「でも、警備隊の捜索では未だに確認されていないのよね？それがちよつと気になるんだけれど」

ランディ「ああ、姿を隠しているんなら相当ズル賢い魔獣みたいだぜ。俺たちじゃなくて凄腕のハンターでも雇った方が良いんじゃないか？」

テリオ「私たちに何かできるんでしょうか？」

ロイド「……」

クロウ「どうした。ロイド何か閃いたのか？」

ロイド「閃いたと言うより『捜査』という観点からこの魔獣被害について調べるんだつたらどこがポイントになるかなと思って」

エリイ「どういうこと？」

ロイド「例えば一連の魔獣被害を『事件』として捉えるなら、この場合『犯人』は誰になる？」

クロウ「それは調書にも載っているように狼型魔獣って事になるだろ」

ランディ「個体じゃなくて群れ単位で動いているみたいだが」

ロイド「だったらもう一つ……その『犯人』の『プロフィール』と『動機』についてはどうだろう？」

ランディ「そいつは……」

エリィ「この調書からは見えてこないわね」

ロイド「ああ、それに知能が高い魔獣なら普通人里には近づかないはずだ」

クロウ「それにロイドが言った『動機』について飢えているなら病院での出来事が不可解すぎるってことだろ」

ロイド「そう。俺が言いたいのはそれらすべてを説明できる何らかの真実があるんじゃないか？」

ランディ「ふむ……」

ティオ「確かに理屈ではそうなりますね……」

エリィ「そうすると捜査方針は決まったね」

ロイド「ああ、まずは被害に遭った場所に関係者から話を聞いてみよう。少なくとも俺たちの方法でこの調書を補完することぐらいは最低限できそうだ」

エリィ「そうね。少しでも警備隊の役に立てそう」

ランディ「は、助かったぜ。闇雲に野山を駆け回って魔獣狩り

する羽目にならなくて……」

クロウ「ランディはそっちのほうに似合いそうな気がするんだが……」

ランディ「いや……勘弁して下さい」

ティオ「それで、方針は決まったとしてどこから行きますか？」

ロイド「そう……だな。まずは最初に被害に遭ったアルモリカ村に行ってみようと思う。一番被害が具体的だし少しでも魔獣の特徴を掴んでおいたほうがよさそうだ」

エリイ「なるほど、それはいいかもしれないわね。えっとアルモリカ村へは……」

クロウ「街の東口から導力バスに乗って行けばすぐ着くよ」

ロイド「じゃあ、準備をしてから東口からアルモリカ村を目指そう！」

ティオ「了解です」

第33話 街の外へ (前書き)

まったりとした日常

第33話 街の外へ

アルモリカ村へ行く用意が出来た五人は、東口にあるバス停から乗ることに決めた。しかし遅れたためにあと少しと言ったところでバスに乗る事が出来なかった。

クロウ「バスはどのくらいの頻度で出ているんだ？」

ティオ「時刻表によると・・・二時間後ですね」

ロイド「一日数本しか通ってないってことか。困ったな、今日中に病院ぐらいまで調べたかったんだが・・・。かといって先に他の場所を回るのもどうかと思うし」

ティオ「・・・だったら歩いて行けばいいのでは？」

ロイド「へっ・・・？」

エリイ「ティ、ティオちゃん？」

ティオ「地図で確認するとここからアルモリカ村まで一時間半ぐらい歩けば着きそうです。次のバスで行った場合、待ち時間も考えたら二時間半はかかるはずですよ。歩いた方が効率的ではないでしょうか？」

エリイ「なるほど、そう考えると効率的だね。それにアルモリカ村までの途中には田園風景が続く石畳の道が通っているはずだし、ハイキングがてら行ってみるのもいいかもしれないわね」

クロウ「こっちは慣れてるからいいかもしれないが、なれないとキツイぞ」

ロイド「どう考えても街道を歩いたことがなさそうな雰囲気だし・・・」

エリィ「どうしたの。三人とも・・・？」

ロイド「いや、村までの途中には魔獣も出るし体力的に大丈夫かなと思って」

エリィ「うん、それを言われると。でも今まで何回もジオフロントに潜っているし最初よりは体力もついたんじゃないかな」

ティオ「それにわたしには魔導杖のテストもありますし、多少の実戦でしたらむしろ望むところですが・・・」

クロウ「二人の意志は固いみたいだしなにかあればこっちでフォローするってことで、徒歩で行かないか？」

ティオ「疲れたら背負ってくれますか？」

クロウ「はっ・・・？ティオも冗談を言うまで成長したなあ」

ティオ「冗談ではないのですが・・・」「小声」

クロウ「なにか言った？」「ちょっと声が小さくて聞こえなかったので、聞きなおした。」

ティオ「いいえ、なんでもありません。アルモリカ村までいきま

しよっ」

街の外へ出ると、そこは青草がどこまでも続く、草原が広がっていた。今までは街の中を探索したり血みどろの仕事をしていたので少し気分が晴れやかになる光景だった。

しばらく道なりに歩いて行くと分岐点に差し掛かった。ここから北に向かうとアルモリカ村へ続く古道となる。

ロイド「分岐点か……。ここから北へ行くと村の方向だな」

ティオ「ハア……。ハア……。」

エリイ「……。これは思った以上に大変ね……」

クロウ「二人とも大丈夫か？息も絶え絶えになっているけれど」

ティオ「問題ないです……」

ランディ「少し休んでいくか？」

エリイ「私はもう少し大丈夫だけれど……。ティオちゃんはどう？」

ティオ「イチ抜けたと言いたいところですが、提案者は私ですしもう少し頑張ってみようと思います」

ランディ「ま、我慢できなくなったら俺が背負ってってやるよ」

ティオ「いえ、おんぶだったらクロウのほうがいい……」

「ランディ」そりゃないよ。どうしていつもクロウばかり……」

クロウ「ん？二人とも何か言ったか？それにティオ、俺は無理だ。その資格が無い……」

ティオ「えっ、それはどういう事？」

クロウ「いつか話すよ……。たぶん……。ティオが歩けるみたいだし村まで行こうか？」

ロイド「……ええ、そうですね」訝しながらも四人はあまり深くを突っ込まないで徒歩を再開した。

少し雰囲気が変わった道を進んでいると休憩所らしき場所が見えてきた。ロイドが休むことを提案しそれに同意したのでみんな休むことにした。川の横の小高い場所を休憩所にしたらしく、座って談話できる場所と自動販売機が設置されていた。休んでいると村に着いたバスが休憩所の横を通って行った。

ロイド「さて、休憩して体力戻ってきたと思うからそろそろ歩きを再開しないか？」

ティオ「そうですね……」

エリイ「だいぶ、体力が元に戻った感じがします」

クロウ「歩きますか……」

村の近くまで来ると、視界のいっぱいには草原が広がり村で販売されている蜂蜜の匂いも漂ってきた。アルモリカ村ではいったいどんな証言がなされるのだろうか？そして狼型魔獣の正体とは……？

第33話 街の外へ (後書き)

数日空いてしまい申し訳ないです。『碧の軌跡』を一週目クリアしたのでこれからは『零の軌跡』の物語を書けると思います

第34話〜アルモリカ村〜（前書き）

アルフレッド：トネリコ亭でオムライス食べている客。

ゴーフアン：トネリコ亭の料理人

1セルジュ：100m

第34話くアルモリカ村く

エリイ「花咲き乱れる田園風景、こんなに綺麗な場所だったのね。それになんだか甘い香りもするけれど、もしかして蜂蜜の匂い？」

ランディ「だな。向こうに蜂蜜の巣箱が置いてあるぜ」

ティオ「データベースによるとアルモリカ村の蜂蜜といえば特産品の一つらしいです。品質も極めて高い為周辺国にも輸出されているとか……」

ロイド「ああそうみたいだな」

クロウ「雑貨屋でもよく見かけるがここで作っていたのか。あとで買って送るか……」

ランディ「女ですか？」ニヤニヤした表情を見せて突っ込む。

クロウ「ああ、そうだが……」極めて冷静にランディの問いに答えるクロウ。他のメンバーには聞こえなかったみたいで、ランディだけが呆然としていた。

ランディ「俺にも紹介して下さい！」顔がずいっと近づいてきて暑苦しい……。

クロウ「あーっ、機会があればな。それはそうと村長の所に行つて話を聞かないと」

会う村民みんながスローライフを楽しんでいるかのような光景。このような村にも魔獣被害が報告されていると言ふ事で皆の気持ちは一つだけ。それは何とかして解決しなきゃと言ふ思い。

村長宅に着き中に御邪魔するとそこには貿易商らしき男性と交渉している様子。

温和そうな男性「おかげさまで良い取引をさせて頂きました。今後ともよろしくお願いします」

老人「ああ、こちらこそ。それにしても本当にあの価格で良いのかね？他の商人よりも二割は高いぞ？」

温和そうな男性「それだけこの村の特産品が認められていると言ふ事です。十分儲けさせていただいてますから、どうかご心配なく」

老人「そうか。いや本当に世話になるのう。今度は奥さんやお子さんと一緒に遊びに来なさい。歓迎させてもらいますぞ」

温和そうな男性「はは、ありがとうございます。それでは村長。また寄らせていただきます」

男性は取引を終えたのか老人と話し終えこちらに向かってきた。

男性「おっと、失礼……」

ロイド「今の人は……？」

エリイ「なにかの商人らしかったわね」

ランディ「ま、ここが村長の家なのは確かみたいだな」

老人の声「おや、お前さんたちは……?」

クロウ「失礼します」

エリイ「あなたがこの村の村長でいらっしやいますか?」

老人「うむ、いかにも。トルタと言う者じゃが観光客かなにかか?」

ロイド「いえ、実はこの村であつたという魔獣被害を調べに来ました」

村長「おお、あの件についてか! いやな、警備隊のほうでも何度か調べてはくれたものの結局何も分からなくてな。アンタたちが来てくれれば一安心じゃ」

あーっ、この反応は……。また間違われてるのかな。もう驚かないぞ。

ロイド「すみません。言葉が足りませんでした。わたしたちは遊撃士協会のものではありません。クロスベル警察、特務支援課に所属している者です」

村長「ふむ、警察の方々じゃったか。間違えてスマンのう。この村に警察官が来る事が滅多になくてな。あのアリオス殿をはじめとする遊撃士なら何度も来ているんじゃないが」

ロイド「そ、そうですか……」

ランディ「あのオッサン、売れっ子のくせにマメだよな」

クロウ「遊撃士ってのは街の信頼を受けて行動するからな。ちょっと足を運ぶついでに立ち寄って様子を見たりするからな」

ロイド「クロウって元遊撃士？」

クロウ「言っただけじゃなかったっけ？まあ支援課入る前はリベールで遊撃士やっていたよ。まっ、今は魔獣被害の事について聞こうよ」

エリイ「そうね……。では村長、私たちが着た経緯は先ほど話した通りです」

ロイド「御手数ですが、被害状況などを聞かせて頂きませんか？」

村長「ふむ、そうじゃな。あれは三週間前の新月の夜。この村に魔獣の群れが忍び込み農作物を荒らしていったのじゃ。どの家も家畜や果物、小麦などが荒らされてしまった」

ロイド「確か、目撃者はいなかったんですよね？」

村長「うむ、クロスベル市とは違ってこの村の夜は早いからのう。朝早くの農作業もあるしほとんどの住民は、夢の中じゃった。そして朝起きてみると魔獣どもの足跡とともに被害が明らかになったというわけじゃ」

ロイド「なるほど……」

ティオ「それで狼型魔獣と判明したわけですね？」

村長「うむ、残された足跡の形状がイヌ科のものじゃったからな。丁度その日に警備隊の巡回パトロールが訪れて、念のため付近を捜索してもらったんじゃが……」

エリイ「狼型の魔獣の痕跡はどこにも見当たらなかった……。なるほど、警備隊の調書どおりですね」

村長「そのとおりじゃ。それから三週間、再び被害に遭う事は無く今に至っておる。正直同じ事は起こらないと高を括っておったが、うつむ。他の場所で被害が起きていたとは」

ロイド「はい……」

ランディ「しかし、魔獣の被害があったって言うのにこの村は平穩そのものだな。被害額も相当のものだったのでは……？」

村長「いやそれがそれ程でもなかったんじゃ。どの家も少しずつ何らかの被害を受けただけでのう」

ロイド「えっ、そうなんですか？」

村長「被害額は総額にして十万ミラってとこじゃるか。被害は被害で落ち込んでいたが、その時良い取引が出来たの。受けた被害が帳消しになったんじゃ」

ロイド「良い取引……」

クロウ「もしかしてさっきすれ違った男性の事ですか？」

村長「うむ、彼はここ数年、ワシらと懇意こんいにしてくれるクロスベル市の貿易商でな。被害の話を聞いて取引額を少し上乘せしてくれたのじゃよ。まあ今のクロスベルの状況を考えるとこの程度の被害はむしろ軽いものかもしれん」

四人「？」

クロウ「……！」

ロイド「あの、それはどういう……？」

村長「おっと、失言だったかの。スマンスマン、この事は忘れてくれ」

ランディ「おいおい、村長さん。そんな言い方されたら余計に気になるっての」

ティオ「それもそうですね」

村長「ハハ、そうかもしれんのう。では年寄りの世迷言かもしれんが、それでもいいかね？」

ロイド「どうか聞かせてください。どこにどんな手掛かりがあるか分からない状況ですから」

村長「そうか……。お前さんたちは『神狼』と言つ言葉を聞いた事があるか？」

ロイド「神狼……？」

エリイ「神の狼ですか」

ティオ「データベースでも見かけた事のない言葉ですね」

村長「ふむ、そうか。そうなるど街でこの話はもう伝わっておらんのかな。なんとも寂しい話じゃ……」

ロイド「えっと、その『神狼』というのは一体？」

村長「その昔このクロスベルの地に棲んでいたと言う獣の事じゃ。白い毛並みを持つ狼の姿をしておったという」

ティオ「今回の被害を起こしたのと同じ？」

村長「確証はない。が、そうであつても不思議ではない」

クロウ「……古い伝承によるとその狼たちはただの狼ではなく女神が遣わした聖獣だったという話だ。古より血で血を洗うような戦に巻き込まれてきたクロスベルの地。そこで人の愚かさを見守りながら、時に気紛れで無力な人間を助ける……そんな存在だと言われている」

ロイド「クロウ、なぜ？」

クロウ「昔の事に興味があつてね……。でも図書館にも童話があるんじゃないか？」

ロイド「そういえば絵本で読んだ事があるような」

村長「その童話は伝承を下敷きにして書かれたのじゃろう。しか

しこの数十年でクロスベルの街は変わった。帝国、共和国双方の影響力にあつて貿易都市として発展していくにつれ過去の記憶は、忘れさらられてしまった」

クロウ「そして、『神狼』は姿を消した……」

ランディ「さしずめ人間に愛想を尽かせたか」

ティオ「……」

村長「そうかもしれない。ただ、そんな時代の狭間で消えて行った『神狼』たちのことじゃ、もし戻って来たとしたら……」

クロウ「何かの警鐘を鳴らしに来たと、そう村長は考えているわけですね？」

村長「うむ……。こう言うては何だがクロスベル市の発展は早すぎる気がしてならないのだ。たまにバスで街に出ると変わりように愕然とするくらいじゃ。誰もが現在いまだけに追いつてられ、過去を振り返る余裕などないような……。そんなふうに思うんじゃ」

ロイド「……」

村長「説教するつもりではなかったのだが、ただまあそう考えるところの村が襲われたのも彼らなりの警告そんな風に、捉えられるのではないかと思つてな。真面目に受け止めてしまったか。年寄りの世迷言と思つて聞き流してくれ」

ロイド「いえ、おかげでこの魔獣被害に関して別の視点がもてた気がします」

村長「それならいいが、他に協力できる事は無いか？」

ロイド「そうですね、住民の方たちに聞き込みをしてもかまいませんか？」

村長「ああ、よかろう。ちょうど昼時で農作業から帰ってくる事じゃ」

ロイド「では失礼します……」

村長の家から出ると昼時だった。住民もちらほらと見受けられる。これなら聞き込みをして少しでも情報を取り入れることができそうだ。

しかし、あまり新たな情報を手に入れることはできなかった。三週間前と日が空いてしまった事と、夜中の寝静まっている時に被害に遭った事が災いして証言を得られなかったのだ。

～宿酒場トネリコ亭～

ロイド「自分たちはクロスベル警察の者ですが、三週間前に起こった魔獣被害について教えてもらっても構いませんか？」

アルフレッド「うん、いいよ。あの時はたまたまどの家も次の日の仕事が早くてね。みんな早くに寝静まってしまったんだ。そこにまるで狙ったかのようなタイミングで、魔獣が現れてしまった。とにかく運が無かったとしか言いようがないよ……」

ゴーフアン「僕も同じようなことしか言えないよ。その日宿泊し

ていた人たちも何も見ていないって言うし」

エリィ「そうですか……」

ランディ「決定的な証拠ってのがなかなか見つからないな」

ロイド「まあ、聞き込みって言うのは地道な作業だし直ぐに成果が表れるものでもないさ」

ティオ「とりあえず休憩にしませんか？」

クロウ「お腹が空いた……」グギョルルルル。っとクロウのお腹が盛大に鳴った。

ゴーフアン「なんだ君たち。まだ昼食は食べていないのか。よしせっかくだから当店自慢のオムライスをご馳走してやろう。お近づきのしるしにってことで」

クロウ「いやったあ〜ごちそうになるうぜ。腹が限界だ」

ロイド「じゃあいただきます……」

ガツガツガツ、ムシヤムシヤムシヤ、ゴクン、プハーッ……。

クロウ「いや〜自慢のって言うだけあって美味しかったね」

ティオ「それにしても食べるすぎです。大盛りで三杯も食べるなんて……」

クロー「美味しかったから仕方がないっしょ！宣伝しておくから」

ゴーフアン「宣伝してくれるし美味しそうに食べてくれてご馳走したかいがあったってもんよ」

ロイド「じゃあ聞き込み再開しようか……？宿泊している人たちにも聞いてみよう」

トネリコ亭の二階は宿泊施設となっている。一番手前の部屋に入るとそこにはさつき村長宅で見た貿易商の男性がいた。

男性「おや？あなた達は……」

エリイ「確かクロスベル市で貿易商をされている方ですね？」

男性「ハハ、村長から聞きましたか。初めましてハロルド・ヘイワースといます。クロスベル市で小さな貿易商を営んでおりまして、みなさんもひょっとして買い付けにいらっしやっただんですか？」

ロイド「い、いえ。私たちは」ロイドは自分たちの身分を明らかにしてこの村に来た事情を伝えた。

ハロルド「警察の方だったんですか。これは失礼しました。しかし『特務支援課』どこかで聞いたような……！そうです。クロスベル・タイムズ！」

ロイド「はあ、やはり読まれていましたか」

エリイ「その、お恥ずかしい限りです……」

ハロルド「そんなに恥ずかしがらなくても設立されたばかりと言
うのに頑張っているみたいじゃないですか？あの記事だって少しは
皮肉っぽいものでしたが、あなたがたの頑張りを好意的に捉えてい
たと思っていますよ」

ロイド「そうですか？」

ティオ「好意的に解釈をすればそう取れなくもないですが・・・

」

ランディ「書いた本人を知っているから素直には頷きにくいかも
なあ」

ハロルド「しかし狼型魔獣ですか。医科大学でも聞きましたがあ
しばかり心配ですね」

クロウ「ハロルドさんは医科大学のほうにも仕事で行っているん
ですか？」

ハロルド「ええ、病院のほうに備品を卸させてもらっているんで
す」

ハロルドからも魔獣の事を聞いたがあまり知らないみたいだ。そ
れにかなり良心的な価格で特産品を買ったことについて、この村の
特産品の価値が上がってきている事を理由に住民と仲良くできたら
という打算もあったようだが悪い感じはしなかった。

一通りの聞き込みを終えて帰りはバスに乗って行こうとした時・・・

クロウ・テリオ「っ！」きよるきよるとあたりを見渡す二人。

ロイド「どうかした、二人とも？」

クロウ「何だか不思議な気配が・・・」

テリオ「遠くから声が出たような。すみません、センサーを最大にしてみます。少し静かにしてください」

ロイド「あ、ああ」

テリオ「アクセス・・・。すみません気のせいだったようです」

ロイド「いやそれは別に構わないけれど最初に聞いた声はどんな声だったの？」

テリオ「それが、なにかの遠吠えのような音が」

ランディ「そいつは・・・」

エリイ「例の狼型魔獣？」

テリオ「いえ、聞き間違いかもしれません。センサーの誤動作と
言う可能性もありますし」

エリイ「どうする？この付近を搜索してみる？」

ロイド「そうだな。テリオそのセンサーの感知範囲はどのくらい
なんだ？」

ティオ「そうですね。およそ50セルジュってところでしょうか。ただ音が風に乗っていた場合その倍になる時もあります」

ランディ「ヒュー！そんなにあるのか」

エリイ「そうなるとどこから聞こえたのか皆目見当もつかないわね」

ロイド「ああ、現時点では留めておくしかなさそうだな」

ティオ「……あの私が聞き間違えたとは考えないんですか？」

エリイ「でも聞こえたんでしょう？」

ティオ「私の主観ではそうです。でも普通の人には聞こえない音が私にだけ聞こえた。普通は嘘とか気のせいだって思わないんですか？」

ランディ「と言われてもなあ。ティオすげが凄いのは俺たち全員が知っている事だし」

ティオ「え……」

エリイ「それにあなたが嘘をつく理由なんてどこにもないでしょうっ？」

ロイド「まだ短い付き合いだけれどティオには何度も助けられている。俺たちが疑問に思う理由なんてこれっぽっちもないけれど」

テイオ「……すみません。変な事を言い出しまして。今のは忘れて頂けると」

ロイド「あ、ああ？いいけれど」

第34話〜アルモリカ村〜（後書き）

変なところで切ってしまっただけです。次はアルモリカ村からクロスベル市への道中の話です。

クロウがテイオと同じ瞬間に感じ取ったのは気配だけ。神狼と何か通じ合うものがあったのでしょうか。テイオと同じ能力は持っていません。伏線にしたいですがどうなるか分かりません。

何かあればお気軽に聞いてください。

第35話「車中」（前書き）

短めです。原作では車の中に5人と言う設定でしたがここでは6人です。

そこは入れないとか思わないでください。

言い忘れましたが“ミラ”は通貨です。

第35話 車中

男性の声「あれ、あなたたちは？」背後から声をかけてくる男性の音が聞こえたので、振り返るとそこにはハロルドが立っていた。

ロイド「ハロルドさん」

ハロルド「もしかして皆さんもクロスベル市にお戻りに？」

エリイ「ええそうですけれど、もしかしてハロルドさんもお帰りですか？」

ハロルド「ええ、妻と息子へのお土産も確保しましたしね。そう
だ、みなさんはバスをお使いですね。次の発車時刻はいつですか？」

ティオ「時刻表によるとあと30分後と言うところでしょうか」

ランディ「俺たちと一緒にダベっていくかい」

ハロルド「ああ、実は……そうだな6人ならギリギリ大丈夫
か」と言つと戸惑う支援課メンバーを横目に村の入口へと向かう。

ハロルド「もし宜しかったら私の車に乗って行きませんか？ク
ロスベル市まで送りますよ」

「ご厚意に甘えハロルドの車に乗せてもらう事にした5人だった。

～車中～

ロイド「すみません、送っていただいて……」

ハロルド「はは、いいんですよ。ついでに送るだけです」

ランディ「しかし、自分の車を持っているなんて相当スゴイよなあ。まだまだバカ高いんだろ？」

ティオ「このクラスの自家用車だとすると80万ミラはするかと……」

ロイド「80万ミラ、そりゃあ凄いな」

ハロルド「一応、貿易商としての仕事の道具でもありますから、バスを使ってもいいんですがどうしても時間の融通が利かないことが多いので……去年思い切って購入しました」

クロウ「それ以外にも理由ありそうですね。例えば……愛しの家族に早く会うためだとか！」

ハロルド「はは、参ったな……」

ランディ「お土産もママに用意しているみたいだし」

ティオ「所謂いわゆるマイホームパパといったところですね」

ハロルド「いやあとんでもない。出張が多くていつも妻と息子には寂しい想いをさせてしまうことが多いです……」

エリイ「息子さんはおいくつなんですか？」

ハロルド「今年で5歳になります。まだ日曜学校に入る前なんです。好奇心旺盛で色々なものに興味を出しては妻の手を焼かせています」

ロイド「へえ……」

エリイ「ふふ、お幸せそうですね？」

ハロルド「はは、それはもう。それに私たちは幸せでなくてはなりませんから」

ロイド・エリイ・ティオ・ランディ「????」

クロウ「……！」

ロイド「えっ？」

ハロルド「いや、こつちの話です。おっと、古道が終わりますね。右に曲がりますので気を付けてください」

分岐点を右に曲がりハロルドが運転する車がクロスベルへと向かう。車が去った後を眺める白い狼。一体この正体は……。

そして、クロスベル市の中央広場へ車は停止した。

ロイド「ありがとございます。こんなところまで送っていただいて」

ハロルド「いいえ、それこそついでですしね。皆さんこそ捜査の

ほうを頑張ってください。応援させていただきますよ」

エリィ「ありがとうございます」

ティオ「応援していただけのでしたら、今度何かあれば支援課わたしたちのほうに」

ランディ「できればギルドより先にお願ひしますっ！」

クロウ「露骨すぎないか？」

ランディ「いやでも、売り込みはしておいた方がいいだろ」

ハロルド「分かりました。今度何かあれば支援課のほうにお願いします。それではここで失礼します」支援課の面々を降ろした車はそのまま走り去って行く。

ロイド「凄く良い人だったな」

ティオ「お人よしのレベルがロイドさんに匹敵しそうです」

クロウ「そうかもな」

ランディ「ただ貿易商を営んでいるぐらいだからお人好しで収まらないと思うがな」

エリィ「でもハロルドさんは地場産業ときちんと協力しながら堅実に商売やっているみたいね。クロスベルの貿易商は、国際取引で荒稼ぎをしている人も多いつて聞くのにその中であって貴重な存在かもしれないわ」

クロウ「なるほど……」

ロイド「ああいう真つ当な人もいればルバーチエ商会のような連中もいる。それが今のクロスベル市か」

ロイド「さて今は昼過ぎか。このまま次の目的地に行こうか？」

エリイ「そうね。次は『聖ウルスラ医科大学』ね」

ティオ「……確か南口でしたよね？」

ロイド「ああ、このまま南にまっすぐ抜ければバス停がある30分ごとにバスが出るって聞いたな」

クロウ「……」

ロイド【医科大学が、やっとセシル姉に会えるな】

第35話〜車中〜（後書き）

話の中で疑問に思う語があればお気軽にどうぞ。
補足させていただきます。

第36話 トラブル発生そして、また・・・(前書き)

【 小声もしくは思考の言葉】

第36話 トラブル発生そして、また・・・

クロスベル・南口バス停

ロイド「この時刻表によると、バスが来るまで10分後ってところか・・・」

エリイ「待っていればすぐに来るわね。ウルスラ病院が、行くのも久しぶりね」

ロイド「ああ、俺もそうだよ。ほんとに直ぐに行きたかったけれど、仕事が忙しかったからな」

エリイ「あら？」

ランディ「病院に行くって、どこか具合でも悪いのか？」

ロイド「いや、知り合いが勤めているんだ。ずいぶん世話になった人で戻った挨拶をしたかったんだけれど、お互い忙しかったから先延ばしになっていたんだ」

エリイ「なるほど、そうだったんだ」

ランディ「勤めているってことは医者か何かなのか？」

ロイド「いや、看護師をしている人だよ。若手のまとめ役で毎日忙しいみたいだよ」

ランディ「！看護師って事は・・・アレか？もしかしてナース服を着て優しく検温してくれるお姉さん？」

ロイド「へっ、まあ仕事着だからナース服は着ていると思うけれど」

ランディ「そのお姉さん、幾つ？」

ロイド「俺の5つ上だから23歳かな。うちの隣に住んでいて姉さんみたいなのだったよ」

ランディ「美人？」

ロイド「うーん、綺麗な人ではあると思うけれど・・・」

クロウ「美人だよ」

ロイド「ランディ「へっ？」

クロウ「前に見た時美人さんだったよ」

ロイド「面識あったの？」

クロウ「たまたま病院に療養している知り合いがいてね。その時に遠目で見た事があるだけさ」

ティオ「・・・」

ランディ「2歳年上でナース服の美人さんか・・・。ストライクど真ん中。よーしみなぎってきたぜい！！」

ランディ「いやー俺は幸せだな。お前みたいな親友マフダチと巡り会う事が出来て。というわけで紹介ヨロシク」

ロイド「あんな……」

エリイ「はあ……これだから男子って」

ロイド「ちょ、そこで俺も入れないでよ」

エリイ「ティオちゃん。どうかしたの。さっきから黙っているけれど」

ティオ「いえ、病院は少々苦手で。消毒液の匂いとか、注射がちよつと……」

ロイド「そっか。なんだったらティオは……」

ティオ「問題ありません。少し苦手と言うだけで嫌いではないので。来なくても良いとか言ったら怒りますよ」「ジト目がロイドに突き刺さる。」

ロイド「言わないって。【危ない、危ない。気をつけないと】」

ティオ「それに私もロイドさんの知り合いに会ってみたいですし……この前通信器で嬉しそうに話していた相手ですよね？」

ロイド「どうしてそれを」焦るロイド。

エリイ「ロイドのお姉さんみたいな人が。会うのが楽しみになっ

て来たわ」

ランディ「おお、どっかかっていうとメインイベントになりそう
だぜ！」

ロイド「あ、あくまで捜査優先だからな」

クロウ「焦るとやましい事があるって思われちゃうぞ」

ロイド「そんなの無いって……」

〜30分経過〜

エリイ「来ないわね。どっかしたのかしら？」

ランディ「おいおい、ロイド」。10分後に来るって言ってな
かったっけ？」

ロイド「俺に言われても……」

クロウ「でも妙だな。バスが来るのが遅すぎる……」

青年の声「ああ、やっぱり来ていない。困ったなあどうしよう。

こっちから通信を入れても何の返事もないし」

ロイド「あの〜どうかしたんですか？随分と遅れているようです
が」

青年「どうもトラブルが起こったらしいんです。一度バスの運
転手から連絡があったんですが、途中でブツリと切れてしまってそれ

つきりなんです」

青年「どうしようか。警備隊に連絡するのもなあ。やはりここはギルドに頼もうか」

ロイド【みんな、いいか？】

エリイ【ええ、分かってる】

ティオ【ふう……仕方ないですね】

ランディ【ま、これも巡り合わせだろ】

クロウ【また歩きですか。まあいいですけど】

ロイド「あの、その役目自分たちに任せてくれませんか？」

青年「へ、君たちは……？」

ロイド「クロスベル警察、特務支援課の者です。これから捜査任務で医科大学に向かう所でした」

青年「えっ、君たち警察？そっか雑誌で見た事あるよ。警察がギルドみたいな市民サービス始めたって」

ロイド「厳密にはそうではないんですが。バスの様子を見るぐらいだったら出来ると思います」

青年「そっか。それだったらお願いしようかな。なんだったら遊撃士の支援も頼んでおくかい？」

ロイド「い、いや。大丈夫だと思います。みんな行こう！」

第37話 再会 (前書き)

戦闘が紙で申し訳ない

第37話〜再会〜

医科大学に向かって徒歩で歩いていると遠くにバスが見えた。が・
・・・。

ロイド「あれは……?」

ランディ「チツ、予想通りか」

そこには今にもバスに襲いかかりそうになっている魔獣がいた。

運転手「ひいつ、なんでこんな時に魔獣がつ。ああ女神よ。エイトスお守りください」

ロイド「大丈夫ですか……!警察です。撃退するのでバスの中に入れてください」

戦闘態勢を整えて人間の2倍はありそうな魔獣に向かって行く支援課。

ロイドがトンファーで叩き、エリイが援護射撃をする。ランディも突っ込み斬りつける。だがあまり効果は無いようだ。魔獣が力を溜めはじめた。

クロウ「なにか嫌な予感がする。どうにかできないか?」

ロイド「なんとかやってみる。はあ〜タイガーチャージ!!」
闘気を纏ったロイドが一匹の魔獣に跳びかかる。少し怯ませる事が

出来たようだ。

もう片方がアーツを唱え始めた。

クロウ「こちらは任せろ【力をセーブしてっ】」「黒い球体が眼前に現れ空間ごと抉り取る。部分的にはなく魔獣ごと消したので、グロテスクにはならなかったようだ。がメンバー啞然。

クロウ「えーっとやり過ぎちゃった・・・？」

ランディ「うん、まあ助かった」「洒落になってねえぞ【

ロイド「ふう、かなり手強かったな」

エリイ「かなり大きかったけれどどこから現れたのかしら？」

ティオ「どうやら森林地帯に生息する種らしいですが、何かのきっかけで街道に出てきてしまったのでしょう」

運転手「助かったよ」

ロイド「今の魔獣で足止めを食らったんですね」

運転手「エンジントラブルで動かなくなってそれを修理しようとしたら襲われたってわけさ」

修理を始める運転手を横目に。

ロイド「これは時間がかかりそうだな。交通課に連絡した方がよさそうだ」

ティオ「これも運命ですね」

クロウ「！気をつける。まだ魔獣は全部倒したわけじゃない！」
ランディ「おい！」

さっきの魔獣が5体バスの近くに来ていた。

ランディ「さすがに無理があるぞ。ロイド各個撃破に持ってくぞ」

クロウ「……………いやそれは必要無い」

ロイド「えつ……………」

元気な女の子の声「はあああああ〜！」棒術を駆使する女の子が登場。それに続くように黒髪の青年も支援課の前に飛び出す。

ヨシユア「エステル行くよ！」

エステル「うん！」

エステル・ヨシユア「「太極無双撃」」ヨシユアが斬り込みエステルの連撃が魔獣の足を止め最後は二人のクラフトで倒してしまっ
た。

ヨシユア「ふう、何とか間に合ったね。エステルのほうは大丈夫
？」

エステル「大丈夫。ヨシユアの切り込みのタイミングを作れてよ
かったわ。それはそうと……………えつとクロスベル警察の人たちか

しら？南口で交通課の人から話を聞いたんだけど」

ロイド「ああ、その君たちは……？」

エステル「いきなり現れて混乱させちゃったみたいね。初めまして！あたしはエステル。エステル・ブライトよ」

ヨシユア「僕はヨシユアと言います。遊撃士協会クロスベル支部に正式配属になったばかりです」

ロイド【やっぱり遊撃士、か】

ロイド「自分たちはクロスベルクロスベル警察、特務支援課に所属する者です。危ないところをありがとう。本当に助かったよ」

エステル「あはは、いいよ。あなたたちも結構やりそうだし余計なお世話になってちよっと思っただけけども」

ロイド「いや助かったよ。僕はロイド。ロイド・バニングスだ」

エリィ「初めまして。エリィ・マクダエルです」

ランディ「うっす。ランディ・オルランドだ」

ティオ「ティオ・プラトーです」ペこり。

クロウ「……あつと、ひさしぶり」

エステル「なんでここにいるのよー。そしてクロウなら一人でも大丈夫だったはずでしょ！」

ヨシユア「騒ぎすぎ……。久しぶり元気でしたか？」

クロウ「ああ、元気だ。働く場所は違うが近くにヨシユア達がい
て心強いよ」

エステル「もう……。支援課にいるとはアリオスさんから聞
いていたからあまり驚かなかったけれど遊撃士辞めちゃったの？」

クロウ「辞めた訳じゃなくて一時休業、疲れた」ゴキゴキと体中
の骨を鳴らしアピール。

ヨシユア「変わっていないので安心しました。そういえばどうし
てここに？」

エステル「あたしたちみたいに手配魔獣を倒しに来たとか」

ロイド「いや、そういうわけじゃないんだけれど」

エリィ「警察の任務でこの先にある病院に向かう途中だったの。
そこで丁度この騒ぎに出くわしてしまって」

ヨシユア「この先にある病院、確か“ウルスラ医科大学”でした
ね」

エステル「へえ、そんな場所があるんだ。じゃあこの場はあた
したちが引き受けるわよ。用事があるなら先に行っちゃったら？」

クロウ「助かる。よろしく」

ロイド「エステルさんにヨシユア君だっけ」

エステル「あ、呼び捨てで良いよ」

ヨシユア「お近づきの印にっことで」

ロイド「それじゃあエステル、ヨシユア。導力バスの事はお願ひするよ」

ヨシユア「ああ、また今度……」

閑話〜その後〜

エステル「そういえば『特務支援課』だったけ？遊撃士と、似たような事をする部署って聞いたんだけども」

ロイド「うっ」

エリイ「そ、それは……」

ティオ「まあ、あなたが間違いではありませんね」

クロウ「パクリって言うふうに思えるかもな」

エステル「そっか……へへ、何だか嬉しいな」

ランディ「嬉しいって。そりゃあまたどうして？」

エステル「だって、似たような志で仕事してくれるんでしょ？それって要するにお仲間みたいなものじゃない。えへへ、今後ともよろしくね」

ランディ【こりゃまた……】

ティオ【お人好しはロイドさん以上ですね】

エリイ【何だか眩しいくらいね】

ロイド「ははっ、ああ。こちらこそよろしく頼むよ」

クロウ「さすが“太陽の娘”だ。ヨシユア、エステルは変わって
いないな？」

ヨシユア「そうですね。これに僕も助けられましたから……」

クロウ「もう一人で消えるなんてことはしないようにな。エステルが一番悲しむだろうし俺も親友としていなくなったら悲しいから
な」

ヨシユア「はい、心に刻んでおきます。ところでちょっと話良い
ですか？」

クロウ「どうした？」

ヨシユア「3カ月ぐらい前ですが僕たちと闘った事ありませんか
？」

クロウ「ん？真剣勝負でってことか。クローゼにも聞かれたけれ
ど……どこでだ？」

ヨシユア「詳細は省きますがとある事件に巻き込まれた時に、黒
騎士と言つのと闘ったのですがその横に対となる白騎士がいました
それがクロウの闘い方にそっくりだったんです」

クロウ「ふむ、今のところ分からないな。誰かが模倣していたの
かもしれないし」

ヨシユア「そうですね。でも凄くそっくりだったんです」

クロウ「わかった。今度また話そう。一緒に酒でも飲みながら・・・」

ヨシユア「ええ、そうですね。では気を付けてください。クロウには必要ない気遣いかもしれませんが・・・」

クロウ「その気持ちだけで嬉しいよ。そっちも体につけてな」

閑話〱その後〱(後書き)

外伝に対する伏線です。書くか書かないか微妙です

閑話〱道中での会話〱(前書き)

オリジナル会話

閑話〱道中での会話〱

エステルたちと別れた後、病院への道を歩いていたときの事だ。

ロイド「ク로우ってエステルたちの遊撃士仲間だったりするの
か？」

ク로우「ああ、そうだよ。リベールでは一緒に活動したものだよ」

ランディ「かなりの使い手とみたがどのくらい強いんだ？」

ク로우「んーっ、大まかに言うとエステルの親が凄く強くてね。
その影響を受けているのかもしれない」

エリイ「誰ですか？」

ク로우「名前を聞いた事があると思うがエステルはエステル・ブ
ライトっていうと自己紹介の時に聞いたと思うが、あのカシウスを
父に持つ子だ」

ティオ「驚きです。大きな事件を何度も解決へと導いた人物です
よね？」

ク로우「そうだ。【そしてティオの事件の総指揮者がカシウスだ】

ティオ「っ、そうだったんですか……」

ランディ「小さな声で聞こえなかったが……何か言ったのか？」

クロウ「いや、そこは聞き流してくれ」

ランディ「分かった……【色々と事情がありそうだ】」

エリイ「もう一人のヨシユアのほうはどんな人物なの？」

クロウ「ああ、詳しくは省くがカシウスがヨシユアの小さい時に養子に貰った子と聞いている。だから名前はヨシユア・ブライトだ」

ランディ「それだけじゃなさそうだが、これも聞かない方が良いのか？」

クロウ「そうしてもらえると助かる。こればかりは本人の口から聞いた方がいいかもしれない」

ティオ「遊撃士時代のこと教えて……？」

クロウ「んっ？俺の事か……」ティオ「うん」

クロウ「そうさな……。あいつらと初めて会ったのはエステルたちが正遊撃士の前の段階、準遊撃士の時だった。幾つもの事件を解決していったって楽しかった事や悲しい事、辛い事を乗り越えてとうとう正遊撃士になったエステルたちがいる」

ティオ「クロウのことを教えてほしかったんだけど……」

クロウ「気持ちの整理が出来てからならいくらでも教えるよ。そ

れでいい？」

ティオ「うん、分かった。待ってる」

クロウ「そうこうしているうちに、見えてきたぜ。ウルスラ医科大学が……！」

ランディ「おおっ、ここにナース服の美人なお姉さんがいるんだな。ロイド、早く行こうぜ」

ロイド「おおおい、それがメインじゃないだろー」

エリイ「まったく、男って言うのは誰も同じなのかしら……？」

クロウ「どうしてこっちを見る？俺にはいるから浮ついた気持ちを持っていないさー！」

エリイ「えっ、そうなの？硬派なのね」

クロウ「ああ、鈍感なのはロイドっぽいけれどもな。エリイも気をつけないとガブってやられちゃうぜ」

エリイ「そ、そんなことはないわよ。【たぶん……】」

医科大学に着いた支援課メンバー。どのような調査が待っているのだろうか……。

閑話〱道中での会話〱（後書き）

ガイとセシルは婚約者、これは原作どおりです。

これにクロウを付け足します。ガイとセシル、クロウは飲み仲間で親友という設定にしたいと思います。時期はガイとクロウがティオを元気づけようとした時期です。

そしてティオの事をセシルは知りません。初対面です

第38話 くぐらまーなお姉さん

自然に恵まれた空間にそびえ立つのは医科大学。

ランディ「ここが医科大学か。へえ、なかなか立派な施設だな」

ティオ「聖ウルスラ医科大学。大陸有数の総合病院にして医療研究機関として有名ですね」

ロイド「そんなに有名だったのか。確かにバスの本数が多いあたり利用者はかなり多そうだけど」

エリイ「元々は医療先進国であるレミアリア公国の協力で設立されたと聞いているわね。周辺諸国から重病人を受け入れているって聞くわ」

ランディ「おっと、ナース服のお姉ちゃんたちがいるじゃん！いやあー眼福、眼福」

クロウ「ランディは元気だな……」

ティオ「……」少し辛そうに顔を歪める。

ロイド「ティオ？大丈夫か……」

ティオ「問題ありません。それよりも知り合いの看護師に会わなくて良いんですか？」

ランディ「そうか、それもあつたな。ロイド！早く行こうぜ」

ロイド「なんでランディがテンションを上げるんだよ」かなり呆れ気味にランディに呟く。

ロイド「まあ、いいか。セシル姉だったら話もしやすいだろうし、受付で呼び出してもらおう」

クロウ「いよいよ……か。勝手に消えた事とか追及されそうで怖いわ。オーラが般若に見えるかもしれない……」

病院の正面玄関を通り、受付にロイドが話しかける。

受付嬢セラ「ようこそ、ウルスラ病院へ。今日は外来ですか？それともお見舞いですか？」

ロイド「あ。いえ。クロスベル警察、特務支援課のロイド・バニングスと言います。今日は捜査任務の為こちらに伺わせていただきました」

受付嬢セラ「あつ、警察の方だったんですね。捜査と言いますとやはり魔獣騒ぎの事でしょうか？」

ロイド「ええ、自分たちのほうでも調べるようにと警備隊から要請がありまして、関係者に一通り話を聞かせていただければと」

受付嬢セラ「ふふ、そうですね。病院長は留守ですし、看護師長をお呼びしましょうか」

ロイド「そ、その実はですね。個人的な知り合いがここに勤めて

いましてその人がお忙しくなければ、案内してもらえればと思いきして……」

ティオ【何だか緊張していますね】

ランディ【そりゃあ、ナース服のお姉さんで美人とくれば緊張するだろ！】

エリイ【それは貴方だけでしょう……】

クロウ【ところがどっこい。美人さんだぜ】

ランディ【マジですか？期待しても良いんですかっ！】

クロウ【おう、期待して待つとけ】グツと親指を突き出して身振りする。

女性の声「ロイド……？」

受付の横にある階段から降りてきた看護師がいる。それもかなりの美人だ。

看護師「……」

ロイド「あっ」

ランディ「おおっ……」

エリイ「綺麗な人」

テリオ「ぐらまーです……」

クロウ「変わってないな【イカンイカン。俺はクローゼー筋だつてばー】」

受付嬢セラ「あら、セシルさん。こちらは警察の方たちで……」

ロイドが一步近づき看護師の女性に挨拶する。

ロイド「えっと、いきなりでゴメン。来る前に連絡を入れれば良かったかな」

看護師「……っ……」ガバッとロイドに抱きつく。豊胸な胸がロイドに埋まる。

ロイド「ちょ、セシル姉？」

セシル「やっと、やっと会えたわね。お帰りなさい。本当に久しぶりね、ロイド」

ロイド「う、うん。会いに行けなくてゴメン。しばらくずっと忙しくてさ。そ、それよりさすがに少し恥ずかしすぎるんですけどセシル「いいからこのままお姉ちゃんに抱きしめられていなさい。ふふっ、背もこんなに高くなって前に別れた時は同じぐらいだったのよね」

ロイド「そ、そりゃあ。育ち盛りの3年間だったし……」

受付嬢セラ「あ、あの〜」

エリィ【なんていうか……】

ティオ【想像以上に甘々ですね……】

ランディ【おのれ、ロイド！あんな素敵なお姉さんと……！】

クロウ【はいはい、ランディはちょっと静かにしておこうね。せ
つかくの再会なんだからさ】

再会を言ふ二人を引き離れた後、場所を変えて来た理由を話すの
であった。

第39話 暴走癖 (前書き)

セシルもいいと思う自分がいる・・・。

第39話 暴走癖

セシル「初めまして。セシル・ノイエスと言います。ふふ、どちらかと思っただけどロイドの同僚さんだったのね」

エリイ「は、はい。エリイ・マクダエルです」

ティオ「どうも・・・ティオ・プラトーです」

ランディ「ランディ・オルランドっす！お見知りおきを！」

クロウ「・・・」

セシル「よろしくね。と・こ・ろ・で貴方はどうしてここにいるのかしら・・・？」

クロウ「ロイドと同じ職場で働いているんだよ。偶然にも、ね」

セシル「音信不通なのはいただけないけれど、無事に元気な姿見ただけでも良かったわ。はあそれにしても、私って本当に慌てんぼうね。てつきりロイドが彼女を連れて遊びに来たのかと思っちゃったわ」

ロイド「ちょ、何を言い出すのさ？」

セシル「だって、3年ぶりでしょう？彼女の1人や2人は作ってお姉ちゃんに紹介してくれるのかなって・・・はっ、ひよっとして本当に付き合っているけど仕事だから隠しているとか・・・」

「ごめんなさい。悪いことしちゃったわね？」

ロイド「あのね〜」

セシル「それで、どっちと付き合っているの？エリイさん？テイオちゃん？それとも2人いっぺんにか・・・」

ロイド「だから違っつて！」

セシル「はっ、もしかしてその彼と。ううん、私もそういつのには理解ある姉でありたいから全力で応援させてもらっつわっ！」

ロイド「いや、そこは反対するところだから！」

クロウ「暴走するところは変わっていないんだな〜」

エリイ「あれは昔からなの？」

クロウ「ああ、変わってない。あの時も・・・」

セシル「コホン！クロウ〜何を言おうとしたのかな？」さっきは見えなかった般若が見え隠れしている。

クロウ「なんでもありません。ただ昔話にちょっと花を添えようとしただけです！」

セシル「それならいいのよ。それで魔獣騒ぎについて来たんだっ
たわね？」

ロイド「あ、うん。詳しい話を聞きたいんだけども被害者から

話を聞ける？」

セシル「ちょうど休憩時間だから案内するわよ」

セシルに連れられて被害者の病室まで、案内してくれることになった。

第40話 調査・前編

被害者の病室

医師「ふむ、経過は良好のようだね。うん、これなら明日にでも退院できそうだ」

研修医の青年「ほ、ほんとですか？」

医師「うん、嘘は言わないよ。ふふ、退院したら覚悟するといい。君にやってももらう仕事は山ほど用意してあるからね」

研修医の青年「！ちよ、ヨアヒム先生？病み上がりの人間にそんな殺生な……」

医師「裂傷と打撲と捻挫ぐらいで情けない事言いなさんな。逆にしこたま休んで体力が有り余っているだろう？うんうん、これまで以上にバリバリと働けるだろうさ」

研修医の青年「先生ってよくSって言われませんか？」

医師「うーん、僕としてはMだと思うんだがね」

病室の扉が開きセシルらが入ってくる。

セシルの声「もう、二人とも何の話をしているんですか？」

医師「おや……」

研修医の青年「あっ、セシルさん」

セシル「お2人とも、他の患者さんがいるので変な話をしてはだめですよ」

クロウ「それ以前にセシルも暴走していたような気がするが……」

セシル「なにかおっしやいましたか？」

クロウ「いいえ、何も！」

エリイ「クスクス……」

医師「おや、そちらの方たちは？」

セシル「クロスベル警察の方たちです。魔獣騒ぎについて、リットンさんから直接お話しを聞きたいそうです」

医師「なるほど、そういうことか。となると僕はここらで退散したほうがよさそうだな。他の病室を回診してくるよ」

セシル「お疲れ様です。サボったら駄目ですよ。水辺で釣りとか……」

医師「ギクツ。いやいや、滅相もない。それじゃあ失礼……」
人のよさそうな医師がそう言ってロイドたちの横を通り抜けて病室を後にする。

ロイド「えつと、今の人は？」

セシル「ヨアヒム先生と言って准教授をされているかたよ。とても優秀な先生なのだけれど少し趣味人すぎるというか……。それでリットンさん、お時間を頂いても大丈夫ですか？」

研修医リットン「ええ、それは構わないけど。でもどうしてクロスベル警察の人が？警備隊が調べていたんじゃないの？」

ロイド「それが警備隊のほうでも手詰まりになっただらしくて、自分たちも捜査協力することになったんです」

リットン「そうなのか。うーん、やっぱり僕が夢を見たと思われているのかな。それとも夢遊病？いやいや、そんなわけが」

エリイ「その、出来れば改めて詳しく聞かせて頂きませんか？」

リットン「あれは研修レポートを書きあげた深夜の事だった。その研修レポートと言うのが気難しいことで知られている教授の指導研修のものでさ、もう全神経を集中する勢いで徹夜で書いたもんだから正直、意識は朦朧としていた。意識は朦朧としているんだが気分はハイになっているというかそんな状況で夜風に当たっていると……あの声が聞こえてきたんだ」

クロウ「声……？」

リットン「記憶があるのはそこまでなんだ……。翌朝、用務員のおじさんがスタボロになって気絶した僕を発見してくれて、それで緊急入院して今に至ると言うわけさ」

ロイド「なるほど状況は把握しました」

ランディ「襲ってきた魔獣の姿ははっきりとは見ていないのか？」

リットン「いや、恥ずかしながらショックで気絶したらしく真っ赤に光る目と、白い牙、それと黒っぽい毛並みぐらいしか覚えてないんだ。ただ警備隊も確認していたけど狼っぽいと言われればそうかもしれない」

エリイ「その、傷のほうはどうだったんですか？」

リットン「右肩の所に牙で噛まれたような傷はあった。逆にそれ以外の傷は打撲とか捻挫ぐらいだね。多分噛みつかれた後にそのまま床に引き倒されたと思うけど……」

クロウ「なぜかそれ以上魔獣はリットンさんを襲わなかった。つまりそういうことだね？」

リットン「そうなんだよ。普通なら食い干切られてもおかしくないのに。おまけに場所が屋上だろ。警備隊の人にも胡散臭い目で見られちゃって……。しまいには夜中にフラフラ街道に出てそこで襲われたんじゃないかって疑われる始末で」

ティオ「でもあなたが倒れていたのは病院の屋上ですよね？」

リットン「襲われたショックでパニックになったとか……」

ロイド「それは無理があるような」

リットン「でも自分の記憶が曖昧って思っていた方が気が楽って

言うか。というか本当に病院の屋上に魔獣が出たのならその方が怖くないか？」

ロイド「ご協力ありがとうございます。こちらでも襲われた現場を調査してみます」

リットン「ああ、よろしく頼むよ。原因が分かって対策をとれるならそれに越した事は無いからね」

病室を出て屋上の襲われたところまでセシルが案内してくれることになった。

第41話〈調査・後編〉(前書き)

投稿できるときに纏めて投稿します。

第41話 調査・後編

（屋上）

ロイド「話を聞いた限りだと、この辺が現場になるのかな？」

セシル「ええ、リットンさんはそのベンチ前で発見されたわ」

ロイド「セシル姉、案内ありがとう。何か分かるまで一通り調べてみるよ」

セシル「うん、わかったわ。それじゃあみんな、調査のほう頑張ってるね」

ティオ「ありがとうございます」

ランディ「どうか朗報期待してくださいッス！」

セシル「クロウとはまたあとで話したいわね」去り際小声で話しかけてくる。

クロウ「機会があればいつでもいいよ・・・」多分自分が居なくなつたときの事でも尋ねられるんだろっと思いつつ返事をする。

ロイド「とりあえず屋上を重点的に調べてみよう。狼型魔獣が現れたという前提で侵入ポイントを何とか突きとめてみたい！」

クロウ「了解！」

調査の結果から言おう。高さがネツクな場所。飛行型魔獣なら説明が付く高い場所を除外して行って何とか侵入したであろうポイントを発見する事が出来た。でも、そこでも不思議なことがあった。それは侵入したと思われるポイントにほりりがかかっている、足跡を発見する事が出来なかったのだ。

それでも一通りの調査を終えたのでナースステーションに報告しに行くことにした。セシルを探していたロイドたちに看護婦長は3階にある病室に行くように勧めるので行くことにした。そこにいたのは……。

コンコン……。

ロイド「入っても良い？」セシル「どうぞ」

ロイド「師長さんからここにいるって聞いてさ。そのお邪魔だったかな？」

セシル「フフ、大丈夫よ。シズクちゃん、この兄さんたちが今、話していた人たちよ。クロスベル警察に勤めている正義のお巡りさんなの」

ロイド「せ、正義のって……」

エリィ「さすがにそれは過大評価だと思えますが」

少女「クスクス。えっと、そのお仕事お疲れ様です。私はシズク、シズク・マクレインと言います」

ロイド「はは、ありがとう。ってあれ？」

エリイ「どこかで聞いたような……」

ランディ「マクレインって？」

セシル「ひよっとしたら面識があるかもしれないわね。シズクちゃんのお父さんはアリオスっていうんだけど」

ロイド「ええっ！」

ティオ「“風の剣聖”」

ランディ「あのオッサン、娘がいたのかよ」

シズク「えっと、みなさんはお父さんの知り合いですか？」

ロイド「知り合いと言うか前に危ないところを助けてもらったんだよ」

シズク「そうだったんですか。うちのお父さん無愛想だからみなさん気を悪くしたりしていませんか？」

ロイド「そ、そんなとんでもない！こんな凄い人がいるんだって身が引き締まったって言うか」

エリイ「厳しいけれど思いやりがあって頼りになりそうな方だったわ。素敵なお父様ね」

シズク「えへへ、ありがとうございます」

セシル「シズクちゃんはお父さんっ子だものね。そのくせお父さんが訪ねても、遠慮してあんまり甘えないし“お父さん大好き”って言って抱きついちゃえばいいのに」

シズク「セ、セシルさんったらあ……」

ランディ【あの凄腕のオッサンが娘に甘えられている構図か】

ティオ【少し想像しにくいですね……】

クロウ「アリオスのことだからガチガチに緊張しそうだけれど……」

シズク「あなたはお父さんの事知っているみたいですけどどなたですか？」

クロウ「クロウっていうんだけれどひょっとしてアリオスから何か聞いていたりする？」

シズク「はい、『どうして遊撃士辞めたんだ』って愚痴をこぼしていました。“彼”がいればクロスベル支部も安泰なのにとってこぼしていたので凄く印象に残っていました」

クロウ「そっか。アリオスには俺のほうから理由言っておくよ」

セシル「それで例の件なんだけれど実はここにいるシズクちゃんが何か気付いた事があるらしくて」

ロイド「気付いた事？」

シズク「えっと、リットンさんが襲われた夜の事なんですけど、私眠れなかったから点字の本を読んでいてその時、悲鳴のような声が聞こえてきたんです」

ロイド「悲鳴……?」

エリイ「それでどうしたの?」

シズク「その少し気になったので、その窓を開けて耳を澄ませたんですけどそれ以上悲鳴は聞こえなくてそのかわりハッハッハッという息づかいみたいな音が聞こえて、しばらくしたらタンタンって何かはねるような音が聞こえて来てえっと、それで終わりです」

ロイド「そっか、その事は警備隊の人には?」

シズク「その私、ずっと夢を見ていたのかと思って……。さつきセルさんから話を聞いて初めてその事だっけ気付いて。ごめんなさい。もっと早くに言っていれば」

クロウ「大丈夫だよ」

エリイ「言ってくれてありがとう」

ティオ「しかし屋上で調査を裏付ける決定的な証拠ですね」

ランディ「ああ、最初の悲鳴つてのがあの研修医が気絶した時の音。そして狼型魔獣の息づかいとあの木箱とやりに飛び乗って逃げに行った時の音みたいだな」

シズク「そ、それと。私の空耳かもしれないですが、さっきの音

が聞こえている最中に何か、キーンってかすれた音がしたような気がしたんです」

ティオ「キーンとかすれたような音」

ランディ「ふむ、魔獣特有の独自の鳴き声か何かか？」

クロウ「……」

エリイ「その音はあの晩だけなのね？」

シズク「はい。あ、あのやっぱり私の空耳の可能性があるかも……」

ロイド「いや、貴重な証言をありがとう。セシル姉、色々と分かった事があるから報告させてもらうよ」

セシル「うん、わかったわ。それじゃあシズクちゃん。また夕食の時にね」

シズク「はい、お仕事頑張ってください。ロイドさんたちも調査、頑張ってくださいね」

ロイド「うん、ありがとう」

クロウ「また来るよ」

～廊下～

ロイド「セシル姉。その、彼女は……？」

セシル「うん。数年前の事故で目の光をね。でもまったく希望がないわけじゃないの」

クロウ【あれか……】

ロイド「そうだったのか」

セシル「でも健気な子でね。お父さん忙しい人だから滅多に会えずに寂しいでしょうにわざと明るく振る舞ってあなたたちも良かったら仲良くしてあげてね？」

クロウ「飲んで！」

エリイ「そうね、とっても良い子みたいですし」

ランディ「俺の素敵トークであの子を笑顔にしてやりますよっ！」

セシル「ありがとう。さてと、何か分かったんでしょ。改めて聞かせてもらっわ」

屋外の一時的資材保管場所から侵入した事を伝えると、防護用の柵が病院にあったのでそれを並べ緊急に対策を取る事が出来た。気が付くともう夕方……。

（正面玄関）

セシル「お疲れさまでした。これでみんなも安心できるわ。本当にあなた達のおかげね」

ランディ「いや、そんな」

ロイド「あまりたいしたことはしていないよ。魔獣が入り込んだことを証明しただけだからね」

セシル「でもそのおかげできちんとした対策を取る事が出来たわ。あなたたちだつたらいずれ、アリオスさんにも負けなくらいいい仕事をする事ができると思うわ。お姉ちゃんが保証してあげる？」

ランディ「か、感激ツス！」

エリイ「ありがとうございます。とても励みになります」

ティオ「頑張ります……」

セシル「ふふ、ロイド。お互い休みが取れたら改めてゆっくり会いましょう？お墓参りも一緒に行きたいしね」

ロイド「うん、そうだね」

セシル「あとは、エリイちゃんかティオちゃんのどちらかと付き合う事になったら報告してね。目いっぱいお祝いしちゃうから！」

ロイド「どうしてそうなるの？」

セシル「それじゃあ私はこの辺で。皆も気をつけて帰ってね。あとクロウとは早めに会いたいわ」

クロウ「りよ、了解です」

ロイド「それじゃあ、またねセシル姉」

帰りは復旧したバスに乗ってゆったりとした気分でクロスベル市に帰るのであった。その様子を一匹の白い毛並みの狼が見ていた事に気が付かず……。

第42話 新展開 (前書き)

説明口調で申し訳ありません

第42話 新展開

ロイドは朝目覚めるとセルゲイ課長からの端末通信により客人が来ている事を知らされた。そこにいたのは予想通りソーニヤ副司令と護衛の女性隊員だった。事情が変わったらしくそれを伝えに来たみたいだ。

状況が変わったのはロクに仕事をせず接待ばかりやっている自称警備隊司令のせいだった。三週間経っても魔獣の正体が判明しないことと、広範囲であるにもかかわらず被害がそれほど深刻でない事があげられた。ついに副司令の護衛をしている女性隊員の正体が明らかになった。

ノエル・シーカーと言う女性隊員の中で期待のホープとされている人物だった。そして警察本部の受付をしているフランの姉でもある。ここからは当事者たちの会話に耳を傾けてみよう。場面は支援課の調査結果に副司令が目を通すところから始まる。

ソーニヤ「……………」

課長「ふむ、なるほどな。どうだ、ソーニヤ。うちの小憎どもの手際は？」

ソーニヤ「期待以上ね。『神狼』の言い伝えに病院屋上に現れたルート。どうかしらノエル？」

ノエル「正直驚きました。やはり本職の捜査官は目のつけどころ

が違いますね」

ソーニャ「目の付け所と言うか発想法の違いでしょうね……。うん、決めたわ。あなた達には引き続き鉱山町方面の調査をお願いします。この調子だと思っても寄らぬ新事実が見えてくるかもしれない」

ロイド「こちらはそのつもりでしたが……」

ランディ「例の司令殿の命令を無視することにならないツスカ？」

ソーニャ「貴方達への要請まで取り下げるとは言われなかったもの。魔獣の手掛かりが判明次第、直ぐに行動に移れるようにする、それなら問題ないでしょう？」

クロウ「へえ、やり手だねえ」

ノエル「どうも魔獣たちに私たちの動きが読まれているみたいなんです。大人数で行動するよりも少人数で行動する方が良くもしれません」

ロイド「なるほど、とにかくこれから鉱山町へ行くつもりです」

ソーニャ「ええ、お願いね。何か分かったらタングラム門の副司令部へ連絡してちょうだい。それじゃあセルゲイ、例の話はまた後日にも」

課長「ああ、了解した。あんまり無理するんじゃないぞ？」

ソーニャ「ふふ、あなたこそ。ノエル、失礼しましょう」

ノエル「それでは失礼します」ソーニヤとノエルは敬礼して課長室を後にする。

ロイド「それにしても忙しそうだな」

課長「ま、無能な上司に振り回されているみたいだからな。それでいて共和国方面への警戒も怠らない。相変わらず貧乏クジをひいてるぜ」

クロウ「そうか……、課長と副司令は名前で呼び合っていたけど知り合いか何か？」

ランディ「そう言えばここに推薦してくれたのも副司令だったな」

課長「ま、昔馴染みってやつだ」煙草をポケットから取り出し火をつけ一服。

課長「そう言えば昨日は大変だったらしいな。今日は鉱山町へ行くみたいだがまた歩いて行くのか？」

ロイド「いや、昨日は色々と偶然が重なりました……」

エリイ「さすがに今日はバスで行こうと思っっていますが」

課長「そうなのか？クク、てっきり遊撃士あたりに見習っているのかと思っただぜ」

ティオ「遊撃士を見習う……？」

クロウ「まずは自分の足で歩いて周辺地域に慣れるってのが習慣になってんぞ。スタミナもつくし魔獣との実戦経験も積めて土地勘も得られると良い事づくしって訳だ！」

ティオ「もしかして昨日会ったエステルさんたちも……？」

課長「クク、その二人だがどうやら大した経歴の持ち主らしいぞ。なんでも去年起きたリベールの異変を解決するためにかなりの貢献したらしいって話だ」

ロイド「リベールの異変って！」

ティオ「王国中の導力が動かなくなっただっていう……」

エリイ「それが本当なら相当の実力者なのも頷けますね」

課長「このクロスベルではお前たちより新米だが、あつという間に追い抜かれて引き離されちまうかもしれないな。」

ロイド「分かりました。全力で捜査に当たります」

第43話 二度ある事は三度……

「マインツ山道」

ティオ「……………あつ」何か気付いたかのように立ち止まる。

ロイド「どうかした？」

エリイ「もしかしてまた何か聞こえた？」アルモリカ村でのセンサーに反応した事を踏まえて、ティオに聞いてみた。

ティオ「はい、センサーの感度を上げます！アクセス……………」

アオーオオオン……………。何かの遠吠えが皆にも聞こえたようだ。

ロイド「今の声は……………」

ランディ「微かだけど魔獣の遠吠えだろうな」

クロウ「ティオが気付かなかつたら俺たちも聞き逃しているところだった。どこらへんから分かる？」

ティオ「やはり、山道方面らしいです。北北西に40セルジュといったところです」

ロイド「北北西に40セルジュ、ってことは山道の途中あたりになるのか……………」

クロウ「つて」とは、今日も……」

ロイド「なあ、ティオにエリイ。昨日の今日で悪いんだけど……」

エリイ「ううん、気にしないで。これも巡り合わせでしょう」

ティオ「私も大丈夫です。それに今の遠吠えは何か語りかけるかのような……」

ロイド「語りかけてくる？」

ティオ「何かはつきりとした意志を感じます。すみません、はつきりと言葉にできません」

ロイド「そうか、どのみち警備隊が動けば、逃げられてしまう可能性も高そうだ。僕たちだけで何とか探し出すしかなさそうだ」

エリイ「そうね、頑張りましょう」

クロウ「なんだか、遊撃士のころに戻ったみたいだ……。はあ」
腰に手をやりさすりさすりとする仕草は何だか年寄りっぽくてエリイの苦笑いを誘った。

ランディ「そういえばクロウもリベールの異変に協力したんだよな？」
山道を歩いて間もない頃、唐突に話しかけてきた。

クロウ「そだよ。まあ俺は遊撃士というより助っ人みたいな立場でサポートしたぐらいだな。だから詳しい事はあの二人に聞いたら

「どうだ？」

ティオ「はぐらかされた感じがしますが、まあ今度根掘り葉掘り聞きたいと思います」

昨日とはまた違う山道を楽しい（？）ハイキングで歩いていると目の前に絶景が広がった。

ロイド「凄いな……」

エリイ「絶景ね。私たちの住むクロスベルってこんなにも美しいったのね」

ティオ「ここまで歩いた疲れが一気に吹き飛んでしまいます」

ランディ「しかし、大都会から少し離れるとこんな自然が広がっているとはなあ。なんつーか、変な自治州だよな」

ロイドとエリイは何かを考えるように黙ってしまつ。それを見たランディは……。

ランディ「おっと、悪い。けなすつもりではなかつたんだが」

ロイド「いや、言いたい事は判る気がする。外国の町で2年ぐら暮らしただけとそこと比べると、確かにクロスベルはアンバランスかもしれない」

エリイ「そうね、私の留学で色々な国を回ったけれどどこも伝統と美しい自然を大事にしている国ばかりだったわ」

ティオ「でも私はクロスベルが嫌いじゃありません。良い所も悪い所も含めて惹き付けられる感じがします」

ロイド「ティオ」エリイ「ありがとう」

クロウ「まっ、いろんな意味で刺激的な町だとは思っけどな」

ランディ「そうだな。俺たちみたいな縁もゆかりもない連中が何故か集まっちまうくらいだし」

ロイド「確かにクロスベルあつての特務支援課オレたちなんだよな」

エリイ「そう考えると悪い事ばかりじゃないわね！」

和む雰囲気か辺りを包んでいると……。

アオーオオオオオン……。

ロイド「また……！」

エリイ「今度ははつきりと聞こえたわね」

クロウ「どっから聞こえたか判る？」

ティオ「待って下さい。アクセス……。10セルジュ北西です。地図と照らし合わせるとちょうど山道の分岐点ですね」

ロイド「わかった。行ってみよう」

クロウ「こりゃあ、ティオが言うように何かを伝えたいんだろう」

か【それにしても異常だな。何が起きている？何を伝えたい？
よ】
「

支援課と神狼が会おう時何が明らかになるのか……。

第43話 二度ある事は三度・・・ (後書き)

テイオが“アクセス”と言っている時は魔導杖を使って探索している時です。これから明らかになりつつある事ですが、あることが原因で感応能力が人よりすぐれています。これからに期待して下さい。

あとクロウは神狼を知っています。ご都合主義だとか言わないでください。

第44話 仔猫 (前書き)

この話を投稿した後、登場人物の????の所に名前を入れておきます。

第44話 仔猫

マインツへの山道を歩いてみると、荘厳な滝が流れているバス停近くまで歩いてきた。右側には何やら坂道がある様子。

ロイド「ここが山道の分岐点か……」

ランディ「狼型魔獣の姿はどこにもないな」

エリイ「また他の場所に移動したのかもしれないわ。左のほうはマインツ鉦山町方面として、あちらのほうには何かあるのかしら？」
反対側を見て一言呟く。

ティオ「データベースにも該当する情報はありません」

クロウ「……【ヨルグ爺さんか】」

ロイド「クロウどうかした？」
考え込んでいるのを気にしたらしく訪ねてきた。

クロウ「いいや、なんでもないぞ。気になるんだったら寄り道すればいいんじゃないか？」

ロイド「そうだな。家があるなら狼型魔獣のことを注意すればいいし……」

程よく続く坂道を登りきったところにあつた建物は重厚な門に囲まれた大きな建物だった。

ロイド「ここは……?」

エリイ「随分、雰囲気のある建物ね。廃墟と言う感じでもないし誰かが住んでいそうだけど?」

ランディ「おっ、そこに看板があるぜ」

『ローゼンベルク工房、関係者以外の立ち入りを禁ずる』

エリイ「ああ、ここが……」

ロイド「エリイ知っているのか?」

エリイ「ええ、その筋では、有名な人形工房よ。高価なアンティークドールを手がける天才人形師がいると言われているわ」

ティオ「私も名前くらいは聞いた事があります。オークションで途方もない値が付けられるとか」

エリイ「ええ、幾つか見た事があるけどまさに芸術品と言う感じだったわ」

ロイド「天才人形師か。看板の警告といい、気難しそうな雰囲気だけど話を聞かせてもらえないだろうか?」

少女の声「おじいさんなら留守よ」

クロウ【やっぱりここにいたのか、レン……】

ロイド「え……」

エリイ【女の子……？】

ティオ【この工房の子でしょうか】

ドレスの少女「うふふ、こんにちは。お兄さんたち、だあれ？この工房に何か用かしら？」

ロイド「俺たちはクロスベル警察の人間なんだけど」

ドレスの少女「あら、警察のヒトなんだ。警察のヒトって街で見えたこと無いけど、こんな所にも見回りに来るの？」

ロイド「見回りってわけじゃないけど、この辺にいる魔獣について聞きたいと思ったんだ」

少女「どんな魔獣なの？」

エリイ「その、狼の姿をした魔獣なの。おじいさんから話を聞いた事は無いかしら？」

少女「ううん、でもさつき遠吠えみたいなのは聞いたけれど、それのこと？」

ロイド「そうだよ。おじいさんは留守って聞いたけど、ほかに工房に誰かいないの？」

少女「ええ、そうよ。夕方には戻ってくるって聞いたけど……」

「

ロイド「そうか、さっきも言ったようにこの辺を危険な魔獣がうろついているみたいなんだ。おじいさんが帰ってくるまでおうちの中に居てくれるかい？」

少女「別に構わないけど、お兄さんたちに着いて行くのも楽しそうね」

ロイド「へっ……」

少女「だってその狼さんとオニゴッコしてるんでしょ？それとも隠れん坊かしら？」

ティオ「確かにそう見えるかもしれませんが」

ランディ「面白いお嬢ちゃんだな」

ロイド「何があるか分からないから連れて行く事は出来ないんだ。だから家で待っていてくれる？」

少女「もう、つまらないわね。“彼”が直っていればタイクツなものも紛れるんだけど。仕方がないから今日はあっちに潜ってソバカス君と遊んであげようかしら。それともガラスのお城に行つて遊ぼうかしら」

エリイ「ガラスのお城……？」

少女「うふふ、こっちの話よ。そう言えばまだ名乗っていないかったわね。レンって呼んでちょうだい。本当はもう一人紹介したい子がいるんだけど、あいにく右足を怪我しておじいさんの治療を

受けているの」

ロイド「そ、そうなのか」

レン「その狼さん、凄く頭が良いみたいね。ちょっと遊んでみていけどレンはもう大人だからあんまりワガママは言わないわ。頑張ってね、支援課のお兄さんたち！」

ロイド「ああ、ありがとう」レンはそのまま工房の門をくぐって中に入って行った。

ロイド「あれ？なんで支援課ってわかったんだらうか？」疑問は尽きないようだ。

クロウ「何かで見聞きしたのかもな」

ロイド「まあ、どっちみちこちらには狼型魔獣は来ていなさそうだ。一旦分岐点まで戻らうか」

クロウ【ヨシユアに以前会った時レンを家族にしたいって聞いていたけど今の様子を見る限り二人から逃げているって所だらうか。いつか歩み寄れる時が来るのを願っているぞ、レン】

第44話 仔猫 (後書き)

これからの話は少し内容を省いて書く場合もありますが、重要なな
と思つ箇所は省かないようにしながら書きたいと思ひます

第45話「ファーストコンタクト」(前書き)

神狼登場

第45話　ファーストコンタクト

工房を後にした五人はそのままマイイツ鉱山町へと向かった。その先には綺麗な滝が流れており、吸い込まれそうな雰囲気を漂わせていた。そこを過ぎるとトンネルだ。そこでも狼の遠吠えが聞こえたためテイオに探ってもらった。

ランディ「トンネル道か、かなりしつかりした造りだな。こんな山中にあるって事は七耀石セブチウムの運搬用か？」

ロイド「ああ、そのはずだよ。たしかクロスベルが自治州として成立した前後に建造されたんじゃないかな」

クロウ「そうすると、おおよそ70年前ってところか……」

テイオ「クロスベルと言ったらかつては、七耀石の産地として有名だったそうですね？」

エリイ「ええ、以前はそれをめぐって帝国と共和国が争ったぐらだよ。今でも産出量は減っていないからとても重要な資源ではあるけど、採掘技術が上がったことで他国に有望な鉱脈が見つかったから昔ほど注目はされていないみたいね」

ロイド「そうだな、今のクロスベルと言ったら貿易と金融だろうし……」

アオオオオオオオン……。トンネルで反響しながらも遠吠えが聞こえてくる。

ロイド「またか」

クロウ「反響してるっ!」

エリイ「テイオちゃんどこかわかる?」

テイオ「はい、いきます。アクセス……。分かりました。トンネルを抜けた出口の先から聞こえたようです」

ロイド「分かった、行ってみよう!」

クロウ「この時期に現れるなんてやっぱりクロスベルが可笑しくなっているのだろうか。まっ、あとで……。聞けばいい話だし……」

トンネル内を徘徊している魔獣を倒しつつも出口を目指す。とうとう明るい光が差し込みトンネルを抜ける事が出来た。

ロイド「あっ!」

エリイ「いたっ!」

山道の崖の上から白い狼が一頭こちらを見下ろしていた。そして狼は悠然と五人の前に降り立つ。それをみてロイドとランディは自分武器を構えていつでも戦闘に入れる用意をする。

エリイ「白い毛並み、『神狼』の伝承のとおりね……」

ランディ「へっ、ようやく会えたな。ここで会ったが百年目、と

つと成敗してくれる」

ティオ「待つて下さい。その子、敵意を発していません」

ロイド「へっ……?」

クロウ「ロイドもランディも慌てすぎ……」苦笑いを浮かべるクロウがそこにいた。

ティオ「ここは私に任せてくれませんか？」

ランディ「お、おいつ。危ないじゃないかっ！」

ティオ「大丈夫です。やっと会えましたね。私たちに会いにきてくれたみたいですが、何か伝えたい事でもあるんですか？」

白い狼「ウオウ……」

ティオ「そう、やっぱり……」

エリイ「ティ、ティオちゃん？」

ロイド「行っている事が分かるのか？」三人はティオが狼と会話しているように見えて驚いている様子だ。

ティオ「言っていることが何となくわかるとい程度ですが、それで何を伝えたいの？」

白い狼「グルルルル……ウルウ、グルルルルウ……」

テイオ「えっ、それって？」

言いたい事は言った、だからもう用は無いと言わんばかりに崖を駆けのぼりあっという間に視界から居なくなつた……。

ロイド「テイオ、“彼”は何て言つてたんだ？確かに俺たちに何かを伝えたいみたいだつたけど」

テイオ「その、ニュアンスだけを伝えると『最後の欠片はこの先にはお前たち次第だ』だそうです。聞き取れなかつた所もありますが……」

ロイド「最後の欠片？」

テイオ「ええ、そのようなニュアンスでした。信じるも信じないもロイドさんたち次第ですが」

ロイド「ああ、そう言う事を言っているんじゃないって。『最後の欠片はこの先に』つまり一連の魔獣被害で不足していた最後の情報が全部揃うって意味じゃないか？」

エリイ「ちょ、ちょっと待って。テイオちゃんが聞いた言葉が本当だとしてもあの狼が言つた事そのまま信じても良いの？」

ランディ「ああ、各地を襲っていた張本人だ。そんな知能があるかはともかくダメしている可能性はねえのかよ？」

ロイド「どうやらさっきの狼は各地の魔獣被害とは別物だろう」

ランディ「おいおい、どうしてそうなるんだよ？」

ランディとエリイは狼の言ったであろう言葉を信じ切れていないようだ。まあ普通はそうなるよね。狼が違っつて言ってたなんて言ったらどこの病院紹介されちゃうよ。だがロイドには確信があるようだ。

クロウ「ふむ、色と外見そして、遠吠えが違つるところだろうか」

ロイド「クロウは捜査官としてやっていけるんじゃないか？」

クロウ「買い被り過ぎ。詳しい補足をよろしく！」

ロイド「村と病院では遠吠えは聞かれなかった。それに病院では黒い外見の狼にリットンが襲われている」

ランディ「なるほど、色が全然違つてわけか……」

ロイド「まあだからと言ってさっきの魔獣が犯人じゃないと断言はできないけどね」

エリイ「でも本当に違うのなら考えを改める必要があるわ。狼型魔獣は2種類いてそれぞれ別々に行動しているって」

ロイド「ああそうだな。そのうちさっきの彼も含めた白い狼が伝承にある『神狼』で」

ランディ「未だ尻尾を出していない黒いヤツが各地で悪さをしてた連中ってことか」

クロウ「いずれにせよ、白い狼の言う事を聞くならばこれから行くマインツに最後の欠片があるってことだろう?」

ロイド「そういうことだね、じゃあ急ごうか」

ランディとエリイとロイドが先を急ぐ中、ティオだけがクロウのそばを離れなかった。

クロウ「ん? ティオどうしたの?」

ティオ「クロウさんにはさつき、白い狼が最後に言った言葉分かりますか? 私には何のことかさっぱり分からなくて……」

クロウ「……聞き取れたよ。でも言っているのか迷うところだ」

ティオ「それは悪い事ですか?」

クロウ「そうだね。神狼は古いにしえからこの地に棲む神の使い手として知られている。だからその地にこれから起きるであろう良い事、悪い事をその都度教えているのだけれど……今伝えられた事は……」
「顔がくしゃつと歪む。」

ティオ「悪い事なんですネ……?」

クロウ「ああ、神狼は『大きな鐘の鳴る時虚偽なる平和が到来する』と伝えた」

ティオ「漠然としていますね」

クロウ「今のところでは何も分からないから心に秘めておくとい
い」

ティオ「わかりました。そうします」

第45話「ファーストコンタクト」(後書き)

最後の部分はちょっと書きたくなった部分です。まあ次回作で書く
かもしねません。

読んで下さる皆様に感謝を表明します。

閑話〱新たなる〱（前書き）

オリジナルです。クロウにも部下がいればどうなるかと思いきま
した。

時間軸はマインツに向かう途中です。

閑話〜新たなる〜

それは一本の連絡から始まった。巻き込まれたほうはたまったもんじゃないと思うかもしれない。

クロウ「はあ？もう一度言ってみい……！」

盟主「だから、貴方に一人部下を預けたいって言ってるの！」

マインツに行く途中で端末に電話が入ったから、取ってみると珍しい事に身喰らう蛇の盟主からだった。どうしてこうなったんだろうか？

〜回想〜

PPPPPP！おつ、電話だ。

クロウ「もしもし……」

女性の声「久しぶりです。元気にしてありましたか？」ちよつと硬い感じで電話に出たのは星辰の間で話したっきりの盟主の声だった。慌てて「ブチツ」と切ってしまったのは申し訳ないが、仕方ないだろう。切ってから汗がダラダラ出てきた。案の定もう一度かかってきた。

クロウ「ロイドたちは先に行っててくれないか？」

ロイド「ああ、いいけど」

ランディ「もしかして女性からのラブコールか？」ちゃかしたかのようなランディの返事にもあまりうまく応対できなさそうだった。

クロウ「察してくれ……」「尻すぼまりになりながらも、答えた。

ティオ「……」「ジト目でこちらを見られた。どうすればよかったの。

鳴りやまない端末を見て深い溜息が零れた。よしっ、覚悟を決めてっ……。

クロウ「もしもし……」

盟主「どうして切ったの？」やっぱり声が掠れて落ち込んでいるのがわかる。

クロウ「あーっ、つい切っちゃった。ごめん」

盟主「……いいですけど。あのー貴方をお願いがあるんですが聞いていただけませんか？」すごい低姿勢でそう聞かれた。聞く前から少し嫌な感じがしていた。

クロウ「どうした？」意を決して聞いたら、良い事ではなかった。

盟主「あなたに育ててほしい部下がいるのですが……」

クロウ「……はあ？」寝耳に水状態だった。もう一度無かったことにして電話を切ろうとまで考えた。

盟主「無かった事にするのは無しです」「どうして気付いたんだろ。

そして冒頭に戻る……。

クロウ「もう一度言ってみい……!」

盟主「貴方に一人部下を預けたいんです!」

クロウ「どうして俺に預けようとした?」「ちよつと感情が高ぶるのを抑えられなくなっている。

盟主「あのー、怒ってます?理由を言っても良いですか?」

クロウ「……できるだけ簡潔に頼む」

盟主「純真無垢の子に基本的な常識を教えてください!」

クロウ「別に俺じゃなくても良くねえ……?」「呆れながらも
そう言つと。

盟主「常識人がいないんですっ」涙声で言い切った。

考えてみると亡くなった人を除いて……ああいな〜と思
った。

クロウ「期間は?」「えっ預けても良いんですか?」「まだ詳細を聞
いていないからなんとも言えないが……?」

盟主「そうですね、孤児を拾ってきて執行者候補に育てようかと

思ったんですが、世の中の事を知らなさすぎるのでクロウ様にお願
いしようかと思ひまして……。期間はそれほど長くありません
が気に入ったらそのままでも構いません」

クロウ「それで、いいのか？・・計画も進んでいるんだろ？」

盟主「そちらは大丈夫です。貴方に被害が及ばないようにしてい
ますので……」

クロウ「分かった。で、いつ迎えに行けばいい？」

盟主「今からでも『星辰の間』でお待ちしておりますのでいつで
も来てくださいっ！」

クロウ「同僚に断つてからそちらに跳ぶ」

盟主「分かりました。では失礼します」丁寧な返事を聞いてから、
電話を切る。そして少し前方を行くロイドたちに追いつくために走
った。

クロウ「ロイドッ！用事が出来たからマインツには一緒に行く事
が出来ないんだが、それでも大丈夫だろうか？」

ロイド「ん？あー、大丈夫でしょ。でも、何が起きたかぐらいは
あとで教えてほしいな」

クロウ「了解だ。さつてと……」その場で手を広げ、地脈に
語りかける。

ランディ「おいおい、目なんか瞑っちゃってどうかしたんだよ？」

ティオ「ありえないぐらいの力がクロウさんのもとに集まっています！」慌てたようにロイドたちに伝える。

クロウ「よしっ、準備完了！ちょっとばかり“跳ぶ”だけだから・・・転位っ」その言葉のあとにはクロウの姿がなかった。

エリィ「ティオちゃん、クロウは何をしたの？」あり得ない様子に、おどおどしながら聞いた。

ティオ「・・・信じられない事ですが、クロウさんは転位したものとおもわれます。あたり一带にクロウさんはどこにも感知できません」

ロイド「そうか・・・。クロウにはまだ隠された能力があるという事か。さて気を取り直してマインツに行こうか！」

ランディ「しゃーないか、あとで聞けばいいだろうし」ランディはいつものように飄々としている。

ティオ「はい・・・。【クロウさんは人なのでしょうか】」

閑話〱新たなる〱（後書き）

書きちゃった感が漂っています。『転位』についてですが碧の軌跡に出ていたのもこれもありなのでは・・・と思います、入れました。次回は部下と初対面。【ロイドたちはマインツで調査開始と言った所でしょうか】

閑話〜部下〜(前書き)

オリジナルです。

閑話〱部下〱

一瞬のうちに星辰の間へと跳んだクロウは、正面にカンパネルラがいる事に気付いた。

クロウ「よっ、久しぶりっ」片手をあげて気楽に挨拶。

道化師「はい、お久しぶりです」こちらは少しかしこまった様子で挨拶を返した。

クロウ「用件は判っているな？」回りくどい事も面倒くさいのでそのまま用件に入る。

道化師「ええ、こちらの部屋でお待ち下さい」来賓用の部屋に通されて少しの間一人になった。

勢いで決めてしまったが、今になってどうしようか迷ってきた。がその思考も扉のノックの音で中断されてしまった。

コンコン・・・。クロウ「どうぞ」

道化師「準備が出来ましたのでこちらへどうぞ。この子です・・・」
「ロビーのように広い空間にいたのは、14歳ぐらいの女の子だった。異質なのを別にするると普通の子だった。」

クロウ「この子が預かってほしい子・・・か？」

道化師「はい、そうです。まだ名前はありません。？3510と
というのが執行者候補の候補として呼ばれていました。クロウ様が名

をつけてください。あと盟主に会って下さい」

クロウ「分かった。この子も連れて行って構わないのだろうか？」

道化師「ええ、クロウ様の者になった瞬間から少しだけ上位の立場ともなりますので・・・盟主に会う機会も出来ました」

クロウ「そうか、行くぞ」

少女「分かりました」俺の後ろを二歩ぐらい離れた所から着いてくる。

（星辰の間）

盟主「ようこそ、そしてありがとうございます」姿は出せないよのだが、声だけ聞こえる。その声は何だか嬉しさを含ませた声だった。

クロウ「礼はいらない。俺の気まぐれでこの子を預かる訳だ。どのくらいの戦闘能力を有している？」

盟主「えっと、あまり教えていませんが、元執行者ヨシユアの半分ぐらいかと・・・」

クロウ「そうか。で、教えた後は結社で働かせるのか？」

盟主「それも自由にしてください。時折、カンパネルラが見に行きますが期間などは決めていませんし、最終決定は本人次第ということでお願ひします」

クロウ「本当に執行者にする気があるのか疑わしいものだが、まあ俺も戦闘にはあまり加わらせたくないしな。こいつの自由に任せるか……。あと武器は何だ？」

盟主「カンパネルラからお聞きください」

クロウ「分かった。また来るよ、」！

盟主「お待ちしております」との声を聞くそれっきりだった。忙しいのだろうか。

くクロウにあてられた部屋く

クロウ「しかし、名前、ねえ……。」「ソファーに座る少女を見ながら、名前を付けようとしても何も浮かんでこない……。」「

クロウ「名前、何がいい？」

少女「……。？皆からは3510って呼ばれてた」首をかしげながら答える様子は普通だ。

クロウ「当て字にするか……。3をミ。5をコ。10をト。

でミコトにしよう。今日から名前をミコトとする！」

少女「ミコト？私の名前はミコト……。うん、ありがとう。

それであたのことは何て言えばいいの？」

クロウ「そう言えば自己紹介してなかったな。俺はクロウだ。年齢は20歳を少し超えたぐらい」

ミコト「じゃあ、兄様って呼んで良い？」

クロウ「うーん……、まあいいか。分かった、これからよろしくな。ミコト！」

ミコト「うんっ、兄様！」満面の笑顔で年齢相応の表情を見せる。

クロウ「そういえば武器は何を使う？」思い出したように尋ねる。

ミコト「私？私のはねえ、これだよっ！」持ってきた武器は投擲用のチャクラムだった。

チャクラム：真ん中に穴のあいた金属製の円盤の外側に刃が付けられており、投擲武器としては珍しく斬ることを目的としている。投げ方は二通りあり、円盤の中央に指をいれて回しながら投擲する方法と、円盤を指で挟み投擲する方法がある。 ウィキ使用

クロウ「そっか。じゃあ一つ約束すること」「真剣な面持ちに緊張するミコト。

ミコト「な、なに？」

クロウ「無茶はしないこと。必ず迷った時は俺に聞く事。それだけ……」

ミコト「無茶しないこと……、兄様に聞く事……うんっ、分かった」

クロウ「よし、良い子だ。さて戻るとしよう。マインツではどんな事が起きているだろうか。ミコトにとって初のお外だしな」

ミコト「マインツ？兄様それどこお？」

クロウ「これから知ればいいさ！あと結社の事は誰にも言わない事だ」

ミコト「はいっ、楽しみです」

新たな登場人物を入れたこの物語はどこへ続いて行くのだろうか。それは今の所誰にもわからない。

『ワ タ シ ヲ ミ ツ ケ テ』

クロウ「ん？誰か呼ばなかったか……」

ミコト「誰も言っていないですよ」

クロウ「そうか。気の、せいなのか？」

ミコト「ふふっ、変な兄様……」

閑話〱部下〱（後書き）

名前の付け方は某アニメからパク・・・参考にしました。安易と
か言わないでください。

オリキャラの情報

名前：ミコト 女性

年齢：14歳

由来：？3510という呼ばれ方からクロウが当て字で名前をつける。

身長：140cm

体重：書こうとしたら怒られた・・・。

性格：クロウに対して甘えっ子。戦闘中は一心不乱に動くが、争いは好きでない。

経歴：孤児だったところに結社に拾われそこで基礎的な戦闘能力を教えられる。柔軟であり教えられた事は一を聞いて十を知る、そんな感じで手のかからない候補の候補として育てられた。しかし結社だけでは十分でないと思いきろウに養育をお願いし聞き届けられた。このたび、部下と言うより義理の妹のように育てられる・・・はず。？予定

武器：チャクラム 前話参照 三枚のチャクラムを器用に扱う。
増えるかも。

戦闘能力：執行者時代のヨシユアの半分ぐらい。気配を隠すのが

上手で隠密にも役立てられると育てられました。

その他：新しい候補だったゆえに、結社の中でもあまり知られていない存在。クロウの部下として初めて世に出る。

オリキャラの情報（後書き）

一心不乱：心をひとつに集中し、他の事のために心を乱されない。
わき目もふらない。

閑話〱狼事件終了?&顔合わせ〱(前書き)

辻褄合わせで申し訳ないです。

閑話〱狼事件終了? & 顔合わせ〱

あれからミコトを連れて転位したのは良かったのだが、時間が思った以上にかかってしまっていて狼型魔獣の事件はほとんど終息に向かっていた。と言うのも、白い狼がマフィアの操った狼を威嚇で動けなくしている所に転位したわけで……。

クロウ「あちゃあ〱もう終わりかけ?」ミコトの手を握りながら転位した眼下には神狼が事件を終わらせていた。

ミコト「終わっちゃったね……。兄様の力が見れなくて残念」ショボンと落ち込むミコトの頭を撫でながら、崖の上に座って見物していた。

男性の声「クロウがなぜここにいる?」

少女の声「どうしてここにおにーさんが……。?」二人の声が近くから聞こえて来てミコトは戦闘態勢を取るがそれをクロウが静める。

クロウ「ん?アリオスにレンか……。俺としては二人がここにいること自体が不思議でどうしようもないんだがね。俺は用事を済ませてここに降りたら、お二人さんがいたってことだけだ」

アリオス「いや……。こちらも事の結末を眺めていただけですが……。」

レン「レンもここにいて見ていたらアリオスが来てたまたま一緒になっただけ」少しふてくされ気味でレンが呟く。

アリオス「ところでその女の子は誰ですか？普通の子ではないですよね？」訝しむのも無理はないだろう。チャクラムを構えてクロウを守るうとしているのだから。

クロウ「貰った？いや、預かり物。んーっ、しつくりこないなあ。ミコト……一応挨拶しておきなさい」面倒くさいんだって感じで丸投げする。

ミコト「兄様にミコトという名前を付けてもらった候補の候補です」はきはきと言葉を紡ぐミコト。

レン「っ……！」言った事が分かったらしい。

アリオス「なるほど、結社……ですか」アリオスも信じられないという雰囲気を出しながらも納得する。

クロウ「結社からってのは違うとは言い切れないが、育てて最終決定は本人次第だ。だから普通の子として接してやってくれ」

アリオス「……今のところ大丈夫そうなので信じておきます」

レン「レンも分かった」2人とも渋々ではあるが了承したようだ。これで当面の問題は解決した。あとは、支援課のメンバーと……クローゼだ、はぁ……気が重いつ。

クロウ「終わったようだな。そろそろ向こうと合流するわ。じゃっ！」短距離転位してロイドたちの近くに降りる。

クロウ「よっ、お疲れ様〜間に合わなくてごめん。ちゃんと訳を

話すから……」

ランディ「まったくよー、白い狼が来なかったら危なかったんじゃないか！」ちよいと興奮気味なランディ。気持ちは分からないでもないが……。

ロイド「まあいいさ……。ところで背中にくっついてる女の子は誰だい？」

クロウ「あとで説明するさ……」

〜一夜が明けて〜

ノエル「みなさん凄いです！まさか事件の真相を見抜いてそのまま解決するなんて！」

ソーニャ「ええ、正直驚かされたわ。出来れば大立ち回りする前に私たちを呼んでほしかったけど」

ロイド「その、すみません。警備隊の司令のほうからマフィアに情報が流れる可能性をつい考えてしまっ……」

ソーニャ「ふう、それを言われると辛いわね。でもあなた達の白い狼に助けられなかったらどうしたの？」

ロイド「それは……」

ランディ「正直危なかったツスね」

ソーニャ「そういうときはセルゲイに相談して私に直接話が行く

ようにするとか、色々やり方はあったでしょう。確かにクロスベルの現状には色々難しい問題があるけど、それでも自分たちだけで解決しようとするのはただの思い上がりすぎないわ」

ミコト【兄様、兄様！あの怖いねー】小声で呟く……。

クロウ【ソーニヤ副司令の言う事も分かるからミコトにもそのうち分かるようになるよ】

エリイ「返す言葉もありません」

ソーニヤ「まあ、小言はこれぐらいにしましょう。本当によく無事でいてくれたわ。それと私たちの代わりに事件を解決してくれて感謝します」

ロイド「副司令……」

ランディ「ハハ、改めて言われると何だかムズ痒いツスね」

ソーニヤ「これからも支援課あなたたちの働きに期待しているわね。さあクロスベル市までうちの車両で送って行くわ。ノエル、出発の準備を！」

ノエル「イエス・マム！」

（クロスベル市内）

エリイ「さすがに眠いわね」

ティオ「もう限界です……」

ランディ「何やかんやで、ほとんど完徹に近いからなあ」

ロイド「とにかく帰ったら、ひと眠りしよう。課長への報告はそれからだ。それとクロウと一緒にいる子についても説明してもらおうからな！」ちよっと最後のほうだけ言い方が強く感じたのは気のせいと思いたい。

クロウ「へいへい、俺も眠いんだけどなあ……んっ！この雰囲気は神狼？」

ミコト「兄様大丈夫？【あの古いビルの方角から清らかな風を感じるのですが】」

～支援課ビル前～

エリイ「あら？」

課長「よー、お疲れさん」煙草をプカプカ浮かばせる課長が外にいた。

ロイド「課長、どうしたんですか？」

ランディ「まさか、オレたちを出迎えてくれたとか……？」

課長「ハッ、そんな気色悪い事をするかって。ただまあ、事件の結末はソーニヤからの通信で聞いたぜ。初めての市外活動にしちゃあそこそこ頑張ったほうじゃねえか？」

ロイド「ど、どうも。【褒めているんだよな？】」

エリイ「それで課長は一体何を？」

ティオ「朝食後の一服にしては変な場所にいますね……？」

課長「いや、無理だろ。あんなのがいきなり訪ねて来たら、さすがに落ち着いて一服できねえよ」

ランディ「誰か訪ねて来てるんスか？」

課長「知らねえが、お前らの客じゃねえのか？妙に馴れ馴れしいといつかふてぶてしい態度だったけどよお」

エリイ「中に入ってみましょう」

クロウとミコトを除く四人は中に入っていく。

課長「お前は入らないのか？」

クロウ「ええ、感じた気配で分かります。それより許可を下さい」

課長「……その子か？普通とは違う子だったのは分かるが」

クロウ「ええ、預かって来たんですが義理の妹として世話したいんです」

課長「犬や猫じゃないんだからちゃんと最後まで世話するんだつたら許可するぜ」

クロウ「そのつもりです。ミコト。この人がこの建物の責任者の

セルゲイさんだよ。挨拶は？」

ミコト「兄様から紹介されたミコトと言います。よろしくお願ひします」クロウの背中に隠れるようにしていたミコトだったが、大丈夫そうなのを見てキチンと挨拶をした。これで課長の許可は取った。

中に入ると想定していた通り神狼が玄関に佇んでいた。ロイドたちは驚いてこれから仲間になるものの存在を眺めていたが、クロウは予想していたので神狼に“これからよろしく”と一言かけた。

ロイド「それで、クロウ？その子の事はどう説明するつもり？」

エリイ「あらっ、可愛い子ね。名前は？」

ミコト「……ミコトです」サッとクロウに隠れる。

クロウ「課長にはもう言ったんだが、妹のような存在だ。どう説明して良いもんだか、知人から世話を頼まれたから養育することに決めた。ただそれだけ！」説明短っ。

ロイド「ツアイト 神狼 が増えたばかりだというのに……何かあってもクロウが責任を取るんですよね！」

クロウ「そのつもりだ」揺るぎ無いクロウの様子にロイドも渋々頷いた。

エリイ「よかったわね？ミコトちゃん……」

ミコト「……ん」

クロウ「ほら、ミコト？挨拶をするんだよ！」優しく手で隠れていたミコトを前に出して四人＋一匹の前で挨拶させる。

ミコト「ミコトと言います。14歳です。よろしくお願いします」

その挨拶をきっかけに次々にロイドたちから挨拶が返ってくる。

クロウはそのままビルの外に出て、一息ついた。

クロウ「やれやれ。ロイドも頭、堅いんだから……。あとはクローゼか。秘密にはできそうにないし。まあ聞かれたら答えよう。うん、それがいい」

中から俺を探すミコトの音がする。行ってあげなくては……。

閑話〱狼事件終了?&顔合わせ〱(後書き)

神狼たちの午後 終了です。

これからも力の限り頑張りますので応援よろしくお願いします

閑話〱もう一人の難関〱（前書き）

クローゼに会いに行く前の段階です。オリジナルだとよく手が動き
ます。

そしてこの話を書きながらニコ動であがってる【碧の軌跡】のBG
M聞いていました。燃えた！！

閑話〱もう一人の難関〱

やっぱり、秘密はよくないよねっ！うん。って自分で完結しているけど私クロウはミコトの事をクローゼに言うか言わないかをすぐ迷っていた。が、悲しませるような事をしたくないと心に決めていたので休暇を取って会いに行くことにした。

〱課長室〱

コンコン…………。

課長「おう、開いてるから入って来い」

クロウ「失礼するよ。ちょっと休暇願いを出したくて来たんだけど……………」

課長「お前が休暇願を出すなんて珍しいな。何かあったのか？」

クロウ「恥ずかしい話、ミコトの事についてもう一人、話しておかないといけない人がいて遅くならないうちに伝えようと思ったんだが、その……………」

課長「ん？どうした」

クロウ「ああ、リベールまで戻らないといけなくて日帰りではないけないと思うから」

課長「そうか、分かった。お前も大変だな。許可しよう。だが口

イドたちに一言かけて行くといい。これから行くのか？」

クロウ「ロイドたちにも苦勞かけそうだし、これから・・・行くよ。それじゃあ」少し落ち込み気味に課長室の扉に手をかけて、ロイドたちがいるであろう場所に出て行く。

エリィ「どうかしたの？課長と話し込むなんて珍しいじゃない・・・」
「クロウに気付いたエリィが話しかけてくる。

ミコトには部屋で待っているように言っているからここにはいなかったが、それ以外の同僚はいたので良い機会だし休暇について話しておこうと思った。

クロウ「ああ、休暇を取った。理由はリベールに一時帰宅するためだ」

ランディ「いきなりだな」

ロイド「何かあったのか？・・・ミコト絡みか？」

クロウ「話が早くて助かる。その・・・引き取った事を言わなきゃならない大切な人が最後に残っていてね、有耶無耶にするよりは早く伝えようと思ってね」

ティオ「大切な人・・・ですか？あやしさ満点ですね」ジト目で見られる。

ランディ「女か？」ランディはいつつもエロい・・・。

クロウ「そうだ！何か文句でもある・・・？」「ちょっとぞんざ

いになってしまったかな。

エリィ「す、少しその女性について話してくれる？その……出来たらでいいんだけど」「ロイドたちを見るとランディを除いて真剣な表情で頷いていた。

クロウ「公表しないんだったら……」「と言つとまあまあ同意してくれた。

クロウ「少し年下の上流階級の子だ」「皇族って言ったらどうなるだろうか。

ランディ「もう少し詳しく……」「少しランディの位置が迫って来たような気がする。

クロウ「あー、えつと……。皇族だ」意をけつて言う。数秒たつてもなんのリアクションもないので四人のほうを向くと啞然としている表情を見せていた。

ロイド「皇族って……。クロウが前住んでいた所はリベール……えっ!」

エリィ「その、間違つたらごめんんだけど」「おそろおそろ尋ねてくるので正解言った。

クロウ「正式な名前はクローディア・フォン・アウスレーゼだ。今んところ内密に頼むな」

ランディ「言っても誰も信じないぞ。ってか何故に……」

クロウ「遊撃士の時に出会った。そして両想いになった。ただそれだけしか言いようがない。あとは帰って来てから詳細言うから・・・」と言うと階段を駆け上がり自分の部屋で待っているミコトのところに行った。

クロウ「ごめんな。みんなの許可を得たから行くつか？」

ミコト「遅いよ。でも兄様の大切な人に会えるから許すよ」プククッと膨らませた頬つぺたを見せながらも笑顔を振りまき、クロウの右腕にしがみつく。

クロウ「こつからリベルに転位するけど、超長距離転位だから・・・まあなんとかなるさ？」

ミコト「どうして疑問形？」

クロウ「一人では経験があるんだけど同行者がいるのは初めてだからさっ。どういう結果になるか・・・」ミコトを腕に絡ませながら考える。

ミコト「だったら、さ！」何かを思いついたかのように閃く。

クロウ「どうかした？」

ミコト「中距離転位を数回繰り返せばいいんじゃない？」それもそうだ。

クロウ「そうだな。ミコト、えらいぞ」左手でミコトの頭をなでると気持ちよさそうに目を細める。

クロウ「一報は入れとくか……。えっとクローゼはエニグマ
持ってたっけ？持っていないか。よし、サプライズでそのままリベ
ルいりするか。ミコト、俺のどっちかの腕に両手でしがみついて」

ミコト「うんっ！分かった」左腕にしがみついた。

そのままで階下へと移り、まだ呆然としているロイドたちに“い
ってきます”と一声かけて転位した。

閑話〱もう一人の難関〱（後書き）

・転位について。

クロウだけの移動アーツです。EP1000〱3000ほど使います。そして7属性が複雑に絡み合っているのでEPだけあっても行う事が出来ないとしました。穴があり過ぎる設定で申し訳ないです。

碧の軌跡も書こうか迷い中。書きかけが二作あるので中途半端は良くないですね……。処女作は一時停止にしようかな。

やっぱりファルコムさんの作品が好きなので二次創作書きたいです。

閑話〜到着〜(前書き)

オリジナルです。

閑話〱到着〱

何度か転位を繰り返して、やっとのことで王都までたどり着いた。城が見えた時の高揚感は無量だった。懐しさがこみ上げてくるというか……。

クロウ「とうとう来たな、リベール……！」少し興奮気味に言ったら近くにいた子供が引いたことは内緒だ。

ミコト「ここが前、兄様がいたリベール？」

クロウ「ああ、そうさ。これからグランセル城に行つて会えるかどうか聞いてくるよ」

ミコト「うん、分かった」良い返事を返してくる。

〱グランセル城〱

親衛隊A「止まれ！ここは一般の市民は立ち入り禁止と……なつて、おります……が。あれ？クロウ様ではないですか？お久しぶりです！」

クロウ「やあ！思い出してくれたようだなによりだが、“様”は付けなくていいって何度も言ってるじゃないか……？」

親衛隊B「ですが、クローディア姫の知り合いかそれ以上ともありませんと、色々と気になることがあります。クロウ様は堅苦しいと言いますがそう呼ばないといけないわけですね」

クロウ「……堅苦しいってわかってるんだっいたら直して欲しいがな……。今、クローゼには会えるか？」

親衛隊A「午前中は公務の為、離宮にて仕事しておりますので会うことはできません。ですが午後からならば会えると思います。伝言伝えますか？」

クロウ「ふむ、そうか……。いや、はっきりと伝えなくていい。それとなく午後の公務を無くしておくことは可能か？」

B「えっと、それは。内緒にしておいて驚かすということですか？」

クロウ「そうなるな。アリシア女王には伝えておくか……。アリシアさんはいるか？」

A「おります。庭園のほうでゆっくりしておられるはずですよ。ぞ中にお入りください。それでクロウ様の後ろにいる人は誰ですか？」今気づいたかのようにミコトのほうに注意を向ける。

クロウ「この子は俺の家族になる子供だ。預かったが義理の妹になるかもしれないんでね、クローゼにも話を付けておこうと思ってる……。」

A「そうですね……。それならば大丈夫ですかね。二人の入城を許可します。どうぞ」

城の正面に取り付けられた重厚な扉が開いていく。それに伴ってクロウとミコトは中に入る。

〜城内〜

ミコト「うわぁ〜、すっごく広いですね〜！初めて見ました」両手を広げてクルクルと回るミコト。

クロウ「そうだな……。久しぶりに入るが何も変わっていないな」

？「あれっ、クロウではないですか？」どこかで聞いたことがあるような声が。

クロウ「おっ、リシャールか。久しいな……。元気にしているようだね」

リシャール「ええ、陛下のおかげで順調に事が進んでおります。クロウは何故ここに？」

クロウ「クローゼに会いに来たんだが午前中はいないらしくて、だったら先にアリシアさんに会おうと思ってね」

リシャール「そうでしたか。後ろにいる子供は見たことがありますせんが……」

クロウ「結社からの預かりものだ。まあ危険は無いがね」ミコトをクロウの前に出してリシャールに見せる。

リシャール「そうでしたか。クロウのことだから心配はしていませんがそのことでクローディア姫に会いに来たんですか？」

クロウ「察するのが早くて助かるよ。ミコトを紹介したくてリベ

ールに戻ってきたわけさ」

リシャール「あなたも大変ですね……。さてと、久しぶりに会って話を聞きたいのは山々なんです。これから会わなければならぬ客人がおりました」

クロウ「そうか、少しの間だが話せてよかったよ。今度はR & Aリサーチに行くよ」

リシャール「ええ、お待ちしております。では失礼します」

ミコト「あの人は誰ですか？」

クロウ「ん？リシャールは少し前に起きたクーデター事件の首謀者だったが、恩赦を受けて許され違う民間の調査会社を立ち上げた人だよ」

ミコト「そうなんだ。でも凄く隙がなくてびっくりだよ」

クロウ「カシウスの弟子だからな。さつとと、テラスに行きますか！」

～庭園～

入口にいる親衛隊に挨拶を交わしテラスへと続く階段を登っていつてとうとう、目的の部屋へとたどり着いた。

コンコンッ……。

？「どうぞ、おはいりになってください」中から年配ながらもと

ても優しい声が聞こえてくる。

クロウ「失礼します。クロウです」一言声をかけてから扉をくぐるとそこにはアリシア女王が椅子に腰掛けていた。

アリシア「あら？クロウさん。お久しぶりね。クロスベルに行くと聞きましたがお元気そうでなによりですよ」

クロウ「ええ、私もアリシア女王の元気な姿を見てよかったです。今日ここにきましたのはクローゼに会いに来た訳なんですが・・・」

アリシア「あの子はエルベ離宮で公務の真つ最中ですよ」

クロウ「はい、親衛隊の方々に聞きました。それで最初にアリシア女王に許可を得ようと思ひまして・・・」と言つと後ろに控えていたミコトをクロウの前に出して女王に見せる。

アリシア「あら？この子はどうしたの？」不思議そうな表情でも嫌な雰囲気でないのが目に見える。

クロウ「はい。この子は私が預かった子でして、妹にしようかと思つたのでクローゼにも会わせてみようかと思つたんです」

アリシア「・・・でも、それだけじゃないでしょう？クロウさん。あなたは何かを隠していませんか？別に問いたださそうと思つているわけではないのですが。よろしかったらお話できる？」

クロウ「隠そうとしたわけではないのですが、この子は結社の執行者候補でして預かりものです。しかし私としては結社に戻したく

ないというのもありまして……」

アリシア「ふふふ、あなたはいつまでも変わらず優しいですね？
私はこの子の事を許可します」

クロウ「いいんですか……？」

アリシア「二言はありません。クロウさんはどうして呆然として
いるんですか？」

クロウ「あっさりと決まるとは思っていなかったものだから……
・」額に付いた汗を拭って深呼吸。あとはクローゼだけか……
。

遠くの方から聞いたことのある動物の音が。クローゼが飼ってい
る白ハヤブサのジークだ。ということはもう帰ってくるのか。

アリシア「クローゼが帰ってきそうですね。このままここにいま
すか？」女王も察しているようだった。

クロウ「おや？何も言わずとも分かったんですか？……少し
クローゼを驚かせようとしていたのに……昼食の時にでもアリ
シアさんが上手いこと言って紹介してくれませんか？そこらへんは
任せますので……」

アリシア「ええ、よろしいですよ。何て言っただって未来の……さ
んですからね」最後のほうは聞こえなかった。

クロウ「ミコト？クローゼにあわせようと思いましたがその前にサ
プライズを思いついたので隠れていましようか……」

ミコト「うん、わかった。兄様が何かを思いついたのね。クロ―
ゼってどんな人？」

クロウ「見てのお楽しみだよ。アリシアさん。また後で……」
擦り寄ってきたミコトの頭を撫でながらアリシア女王の部屋を後に
する。

くクロウ去った後く

アリシア「それにしても。ふふっ。あの子はとてもクロウさんか
ら大事にされているようですね。ままるで本当の兄妹みたいでした。
あらクロ―ゼとユリアが戻ってきたみたいね。きっとクロウさんを見
たら驚くでしょう。楽しみです……」

閑話〜到着〜（後書き）

アリシア女王ってどんな口調だったっけ・・・？優しく温厚そうな口調を書いたらこうなりました。閑話がありすぎて申し訳ないです。あと二話ぐらい閑話を入れてそのあと戻します

閑話くあっさり……く(前書き)

これで一応閑話を終えたいです。

クローゼット女王のことなんて呼んでいたっけ？

閑話くあっさり……

クロウが退出してまもなくユリアとクローゼがアリシア女王の部屋に入ってきた。

クローゼ「叔母様、ただいま帰ってまいりました」元氣よく部屋に入ってくる。その後ろからユリアも続けて入る。

アリシア「おかえりなさい。ユリアさんもご苦労様でしたね」労いの言葉をかけるのもいつものことなのだろう。

ユリア「はっ、ありがとうございます。何事も無くクローディア姫と帰還することができました」堅苦しい挨拶を交わしているのはユリア・シュバルツであり、王室親衛隊の女中隊長だ。

その様子を気づかれないようにテラスの外壁のでっぱりに張り付いて観察しているクロウとミコトがいた。

クローゼ「それにしても、叔母様の様子がいつもと違っていませんか？「目がいいことでもあったんですか？」目ざといクローゼ。将来は良い女王になるだろう……。

アリシア「ふふ、良いことですか……。ありましたとも」何やら期待を起こさせるような口調。

クローゼ・ユリア「??」何が起こっているのか見当もつかないのか、頭の上に疑問符が見えるなら沢山浮いているだろう。

アリシア「今日は珍しいお客様が来てくださってるのよ。それで少し浮かれていたのかしら」

ユリア「珍しい、ですか？」

アリシア「ええ、入って頂戴！」隠す気はないのだろうか。もっと焦らしてくれても思いのこころと思いなながらテラスに最初、クロウが降りる。

クロウ「っ！ク、クロウ？」目を見開いて久しぶりにあった両想いの男性に近づく。

クロウ「やあ！クロウゼ。元気だった？」

クロウゼ「ええ、元気でやっております。クロウはどうしてリベールに来たのですか？」

クロウ「ちょっとクロウゼに見てもらいたいものがあってね」

クロウゼ「私にですか？」クロウのはっきりしない態度が少し気に病むのだろう。段々と気分が冴えないのがわかるので早めに明かすことにした。

クロウ「ああ、事情が紹介したい子がいてね、ミコト？おいで・・・」テラスの外壁から少女が降り立つ。

ミコト「・・・」すぐにクロウの後ろに隠れてしまふ。

クロウゼ「この子は一体どうしたんですか？」

クローウ「預かった……」

クローゼ「それだけでは意味が分からないのではっきりとおっしゃってくださりませんか？」口調は丁寧だが少し怒ってきたのだからか。

クローウ「えっと、結社から預かった。それで俺のところまで最終的にどうなるかはまだ未定だが今のところ、帰す気は無いしそれに……」

クローゼ「それに、なんです？」

クローウ「それに気に入ったんだ。妹のような感覚があって守りたい存在が増えたって思った。勿論、クローゼは最初だけだね」ちょっと照れ隠しをしながらクローゼ以外の誰にも話したことがない感情を伝えた。

クローゼ「そうでしたか。貴方の交友関係が広いことは知っていましたが結社まで知り合いがいるとは思っていませんでした……」

クローウ「それでクローゼが良かったらなんだけど……」

クローゼ「育ててもいいかって事？それなら良いわ！」はっきりと言い放つ。

クローウ「はっ？クローゼもだが、アリシアさんも見極め早くない？」

アリシア「ええ、クローゼが選びそして貴方の存在を私も認めて

いますから心配はいりませんよ」

クローゼ「私もそうです。貴方だからこそって思うのもあるんでしょうね。うまく言えませんが大丈夫って考えています」

クロウ「はっ……」一気に脱力した。テラスの床にベタッと座り込んでしまう。

ミコト「兄様、大丈夫？」

クローゼ「兄様って……」笑いをこらえているようだがそれには嫌な雰囲気が見られない。

クロウ「ほらっ。ミコト、挨拶しようね？」クロウの肩にしがみつくようにいるミコトをクローゼ達に紹介する。

ミコト「えっと、ミコトです。14歳です、よろしくお願ひします」「ペコツと頭を下げてクローゼらに挨拶した。

クローゼ「うん、よろしくね。私はクローゼ。クロウの恋人……」
「よ」

ミコト「じゃあ姉様って呼んで良い？」

クローゼ「勿論よ。そしてこっちが……」

ユリア「ユリアといいます。クローゼの護衛をやっています。ミコト、よろしく」

ミコト「はいっ、よろしくお願ひします。ユリア姉様っ！」

ユリア「姉様っ?」カアツと顔が真っ赤っかになるユリア。これはレアだ……。

アリシア「さて、一緒に食事でもどうですか? クロウさん、これからの予定はありますか?」

クロウ「いえ、ありません。休暇をとってききましたので大丈夫です。緊急なことがない限り……」

クローゼ「では一緒に食事を取りましょうよ。クロスベルであったことを教えてください!」

クロウ「あまり大したことはありませんよ? それでもいいなら……」

こうしてこのまま、リベールに少しの間留まりクロスベルで生じた出来事について話し、盛り上がったのだった。

〜その後のこと〜

クローゼ「そういえば、同僚の皆様にはどんな方たちがいるの?」

クロウ「個性的な同僚だよ。面白い……」

クローゼ「ふうん。ねえ、ミコト。ホント?」

ミコト「ん? ホントだよ。胸がおつきなエリィや無口なティオ。それにエッチな話をするランディ。あとリーダーがね……」

クローゼ「へえ、エリイさんってどんな人なの？」

クロウ「ちょ、ちょっと。クローゼ？目のハイライトが消えているよ。そんなに親しい間柄じゃないから、安心してっ」

クローゼ「ワタシモイコウカナ。クロウダケジャ、アンシンデキナイシ……」

クロウ「いやっ、大丈夫だから。ミコトも変なふうに言わないのっ！」

ミコト「姉様面白いつ」ミコトの言葉を聞いてようやく元通りになったクローゼ。

クローゼ「はっ！わ、私はいつたい……」

クロウ「やれやれ、一苦勞だぜ。まっ、そんなクローゼも好きだが。俺がクローゼを捨てるなんてことは万に一つの可能性もないんだよ。このお姫様はそれが分かっているのかな】

クローゼ【もうっ、ミコトの冗談に引っかかったのかな。それにしてもクロウの事本当に好きになってよかった。でも、あの時“白騎士”に言われたことが少し心にチクリと残っているんだよね。クロウがどう思っているか知らないけど私は貴方と一緒に続けたいよお……】

閑話くあつさり……く（後書き）

手抜きと思われても仕方がないですが、時間軸はロイドたちが市長秘書を捕まえる夜までクロウはリベールにいます。

いつ外伝を書くかわかりませんが、伏線からするに少し暗い内容を書きたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7164w/>

碧い空に向かって

2011年10月26日04時09分発行